ハルオ「動けメカゴジラ」

蚕豆かいこ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一話　ゴジラ・アースさんとメカゴジラに怪獣プロレスさせたかった

二話　ついに降臨した宇宙超怪獣〈ギドラ〉。地球の半分を覆う巨大怪獣にはゴジラでさえ歯が立たずに敗北してしまう。さらにギドラは地球の生命エネルギーを吸収しはじめた。地球滅亡へのカウントダウンが刻まれるなか、ハルオたちは持てる力を結集してギドラに立ち向かう。

要約・ハルオを幸せにしたかった

ｐｉｘｉｖ様にも投稿しております

目　次

ハルオ「動けメカゴジラ」――――――――1
地球（ほし）を継ぐもの――――――――61

ハルオ「動けメカゴジラ」

「ハルオィ、いっしょ、いく」
　たどたどしい言葉遣いながらも、フツア族の巫女ミアナはくりくりと大きな瞳でハルオを見上げて伝えた。箔のような青く輝く虹彩だった。地球に巨大生物――怪獣が出現するようになる前、海というものは、こんな色をしていたのだろうか。ハルオは遠い記憶のなかに埋没した望郷の念に囚われた。
「すごい。われわれの言葉から言語体系を推測して、習得しはじめてるんだ。退化したなどとんでもない。彼らの知能は相当に高いとみていいだろう」
　だから、環境生物学者マーティン・ラッザリ少佐の驚嘆にも、ハルオはさほどの興味を惹かれなかった。
「でも、本当にそっくりね……」
　ユウコ・タニ曹長がミアナと、その姉マイナの相似形の顔を見比べる。一卵性双生児と思われた。一見すると見分けがつかない。
「たぶん、おれを助けてくれたのがミアナ、みんなを襲ったのはマイナだろう」
「サカキ大尉にはわかるのですか」
　ハルオに若き士官アダム・ビンデバルト少尉が関心を寄せる。
「にらみつけてくるのがマイナだ」
　たしかに、あどけない表情のミアナに対し、マイナは険のある顔つきをしている。
「ハルオ、行くぞ」
　技術士官でありながら、ビルサルド種の名に恥じず、この世に生を受けたときから軍人だったといわれても異論のない容貌魁偉な巨漢が顎をしゃくる。ムルエル・ガルグ中佐のその気安い所作にはハルオとの信頼関係がみてとれる。
「メカゴジラ……まさか生き残っていたとは！」
　おなじくビルサルド種の、こちらは正真正銘の軍事教官、リルエル・ベルベ少佐は、軍人としてのハルオの師といえる偉丈夫で、ガルグ同

様、その浅黒い砂岩のような顔には笑みが刻まれている。
ビルサルドたちはハルオからみても例外なく気が逸(はや)っていた。２０年のあいだ、恒星間移民船アラトラム号でおなじ釜の飯を食ったハルオがビルサルドにいだく印象は、巌(いわお)だった。いささか悲観的なきらいはあるが、それは冷厳な現実主義の裏返しであり、なにごとにも動じず、感情よりも論理をなんらの労苦なく優越させる合理主義者。それがビルサルドだ。いまのように感情を露わにしたところなど、はじめて目にしたといって差し支えなかった。
しかし、ハルオは彼らの変わりようもまた、まるで目に入らなかった。
（望郷の念だと？）
なぜそんな感情が胸に沸き上がってくるのだろう。まさにここが、２０年ものあいだ、帰還を待ち焦がれていた地球、故郷ではないか。なのにハルオの渇きはいまだ癒されないままだ。
（おれは……）
いま足を踏みしめている大地が地球だと認識できていないというのか？
ハルオは遠くへ視線を移した。
暗い緑に沈んだ森は、しかし、セルロースからなる樹木の集合体ではない。葉はナイフを折るほどに鋭利で、幹は金属の硬度と光沢。そこに住まう動物もまた銃弾を弾く鋼鉄の怪物ばかりで、人類のような炭素基生物の介入する余地はない。
頭上は青空の薄片すらもなく、陰鬱な濃霧に全天がくまなく蓋をされている。それが水分の凝結したただの霧ならどれほどましだったか。天空にわだかまる金属粉を仰ぐハルオの目は暗い。金属質の森から飛散される軽金の花粉は電磁波を乱反射させ、それが対流圏界面から成層圏を満たし、さながらチャフの効果を発揮している。地球のほぼ全域を包む白銀の霧のため、気密服(スーツ)内蔵の無線機程度では数キロ以内でなければ交信できない。
（まるで……）
地球とは別の惑星に降り立ったかのようだ、とハルオは唇を噛ん

だ。こうして気密服に身を固め、ヘルメットで密閉しておかなければ呼吸さえできない。

もし、地球の全大陸が、生身のままで生きていけない異質な環境へ変容しているとしたなら、この星をゴジラから取り戻すことにどれほどの価値があるのだろうか。地球はいまや他人の星も同然なのだ。

ハルオはその思いを振り払うようにビルサルド種の広い背につづいた。

◇

暗緑の密林が地平線のかなたまで途切れることなく横たわる。林立する金属の樹木のあいだを全長１０メートルに迫る金属の芋虫が縫うように這いずり回り、梢との擦過で火花を散らしながら上空より急襲した、やはり金属の翼竜に捉えられ、食い殺される。２万年前まで日本の丹沢と呼ばれていたこの森では、いまとなってはごくありふれた光景である。

丹沢山地は仏果連山、丹沢主脈、表尾根、丹沢三峰、大倉尾根、丹沢主稜、甲相国境尾根、石棚・同角山稜、大山周辺と丹沢湖周辺の雄峰、あわせて６６の山がその複雑な地形を形成している。いずれの山も数十万から数千万年という星霜をかけて、複数の大陸プレートが衝突し行き場を失った大地が隆起して形成されたものであるから、かならず山脈としてほかの山々と連なっている。

だから、その山は、まず、異様であった。丹沢山地を構成するいかなる山脈からも独立した、突兀（とっこつ）とそびえる孤峰である。むき出しの山肌は金属の光沢を帯び、うっすらと苔蒸している。嶮岨（けんそ）な稜線には、規則的な突起が並び、それは形状だけ見れば、巨大な柊（ひいらぎ）の葉にも似ている。

標高こそ３００ｍ程度しかないが、たった2万年では、地球の造山活動ではそれほどの山が新たに成立することは考えにくい。かつて６５００万年前の白亜紀後期に地球を襲ったＫ／Ｔ隕石は、衝突後３０秒でロッキー山脈とおなじ高さの山を形成したというものの、そのような宇宙的災害もなかったのである。

微細な震動。轟音が旧丹沢全域を震わせる。まるで大地と大気が

恐怖におののいているかのように。
麓から翼竜たちがわれさきに飛び立ち、逃げ惑う。
動きがあった。文字通りの動きだった。
森にうずくまっていたその山が、ゆっくり、ゆっくりと、しかし天に冲(ちゅう)するかのように伸びあがりはじめた。
畳まれていた腕は、樹齢数千年の大樹を撚りあわせたかのように太く、たくましい。
質量を支える両脚は、それだけで、霊長を僭称していた人類の繁栄の象徴だった超高層ビルなみの地上高と質量がある。
背部に生え揃う巨大な柊の葉に似た物体は、電磁パルス増幅器官たる背びれ。
大きく離れた山岳地帯で、爆音。土砂や硬質金属の木々が巻き上げられる。奔騰する土煙を割って浮上したのは、東洋の伝承に語られる龍のような長い体。波打つように現れ、それは山と一体であることが闡明(せんめい)する。あまりに長大な尾だった。
１ｋｍ近い尾が大地に叩きつけられ、直下型地震のごとき動揺に、悠久の歴史を閲してきた丹沢の山脈が鳴動する。
山巓(さんてん)が、とうとう姿を現す。
その横顔は、太古の地上を支配していた恐竜に類似した口腔構造を有していたが、犀利(さいり)な目で見れば、動物のように歯肉から牙が生えているのではなく、さながら木彫りの彫刻のごとく、口周りがそのまま鋭利な牙に形状を変化させているのだと理解できるはずだ。
深い淵のような穏やかな瞳には、確かな知性の輝きが宿っている。
それはまさしく顔だった。俗界を離れてこの世の真理を探究する老哲人に例えることもできる表情の頭部が、チャフの花粉に蓋をされた天空を仰ぐ。
頑丈な顎がひらく。
空気分子がイオン化するかのような大音声(だいおんじょう)。いちどでも耳にした生物は、けっしてその咆哮が脳裏から離れることはない。猛々しい雄叫びは、低く重く、原初の恐怖をかきたてる獅子吼(ししく)でありながらも、どこか荘厳な響きをともなっていた。

標高３００ｍ超の峯は、体高３００ｍ超の生物だった。人類から霊長の座を奪った巨神。怪獣すら殺す怪獣。現在の地球の支配者（ルーラーズ・オヴ・アース）。

人類は彼をこう呼んで恐れた。怪獣王――ゴジラ！

山塊のごときゴジラは、西へ向けて堂々たる前進を開始した。強靭な脚を踏み出すたびに地震が起きる。鬱蒼とした森林もゴジラの足首にすら届かない。弾丸も通さない重金属の木立が芝生のように踏み荒らされていく。進路上の鉄の芋虫や翼竜が悲鳴をあげて蜘蛛の子を散らすように逃げていく。３００ｍの高空にある神々しい顔には、有象無象への関心など素粒子ほどもない。

まさに、王侯の行進であった。

◇

遠望する霊峰富士は、２万年の星霜を超えてなお雄大なる山容をとどめていた。フツアがナノメタルを調達している場所は富士の麓にあるという。そこは２０年前、そして地球時間では２万年前、メカゴジラを建造していたプラントの位置と合致している。ビルサルドたちはますます高揚しているようだった。嬉々として急峻な渓谷を下っていく。ハルオたちは、滑落はもちろんスーツが傷つかないよう慎重に足場を探しながら進まねばならなかったが、先導するミアナとマイナはまるでふたりだけ重力係数が異なるかのように軽々と跳躍して、しばしば後ろを振り返っては――主として姉のマイナが――遅いという不満げな顔をみせるのだった。

ひらけた岩場に出る。もう富士まで１０キロもない。

奇声がこだました。ガラスを針で引っかいたような金切り声が降ってくる。ハルオたちは反射的に空を振り仰ぐ。

チャフの雲を背景として、醜翼がハルオたちめがけて急降下していた。翼種目のような黒翼をひろげた翼竜が、ヘビのように長い首の先端にある顎を開く。赤い眼が獲物をみつけた喜悦から業火のように燃え盛る。

「戦闘隊形！　遮蔽物に身を隠せ」

ベルベの指令にハルオらが流れるようにしたがう。つぎの命令で部隊の小銃がいっせいに火を噴く。しかし携行火器の火力では統一

射撃といえども鋼鉄の怪鳥には効果が薄い。現実的な交戦距離なら防弾衣も貫通するライフル弾が翼竜の体表で火花をむなしく散らす。悪竜は逆さの暴風雨のごとき迎撃も意に介さず、漆黒の落雷となって突撃してくる。ハルオたちが盾にしている巨岩を体当たりで粉砕する心算だ。やつならできる。

ハルオが仰角４５度の視線のさきに、肉食獣のごとき邪竜の口腔に生えそろった牙の連なりまで視認できた瞬間、視界を白銀が埋めた。遅れて、突風。蟻からすれば人間が腕を振っただけでも大気の乱れは強風となる。いまのハルオらはまさに蟻だった。

そのハルオは、しかし、スーツ越しに五体を叩く烈風とて、意識にのぼるに足る資格を与えることができなかった。しかるにハルオの意識は、すでにほかの事象が指をかける空隙すらないほどに壟断（ろうだん）されていたのである。ハルオら地球人のみならず、故郷をブラックホールに呑まれ、以降新天地をもとめて放浪の旅をつづけ、ついに地球へ到達したビルサルドらも、目が限界まで見開いて言葉をなくしていた。また、滅亡の危機から母星を捨てざるをえず、永きにわたって宇宙をさまよっていたというエクシフ種族、その神官を務めるメトフィエスは、秀麗な眉をしかめた。

ユウコが視点を固定させたまま尻を地へ落とす。

ハルオたちの眼前に、左右反対となったハルオたちが驚愕の顔を並べていた。それは極限まで磨きこまれた金属の表面が鏡のようになっているからだ。

ハルオたち全員を映してあまりある光輝く金属の巨塊があった。金属塊はハルオのいる岩場の左下から右上へ斜めに伸びていた。

全員の視線が上がっていき、ついには見上げるかたちとなる。

いと高き頂点では、闇色の翼竜が断末魔のうめき声を漏らし、硬質の軋り音とともに握り潰されるところだった。垂れさがる赤黒い首や翼が銀に染められていく。

白銀の救世主は、まぎれもなく金属で構成されたたくましい腕だった。指先には鉤爪。まるで、膨大な金属でゴジラを模してつくられたかのような造形に思えた。

「メカゴジラ……！」
ガルグの顔には高純度の驚喜があった。
金属の腕が水銀のように液化し、大地へと溶けていく。
「おそらく、メカゴジラは２万年経ったいまでも、ゴジラを倒せというコマンドを実行しつづけているのだろう」
ベルベが興奮をかくせない様子で推測する。さきほどの飛竜はその体組織の９７パーセントがゴジラ細胞と共通の因子から成り立っている。
「やはり、メカゴジラはいまも！」
ビルサルドふたりの目が輝く。足取りも軽くなる。
「わたしたち、ここまで」ミアナがハルオに告げた。ハルオを見つめる海色の目には気遣いが見てとれた。「気を、つけて」
ミアナはマイナのあとを追って引き返し、ほとんど断崖に近い岩場を妖精のように跳ねて駆け上がっていった。
姿を消す直前、ミアナが振り返り、ハルオに手を振った。ハルオは普段どおりの渋面ながら、命の恩人でもある少女の何気ない友愛の仕草を無下にするのも忍びなく、控えめに振り返した。ミアナはマイナに引っ張られて崖の上へ消えていった。
「なによ……」一部始終を見ていたユウコはだれにも聞こえないよう呟いた。
２０年前、ゴジラ抹殺を至上目的として、人類、ビルサルド、エクシフの３種族は、その全能を傾注して自律型機動戦闘兵器メカゴジラを建造した。
ゴジラもまたメカゴジラを本能的に自身の脅威と察知したらしい。完工してあとは起動するだけという状態にあったメカゴジラを破壊するため、太平洋から開発プラントのある富士山麓をめざした。
ゴジラは遠州灘から富士の裾野にある開発工場を熱線で狙撃。遠州灘と富士山麓のあいだにあった地形は高加速荷電粒子ビームの猛威によって掘削され、自然界には絶対に存在しない直線の一本道が形成された。
そのときの爪痕はいまもなお残されていた。永きにわたって風に

撫でられ、丸みを帯びているものの、半身をなくしたように不自然に削られた形状の岡阜（こうふ）から、富士の麓を望む。
「これは……」
眼前にひろがる光景にベルベが絶句した。ガルグも吐息したまま呆然と立ち尽くす。
ハルオも、自分の目が信じられなかった。
山麓にひしめきあうのは、直径数十メートルはある無数の球体。あいだを埋めるように林立する尖塔の偉容。
ハルオの目には、前者は地球で人類が隆盛を誇っていた時代に国家の経済活動を支える工業地帯の象徴だったコンビナートのガスタンク、後者は摩天楼のように映った。人工物であることは歴然だった。
「おまえには、この光景がなににみえる」
となりに立ったベルベが衝撃から思考を整理するように訊ねた。
「都市……か？」
ハルオが答えると、ベルベは大きく頷いた。「まさに都市だ。正確にいえば、２０年前にわれわれがこの地に造成したナノメタルの開発工場。ただし、あのときとは比較にならないほど大規模化している」
「しかし」ハルオには理解できない。「だれがこんな街を？　富士裾野決戦で開発プラントはそのすべてが破壊されたはず。フツアにはこんな都市を再建する技術はないぞ」
フツアは地下で穴居を掘って生活している。技術レベルは旧石器時代なみとみてよい。彼らにとって高層建築物の建造はロストテクノロジーである。
「メカゴジラだ……」
ガルグにハルオたちは視線をそそいだ。
「ゴジラに消滅させられたと思っていたが、メカゴジラは生きていた。そして、２万年の時を耐え忍び、周囲の物質をナノメタルに変質させ、増殖を繰り返しながら、自力でプラントを再建、いや再現したのだ。この街はまさにメカゴジラそのもの。メカゴジラシティとでもいうべきだろう」
「再現……」

ハルオはあらためて都市を眺望した。ドーム様の建造物にもビルにも明滅する赤色の電灯が設置されている。航空障害灯だ。衝突を回避させなければならない航空機など存在しないいまの地球では無用のものである。まさに機械的に再現された街だった。
「この都市すべてがナノメタルですか」
アダムも目を丸くしている。工業地帯と大都市が重なりあったようなメカゴジラシティは遠景がかすんでいて、とても全容がつかめない。総質量は尋常でないものとなるだろう。体高５０メートル、質量３万トンのメカゴジラを建造するのに、地球人類はビルサルドとエクシフから惜しみなく提供された科学技術と、資源・人手のあらゆるリソースをつぎこんで、５年かかった。目の前には、人類が２万年を費やしても精製できないであろう莫大なナノメタルがある。
「推定されるナノメタルの総質量は、ざっと１億２０００万トン」
ガルグに一同は仰天した。
「メカゴジラはずっと戦いつづけていたのだ。われわれが宇宙へ旅立ったあとも」
ガルグがビルサルド式の敬礼をメカゴジラシティに捧げた。ベルベも倣う。
「下りてみよう」
いうが早いか、ガルグは先陣を切った。
メカゴジラシティには、各建造物を結ぶおあつらえ向きの空中通路が網の目のごとく張り巡らされていた。フツアは禁域として都市へは足を踏み入れない。２万年のあいだ無人だったはずだ。
「いつかわれらが戻る日を待っていたのだ」
先頭のガルグにつづくベルベが何度も頷きながら呟いた。
「大気の組成は、窒素７８％、酸素２０．９％、残りは不活性ガスと二酸化炭素。生物的、化学的汚染もない」
ヘルメット・マウンテッド・ディスプレイの情報に目を走らせたガルグが、歩きながら振り向いて、
「ヘルメットを外してもいいぞ。ここの空気はわれわれの呼吸に適した成分に調整されている。環境維持の指令も遂行しているようだ」

まず自らがスーツの密閉を解いた。ハルオたちもおそるおそるヘルメットを解除する。息苦しさは感じない。むしろ呼吸のたびに全身に活力がみなぎるようだ。アラトラム号の船内で呼吸していた、ろ過にろ過を重ねた空気とは違う。組成はおなじでも、宇宙船という閉鎖環境と、曲がりなりにも外気である解放空間との差異が、そう思わせるのだろうか。

シティ中心部にある摩天楼からビーコンが発信されているという。回廊との接合部がぶきみに口を開けている。

塔内部の中心にあたる伽藍で、ハルオたちは、きょう何度めかの驚愕に貫かれた。

崩落した瓦礫に、巨大な金属の構造物が倒れこんでいる。ハルオには最初それがなにかわからなかった。かつて怪獣出現時代以前の地球で、南米はナスカとフマナ平原の盆地に古代人が描いたとされる地上絵のごとく、あまりにもスケールが大きすぎて、全体像が把握できないためだった。

それは、金属板が幾重にも積み重なったような造形ながら、四方八方にエッジが飛び出しているさまが深海の暗闇にうごめく棘皮動物を彷彿させ、その後方へは頚部が続いていた。

まさしく、ナノメタルで形作られた巨大な頭部だった。かつて全人類が一縷の望みをかけた最後の切り札。最強の怪獣王を模した、機械のゴジラ。

「メカゴジラ!」

「やはり生き残っていた……」

ガルグとベルベがあふれでる情動のまま声を漏らした。死別したと思っていた戦友と再会したかのように愁眉(しゅうび)をひらく。

愕然とするばかりのハルオたちをよそに、ビルサルドのふたりはさっそく起動を試みた。端末からコントロールユニットへ無線接続する。

変化はすぐに起きた。機関部が始動する轟音。頭部の両目に赤い輝きが灯ったかと思うと、伽藍内部の壁の面発光の照明が息を吹き返し、暗闇を駆逐していく。ナノメタルの都市を掌握するメカゴジラ

が、あるじの呼びかけに応えて目覚めの凱歌をあげたのだ。
「起動成功だ」ガルグが感無量という顔となる。
「なぜ２０年前には起動しなかったんだ」
　ようやく展開に理解が追いついたハルオはビルサルドに質した。
　人類がゴジラの猛威になすすべなく蹂躙されていた２０４２年、恒星間移民船２隻の建造をのぞくすべてのリソースを結集させ、対ゴジラ超重質量ナノメタル製決戦兵器：メカゴジラを建造、もってゴジラを打倒する計画「プロジェクト・メカゴジラ」が開始された。機体の竣工には５年かかると見積もられた。それまでにメカゴジラ開発プラントのある極東自治区――かつて日本という国家があった弓状列島――の富士山麓にゴジラが上陸すれば人類最後の希望は潰える。
　海へ消えたゴジラを追跡することは、人類はおろかビルサルド、エクシフの進んだ科学技術でも不可能だった。つぎにゴジラが上陸地点に選ぶのは極東自治区の沿岸かもしれない。であるならば、熱線の一撃で山をも削るゴジラを、陸に、それも極東自治区から遠く離れたアフリカかユーラシア大陸西部に、５年のあいだ、釘付けにしておかねばならない。ゴジラを海に帰してはならない。
　理由は不明だがゴジラは人間に深甚なる憎しみをいだいている。出現場所はロサンゼルスやパリなど人口密集地ばかりだった。人間がいればゴジラは鋭敏に察知して殺しにくる。地球連合はこの習性を利用した。北アフリカに出現したゴジラに断続的に攻撃を加え、現地で徴用した少年兵までも突撃させ、ゴジラに人間という「餌」を与えつづけた。生きている人間が付近にいるかぎりゴジラは破壊をやめない。そうしてゴジラをユーラシア大陸奥地まで誘導した。人命を代償に時間を稼ぐその作戦はオペレーション・ロングマーチと呼称された。戦死者数は３億人ともいわれている。
　人間だけでなく、ガイガンやチタノザウルスといった怪獣までもが誘導に使われた。ガイガンはつねにゴジラに敗れたが、人類は回収と改造を繰り返して幾度も再戦させた。両腕をもぎとられたら鎌状の義肢を移植し、両目をえぐられたときはバイザーのような複眼をはめこみ、そうしてサイボーグ怪獣ともいうべき姿へ変わっていきなが

ら、ガイガンは何度も何度もゴジラと戦った。そのたびに負け、また体のどこかを失い、その部分を機械に替えられて、兵たちの待つ前線に駆けつけた。そんなガイガンが兵士たちから信頼を集めないはずがなかった。死に瀕した兵は、いまわに虫の息で軍医に訊く。「ガイガンは、おれたちのガイガンは、勝ちましたか？」これに軍医はこう答える……「ああ、勝ったぞ。おれたちのガイガンが、ゴジラに勝ったんだ」すると半死半生だった兵は安心しきった笑みを浮かべて、息をひきとる。オペレーション・ロングマーチのあいだ、そんな光景が戦場から絶えたことはなかった。ガイガンもまた、ゴジラによってとうとう――あるいはようやく――引導を渡された。

それほどの犠牲を払ったプロジェクト・メカゴジラは、かならず成功しなければならないはずだった。だが、機体が完成したメカゴジラは、決戦に際して起動に失敗、ゴジラによってプラントごと喪失することになった。5年という時間、数億の人命をふくめた資源がすべて水の泡となった。鳴り物入りだったメカゴジラへの失望が今でも大きいのは当然のことだった。あのとき、こいつが起動さえしてくれていたら！

「ハルオ、それこそが、ゴジラに勝てるという証拠だ」ガルグが不敵に笑う。「ナノメタルは自律思考型の疑似生物だ。命令されれば、それを実行するために最適な手段を自ら模索する」伏したままのメカゴジラの頭部を見上げる。「おそらくメカゴジラは、２０年前、この星の時間では2万年前になるか、その時点ではゴジラと戦っても勝てないと判断した。長い時間をかけて力をたくわえ、ゴジラを上回る速度で成長し続け、そうして確実に勝てるほどの差をつけるまで待つのが得策と考えたのだろう」

「じゃあ、今あっけなく起動したのは」

マーティンがこの場にいる人類種の総意を代弁した。声音には希望の響き。

「そうだ」ガルグの言葉は確信に満ちていた。「2万年ものあいだひたすら成長を続けていたメカゴジラが、機は熟したと判断したのだ。だから起動した」

一同を睥睨する。
「よって、われらはゴジラに勝てる」
ガルグの力強い宣言に、アダムをはじめ、地球降下部隊は歓声を爆発させた。歓呼の声が伽藍に反響する。
ハルオだけは、険しい顔のまま白銀の巨塊をみつめていた。
昆虫の複眼のような眼、上下ではなく左右に稼動する口吻など、ゴジラよりもさらに異形とさえ映る姿であるがゆえのいいしれぬ不安を、メカゴジラの偉容に感じ取ったからかもしれない。
◇
「先の戦闘で、サカキ大尉の対ゴジラ戦術が有効であることが証明された」
摩天楼の広大な一室を臨時の前線指揮所としたベルベが口火を切った。ナノメタルは指示式を与えればどのような姿、機能にも変形できる。人類が地球を去った当時と同等の性能を有するコンピュータと、外部の映像を表示する大型モニター、制御卓が室を席巻している。ナノメタルはナノマシンの集合体だ。個体数が多ければ多いほど演算能力と発電量は指数関数的に増大する。1億トン以上ものナノメタルが発電するシティの電力は核融合炉すら及びもつかない。その大電力はチャフの雲を貫通して軌道上のアラトラム号との交信を可能とする。またメカゴジラは数分足らずで6面を冷たい金属で囲まれたただの空間を先端技術で武装した司令部に変貌させた。ナノメタルの力に地球人たちはただただ舌を巻いた。
「われわれが撃破したゴジラは体高５０メートル。対して、やつは推定で体高３００メートル強。単純計算で質量は6の3乗倍。発電量もそれに比例して増大しているはずだ。テラワット級にすら達しているとみるべきだろう。しかし、スケールこそ違うが、全身の体細胞から強力な電磁気を発生させ、電磁メタマテリアルによる非対称性透過シールドを展開するなど、その本質となる能力と習性は同一と推定できる」
つまり、体格が巨大になっただけと換言することもできる。ならば、

「戦術の基幹は今回もそのまま流用できる。しかも、このメカゴジラシティをつかった、より大規模な作戦が展開可能だ」
　ナノメタルは分子構造レベルで自由自在に変化する。水銀のように液体状になることも、極めて高い靭性と硬度を兼ね備えた堅牢無比な固体にもなれる。
「メカゴジラシティを対ゴジラ用の要塞へとトランスフォームさせ、やつを迎え撃つ。概要はこうだ……」
　ガルグが立体光学映像を投影する。
「ゴジラをこのシティへ誘導し、おあつらえ向きの封鎖域に拘束したのち、超高出力電磁加速砲を主力とした極小面積への集中砲火を高精度トラッキングで実施、シールドにノイズを意図的に発生させる。ノイズ周期に同調させた射撃システムで、平均１／１００００秒のノイズ持続時間内にゴジラの生体内増幅器官、つまり背びれを破壊し、シールドを無効化した直後、ＥＭＰハープーンをゴジラ体内深部へ撃ち込む。やつの体内電流をオーバーロードさせ、自爆を誘発する」
　つまり、こういうことである。かつて地球ではゴジラ以前にも多数の怪獣が出現していた。既知の生態系に当てはまらない巨体と凶暴な性質をあわせもつ巨大生物「怪獣」に、人類は直接的にも間接的にも少なくない被害を強いられたが、本質的には、彼らも動物の一種であることには変わりなかった。脳のある頭部を破壊されたり、大量に出血したりすれば生命活動を維持できなくなって絶命する。たしかにいずれも外皮硬度は既存の生物が比肩するものとてないほどの頑強さを誇ったものの、最初の怪獣といわれるカマキラスは米空軍の地中貫通型爆弾バンカーバスターで撃滅されているし、シドニーに出現したダガーラはオーストラリア軍の猛攻に破れている。２０２４年には、北朝鮮を壊滅させて韓国ソウルに接近していた、巨大なセイウチのような爬虫類怪獣マグマに対して、米軍が戦術核を使用し、撃退した。
　怪獣は恐るべき敵だが、軍備をととのえ、人口密集地に侵入される前に発見し、しかるべき火力を投入すれば駆除できる。世界各国が手と手を取り合い、一丸となって適切に対処すれば、人類は怪獣との戦

いという試練を乗り越えることができる。そんな確信がまだあったのだ。

２０３０年、アメリカ西海岸に、「やつ」が現れるまでは。

真の絶望。人類の天敵。黙示録の獣。

その名は〝滅亡（ほろび）〟。

怪獣王。

当時、怪獣用に改良されたバンカーバスターは、厚さ６０メートルのコンクリートさえ突破する貫通力を誇っていた。その直撃を受けたゴジラは、一滴の血すら流さなかった。

２５０キロトン級の核弾頭１５０発による集中攻撃すら、ゴジラを倒すにはまるで力及ばなかった。

水爆の生む超々熱量は物質そのものをプラズマ化させる。核融合の焔を浴びて原型をとどめていられる物質などこの世に存在しない。だがゴジラは耐えた。いかにゴジラが超高温耐性と超硬度の表皮で装甲されていたとしても物理的に説明がつかない。

この異常ともいえるゴジラの圧倒的な防御力の要こそ、非対称性シールドである。

まず、ゴジラは直立歩行型の恐竜のようにみえるが、その実態は金属成分を大量にふくむ植物であることが判明している。よって体内に骨格や内臓はない。金属質に進化した植物からなる筋繊維の集合体が動物のようにふるまっているだけである。そのため動物と異なり、各部位で体組織の細胞に差異はない。人間なら脳は脳、目は目、心臓は心臓と、細胞はそれぞれの器官で分化し、おのおのの役割を果たす。だから目は目の働きしかできず、欠損すれば他の細胞で再生させたり機能を補完することはできない。

ゴジラは頭部から尾の先端まで内部構造が等しく均質であり、ほとんど単一の細胞だけで巨体を成立させている。ゴジラは全身が脳であり、目であり、心臓である。いうなれば未分化細胞のかたまりなので、もし攻撃を受けて損傷を負っても、ほかの部位から体細胞をすみやかに融通させることができる。だから傷ついてもその場で瞬時に再生できるのだ。ゴジラの尋常でない耐久力は、ただでさえ強固な泡

状表皮が、猛烈な再生能力により、傷を負ったそばから鱗のように重なりながら体表に新たにつくられていくことに由来すると、ゴジラ研究の第一人者ヴィルヘルム・キルヒナー博士が結論づけ、これは長いあいだ不動の基礎理論として信じられてきた。

ところがアラトラム号の２０年にわたる旅のなかで、両親の仇たるゴジラの打倒に執念を燃やすハルオが再解析を試みた結果、新たな事実が導きだされた。ゴジラは金属に酷似した体細胞から電磁波を発生させる。ゴジラは自分の全身を強力な電磁石として機能させ、背びれで増幅することにより、桁外れの電磁パルスを任意に生んでいる。これが電磁メタマテリアルによる非対称性透過シールドを展開させているものと推測される。

非対称性透過シールドは、その発生領域において、赤外線などの電磁波はおろか、砲弾やミサイルといった実体質量兵器をふくむあらゆる物理攻撃を遮断する。いわばバリアである。

この結界は事実として熱核攻撃からすらゴジラを守ることに成功しているが、ひとつの疑問が浮上する。ゴジラの体細胞には高速で増殖する機能、つまり損傷を即座に修復する能力が備わっている。シールドで攻撃を完璧に防ぐことができるなら、なぜこのような過剰ともいえる再生能力までが必要なのか？

結論としては、鉄壁の非対称性透過シールドも決して無敵ではないからである。

ゴジラのシールドは、一定の周期ごとに１／１００００秒間だけ消失する。電磁メタマテリアルは超高出力の電磁パルスから発生されている。パルスメカニズム、つまり心臓の鼓動のように、電位が発生しているときと発生していないときとが、周期的に繰り返されているのである。その原理上、シールドの出力がほとんどなきに等しいほどに弱まる瞬間……ノイズの存在は、さしものゴジラといえど解決できていない可能性が大きい。このノイズは人間には知覚できないほんの一瞬にすぎないが、熱核攻撃に代表される持続的な熱放射は遮断しきれないため、細胞再生能力で防御システムを補う必要があるのだ。

また、過去の戦闘データ――地球で人類が国家を形成していたこ

ろ、持てる戦力を総動員してゴジラに立ち向かっては全滅させられた犠牲の積み重ね――から、ゴジラのシールドは、受けた攻撃面の集弾面積が小さくなるほど、かつ攻撃面あたりのエネルギー量が増えるほど、ノイズはより発生しやすくなり、しかもノイズ持続時間は長くなる傾向にあると考察できた。

ようするに、なるべく狭い範囲に大火力を一点集中させれば、無敵に思えるゴジラのシールドにつけ入る隙をつくってやることが可能となるのである。

これらの事実から、シールドノイズの発生条件を人為的に満たし、任意のタイミングで発生させた「本命の攻撃を叩き込むのに現実的な長さの時間の」ノイズを足がかりとして、シールド生成の鍵をにぎる電磁パルス増幅器官である背びれを破壊すれば、シールドは無効化されるため、ゴジラ殲滅への突破口を見出だせるというわけだ。

この解析を立脚点としてハルオ自身が考案した戦術は図に当たった。ビルサルドのコンピュータにより同期された火力は、コンマ１秒の狂いもなく、直径２５ｃｍ以内という極小面積に火力を集中させ、比較的長い時間のシールドノイズをつくりだし、その瞬間を見定めてゴジラの背びれを破壊。シールドを展開できなくなったゴジラにＥＭＰプローブ・スピアを打ち込んで体内電流を狂わせた。結果、ゴジラの肉体は、山をも削る熱線を連発できるほどの莫大な自分自身の電力の暴走に耐えきれず、内側から無惨に爆発四散した。

そのゴジラは２０年前に人類が地球を捨てたときとおなじ、体高５０ｍであったが、殲滅の直後に出現した、体高３００ｍ超のゴジラ――人類を絶滅の危機に陥れた個体が２万年のときをかけて成長した姿――に部隊は壊滅させられ、現在にいたる。

生物の常識をはるかに超えた超巨大なオリジナル・ゴジラ（ゴジラ・アース）も、シールドの発生原理が同一である以上、基本的にはおなじ戦術が有効であると思われる。

すなわち、ゴジラを落とし穴に落とし、動きを封じ、撃って撃って撃ちまくり、シールドにノイズが生じた瞬間に背びれを吹き飛ばす。

「メカゴジラシティはこちらのコマンドによりどんな兵器も、質量の

かぎりいくらでも生成できる」
　ベルベの指示によりマップテーブルの立体映像が変化。直径１４ｋｍにおよぶメカゴジラシティのいたるところに、おびただしい数の砲門が現れる。電磁加速投射砲、いわゆるレールガンである。メカゴジラシティの大電力なら巨大戦艦の艦砲さえ子供の爆竹に思えるほどの砲口初速を叩き出せる。それが目標へまったく同時に着弾するよう計算して統一射撃されるのだ。集中する攻撃エネルギー量は一瞬ではあるが核攻撃にすら匹敵しよう。言い換えれば、直径２５㎝の範囲のみとはいえ、水爆なみのエネルギー量を発生させられるのだ。
「シールドノイズの発生条件を満たすオーダーとしては、まずクリアしていると言える」
　ハルオも賛意を示す。戦意はもちろんあったが、軌道上で待機しているアラトラム号に増援を要請したとしても、現有の戦力ではとても足りないと案じていたのだ。
「しかし、封鎖域への誘導はどうします。ホバーバイクも多脚戦車も全滅していますし」
　アダムが口を挟んだ。大きな問題だった。メカゴジラシティの火力を発揮できる都合のよい場所に落とし穴を作らねばならないが、ゴジラをちょうどそこへ誘い込まないことには話がはじまらない。前回の戦闘では空中機動を得意とするホバーバイクと、高い不整地踏破能力を有する多脚戦車が、その任を担っていた。
「問題はない。もっといいものがある」
　ガルグがユウコの乗ってきたパワードスーツを指さす。
「あれをベースにして、飛行能力と耐熱、対放射線、対衝撃の重装甲、ならびに重武装をあわせもつ有人型高機動兵器の開発をメカゴジラに命じてある。パワードスーツのスペースチタニウムよりはるかに剛性に優れ、電磁波遮蔽も強化されている。ナノメタル製だから機体そのものが発電する。飛行能力は加速、最高速度、旋回半径、上昇速度、実用上昇高度、すべてにおいてホバーをはるかに上回り、武装は電磁加速砲のみだが、弾頭重量１５ｋｇの硬化ナノメタルを砲口初速マッハ７で射出する。その運動エネルギーは理論上、４２．４８３メ

ガジュール。これを1分間に10発のペースで発射できる。ゴジラの注意を惹くには十分すぎるスペックだろう」
　地球人たちは目を丸くした。かつての地球のいわゆる先進国が採用していた主力戦車の主砲たる120mm滑空砲で、砲弾の運動エネルギーは6．2メガジュール。戦車砲の6．8倍の砲撃を、6秒に1発、しかも空を飛びながら行なえる。
「あと24時間もすれば20機は用意できる」
「20機も！」
　アダムがそれきり絶句する。20機あればこの場にいる生存者の過半数に行き渡る。ホバーバイクはもともと不整地移動用で、多脚戦車は土木作業用の重機だ。どちらも生粋の兵器ではない。それを改造して転用していたのだ。
　だがヴァルチャーは純粋な機動兵器であり、戦闘機であり爆撃機でもある。戦力としては申し分ない。
　これならあの山のように巨大なゴジラとも渡り合える。決勝の信念が地球人たちに拡がった。
　ハルオの脳裏に、ふと黒い影が差した。ヴァルチャーもメカゴジラもあまりに強力な兵器だ。そのシステムの根幹はビルサルドの技術で成り立っている。もし、ゴジラとの戦いに勝利したとして、このナノメタルの実権をだれが握るのか。ビルサルドがその気になれば、地球人もエクシフもメカゴジラの力で根絶し、地球を我が物とすることなどたやすいことではないのか。ゴジラとメカゴジラ、勝ったほうが人類の敵になるだけなのではないか……。
　ハルオがそんな思いに心を囚われたときである。
「そして、ゴジラ打倒のあかつきには」ガルグが喜悦のまま続けた。
「メカゴジラはその役目を地球のテラフォーミングへとシフトさせ、われらヒト型種族が霊長の座に返り咲く」
「テラフォーミングだと！」
　ハルオが声をあげた。
「どういうことだ、ガルグ」
「そのままの意味だ。メカゴジラシティのナノメタルをすべて解放す

る。ナノメタルはゴジラ細胞の森や地球の地殻を取り込んで増殖し、ゴジラに侵食されたこの地球を覆い、ふたたびわれわれヒト型種族の生存を可能とする星へとつくり替える。そのときはじめて、われらは地球をゴジラから奪還できるのだ」
「待て。それでは、地球の支配者がゴジラからメカゴジラにとって変わるだけだ」
「なにが問題なのだ？」
　ハルオにガルグが理解不能という顔になる。
「人類はゴジラに地球を奪われた。今度はナノメタルという叡智の力でゴジラから地球を奪いかえす。それこそがきみの望みだったはずだ」
「ナノメタルで地球を改造するなど、それでは本当の意味での勝利にならない。陸も海も、山も川も、すべてがナノメタルでおおいつくされるのだろう？」
「そうだ。まさに理想郷ではないか」
　ベルベが当然のことのように言った。
「自然とは支配し、制御するものだ。きみたちが地球で暮らしていたころ、たとえ怪獣がいなくとも、地震やハリケーン、火山の噴火、津波、蝗害（こうがい）（バッタの大量発生により、農作物が食い荒らされること。一国を滅亡させたこともある）、干魃と豪雨の不安定な気候に苦しめられていた。われらビルサルドからすれば、きみたちがなぜ自然の脅威を克服しようともせずただ従容と受け入れていたのか、はなはだ疑問だ。技術的に不可能だったならしかたないが、今のわれらには可能だ。それがナノメタルなのだ」
　ベルベは偉大な計画を読み上げるように堂々と語った。
「ナノメタルによる地球改造は、われわれにも、もちろんきみたち人類にとっても、最適な居住空間を約束する。地震もハリケーンも火山噴火も津波も飛蝗もない、気象さえコントロールできる理想の世界だ。そこでは自然災害に苦しむものなどいない。ゴジラのみならず、地球を屈服させてこそ、われらは真の意味で勝利を手にすることができる。ゴジラを産んだ地球という自然もまた、われらを脅かし、繁栄を

さまたげる怪獣なのだ。怪獣は倒さねばならん。ハルオ、ともにゴジラを憎んだおまえなら、わかってくれるだろう?」
　ハルオたちはなにも反論できなかった。ビルサルドは、もともとブラックホールの衛星軌道上の惑星を故郷とする、想像を絶する過酷な環境で生き抜いてきた。彼らの母星はナノメタルによってすべてを管理下においた機械の惑星だった。ブラックホールの軌道上という、地球からすれば地獄のような星で生きねばならなかったビルサルドにとって、自然とは、つねに自分たちを滅ぼそうと舌なめずりして画策している敵でしかなかった。ここからは地球人のように自然と共存するなどという発想は生まれようがない。食料生産ひとつをとっても、冬季や乾季は作物が育たない、ならば季節の変動をも制御して、一年を通して農作物が収穫できるようにしたほうが合理的である、という考え方をするのが、ビルサルドだった。
　ハルオは、ビルサルドとの断絶を痛感していた。外見こそ地球人と大差ないが、ビルサルドは、れっきとした異星人なのだ。ビルサルドに悪意はない。むしろハルオたち地球人のためを思えばこそ、地球を海も山も緑も季節もない鋼鉄の星に変えてしまおうとしている。純粋な善意。それがなおのこと恐ろしかった。
「彼らの主張にも、一理ある」
　沈黙を破ったのはマーティンだった。
「なにをいっているんだ」
「考えてもみてくれ、サカキ大尉」マーティンはハルオに説諭した。「首尾よくゴジラを倒せたとして、それですべてが終わるわけじゃない。この星をふたたびぼくらの住める環境に戻す必要がある。宇宙服と酸素モジュールなしではおちおち外も歩けない星を母星とはいえないからね」
　母星とはいえない。その言葉にハルオははっとした。地球に降り立ったときからつねに心のどこかで感じていたことだった。太陽系第3惑星であると頭では理解していても、実感として、ここが母なる地球であることが心底からは信じられずにいた。
「ゴジラを殲滅したあと、おそらく地球の環境は元に戻る方向に舵を

切るとは思う。だが元通りの緑あふれる美しい星になるにはそれこそ2万年、いや、もっとかかるかもしれない。この都市から出ることなくそれをじっと待ち続けることも、選択肢のひとつではあるだろう」

しかし、とマーティンは続けた。

「まったくの異星も同然となってしまったなら、いっそのこと、この星を異星と割りきってナノメタルでテラフォーミングしてしまうというのも、おなじくらい価値のある選択肢だとぼくは思う。まあ実際には、フツアの人たちの領域には手を出さないとか、いろいろ調整しなければならないことはあるだろうけどね。いずれにせよゴジラを倒しただけでは、生存圏の確保というぼくらの最終目標は叶えられない。ゴジラの先も見なければ」

そのときである。

「たいへんだ。ナノメタルが暴走してる!」

地球人の数人が慌てた様子で駆け込んできた。

「ビルサルドが10人、ナノメタルに食われた!」

「落ち着け。彼らは自ら志願してメカゴジラシティと一体化したのだ」

ガルグはこともなげに言ってのけた。

「外部からメカゴジラに指令を与えていたのではあらゆる意味でロスが多い。だがメカゴジラと同化すれば格段に速く、より正確なコマンドとフィードバックを可能にできる」

わかりきったことを再確認しているかのような語り口にハルオは戦慄を覚えた。キーボードを叩くのがまどろっこしいからといってコンピュータと自らを合体させるなど、正気とは思えなかった。

「メカゴジラと同化したビルサルドはどうなったんだ」

「肉体を捨て、ナノメタルの体となってメカゴジラと溶け合っているが、自我と思考能力は維持されている。つまり彼らは生きている」

「自分の体をナノメタル化するだと。メカゴジラの一部になっただと」

「そうだ。炭素をベースとしたこの肉体はあまりに脆弱だ。きみやわ

たしたちの肉体が、１０００度以上の高温に耐えられるか？　大量の放射線に耐えられるか？　自分の体重の９０倍ものＧに耐えられるか？　何年もの絶食に耐えられるか？　ナノメタルならそれらはなんの苦にもならん。どちらが優れた肉体か、考えるまでもあるまい。これからさきは激戦が予想される。当然の選択だ」
「だが、この肉体を捨てて、メカゴジラとおなじナノメタルの体になってしまったら、もうおれたちは人じゃない。たとえゴジラに勝ったとしてもそれは勝利とはいえない。おまえたちはゴジラを倒して、新たなゴジラとして地球に君臨したいのか」
「ゴジラを地球の支配者と呼ぶなら、われらヒト型種族こそがゴジラとならねばならん。それこそがきみの宿願だろう、ハルオ」ガルグにはむしろ当惑があった。「なにをしてでもゴジラに勝ちたいのではなかったのか」
「ゴジラに勝つためにゴジラを超える怪獣になっては意味がない。おれたちは、人としてゴジラに勝つべきだ」
「手段と目的を取り違えてはいけない。最強の怪獣ゴジラから地球を取り戻す、そのためにはわれわれも全滅必至の犠牲を覚悟せねばならん。しかし、ナノメタルとなれば、この場にいる全員が、ゴジラのいない地球をみることができるかもしれん。より合理的な代案があるなら教えてほしいくらいだ」
「だが……それは人を捨てるということだ」
「それが進化だ。きみたち地球人も最初からヒトだったわけではあるまい。最初は単細胞生物だった。それが多細胞生物になり、脊索（せきさく）動物になり、背骨をもつ魚類となり、淡水の川へ進出して両生類となり、爬虫類となり、哺乳類となり、ヒトとなった。生物の進化とは古い姿を捨てることだ。エラを捨てねば魚類のままだったし、水かきを捨てねば両生類のままだった。両手に余るものを欲するならば、いま持っているものを手放すことだ。この鉄則はわれわれビルサルドもきみたち人類も変わらない。ただ生きて世代交代するだけでも、生物は自らをより最適な姿へ変化させていくぞ。人類とて進化の最終形態ではない。すべての生物がつねにそうであるように、人類もまた進化の通

過点にすぎないからだ。ハルオ、きみはもしかして、ヒトが進化の頂点にいるなどと勘違いしているのではないかね？　わたし個人の見解だが、もしそうなら、それは進化の必要性を受け入れず旧態依然にしがみつき、自らを進化させて生き延びてきた祖先を否定し、無益な感情論にとらわれて有効かつ現実的な方法から目をそらしている、だが結果だけはほしいという、ただの傲慢だよ」

舌鋒鋭い反論にハルオは言葉を失った。合理主義をもって鳴るビルサルドの権化ともいうべき主張である。ガルグの隣に立つベルベも、これ以上に理にかなった考えがあるだろうかという顔でハルオたちをみつめている。おそらくビルサルドのだれに訊いてもガルグとおなじ答えを返すだろう。

「わたしも、ビルサルドに賛成です」

沈黙を破ったのはユウコだった。

「メカゴジラシティといえども、それだけでゴジラを倒せるかどうか。負ければすべてを失います。でも、恐竜が鳥に姿を変えて生き延びたように、必要なら肉体をナノメタル化する道だってあると思うんです。ナノメタルになったからといってそれで死ぬわけじゃないんですから。わたしたちは、これまでの戦闘で命を落とした仲間のみんな、いいえ、２０年前、わたしたちにすべてを託して地球に残ったすべての人類のために、打てる手はすべて打って、使えるものはすべて使って、勝利をつかむために全力をつくすべきです」

あとは水を打ったように静まり返った。ナノメタル推進派と反対派で彼らは二分されようとしていた。

出し抜けに警報が響きわたった。インターフェースが警告を表示する。

「どうした？」

ハルオはコンソールを操作するガルグに質した。ビルサルドの掘りの深い顔には懸念の色。

「ゴジラがここへ一直線に向かっている」

皆がざわついた。

「シティ周辺には光学遮断フィールドが展開され、一種の熱光学迷彩

の役割を果たしている。だからこそ2万年のあいだゴジラにも存在を気取られなかった。なぜいまごろになって」
「いまはそれよりも、事態の対処がさきだ」
ハルオはベルベを遮って、
「ここへの到達予想時刻は？」
指揮官の顔となってガルグに訊ねた。
「いまの速度と針路を維持すれば、およそ６８分というところだ」
1時間であの破壊の神とふたたび対峙することになる。生存者の面々に生々しい恐怖が伝染していく。
「それまでにヴァルチャーはどれほど用意できる？」
「慣熟とはいかないまでも多少の訓練は必要だ。それも考慮に入れて逆算すれば、生産が間に合うのは3機」
「3機……」
ハルオは悔しそうに繰り返した。単騎の戦闘力が絶大とはいえいかにも心もとない数に思える。
「誘導だけなら問題ない。ヴァルチャー1機でホバー３００機の働きを上回る。3機あれば相互支援も可能だ。むしろ足りないのはパイロットだ」
ガルグがハルオに目を動かして言った。
「わたしはここでシティを統轄せねばならん。メカゴジラのソースコードはわれらビルサルドの母語だからな。1機はベルベが乗るとして、あと2機はだれが搭乗するか」
地球人たちは顔を見合わせた。誘導はゴジラに肉薄する極めて危険な任務だ。５０メートル級のゴジラ相手でも多数の犠牲者が出ている。まして見たこともない兵器に命を預けるとなれば、躊躇が生まれて当然だった。
「おれが行こう」
ハルオがガルグとの距離を詰めた。
「なにを言っている、指揮官が前線に出るなど」
「いまのいさかいで皆が動揺している」
ハルオはガルグに耳打ちした。

「指揮官のおれとビルサルドとのあいだに不和が生じていると思われては結束は望めない。そんな状態でゴジラと戦うなど不可能だ。ここは、おれがおまえたちのつくったヴァルチャーに率先して搭乗することで、ビルサルドに信頼を置いていると示さなければならない。そうすれば彼らもついてくる。グズグズしている時間はない」
ガルグがその言葉を吟味し、やがて、
「感謝する」
実直な呟きを漏らした。
「あの」ユウコが声をあげた。「わたしも行きます」
ハルオは雷速で振り返った。まさかユウコが最後のひとりに名乗りをあげるとは思っていなかった。
「ヴァルチャーはパワードスーツをもとに設計されています。なら、わたしが適任です」
ユウコのパワードスーツを操縦する腕は群を抜いている。ハルオよりも上だ。
「決まったな。ゴジラが到達するまでには要塞化は完了する。3人にはさっそくヴァルチャーの試験飛行ならびに即席だが訓練を頼む。いまのうちに感覚をつかんでおけ」
まずビルサルドの軍事教官であるベルベが試験飛行で性能を確かめる。そののちハルオとユウコを訓練する。
「またおまえの教え子になるとはな」
「特急で身につけてもらうぞ。覚悟しておけ」
ハルオにベルベは不敵な笑みで応じた。教官と教え子のあいだでは、それは互いが親愛と友宜で固く結ばれていることの証だった。
「ユウコ、よかったのか」
ハルオはユウコに向き直った。
「だれかがやらなきゃいけないことですから」
幼馴染みでもあるユウコは、軍人の娘らしい毅然とした態度を崩さないままだったが、ふと、ハルオから視線を外した。
「それに、少しでも先輩のそばにいたかったから……」
ハルオは戸惑いをすぐに隠して、踵を返す。ガルグと頷きあう。

「ナノメタルに関する話はゴジラとの決着がついてからだ。いまは、おまえたちの力を信じる。メカゴジラの力を」
指揮官としてハルオは同胞たちを眺めた。
「いまから1時間後、おれたちは否も応もなく、あのゴジラと戦うことになる。間違いなく人類史上最強の敵だ。何十億という人間がやつによって命を奪われた。この星もだ。まずはゴジラを殲滅しなければどのような神算鬼謀も画餅に帰す。ゴジラあるかぎりおれたちに明日はない。やつは力でおれたちから地球を奪った。力で支配するものは力によって倒されることを思い知らせてやる」間を置いて、ひときわ大きく声を張り上げる。「地球はだれのものだ。ゴジラか！」
「ふざけるな、おれたちだ。地球はおれたちのふるさとだ！」
ハルオに地球人たちが腹腔からの怒号を放つ。
「そのとおりだ。ならばおれたちは証明してみせよう。おれたちは奴隷ではない。家畜でもない。おれたちは人間だ。自由な一個の魂だ。その自由を力で奪うとき、どのような代償を払うことになるかを驕れるゴジラに教えるのだ。おれたちはけっして地球をあきらめないことを。おれたちは、けっして、おまえには膝を折らないということを！」
地球人たちの背筋が伸び、顔がひきしまっていく。恐れは霧散していた。
「おれたちはこの星で生まれた。ならば死ぬのもこの星だ。おれたちが命をかけるに値する星は、地球以外に存在しない！」
ハルオの言葉が生存者たちに炎を灯す。
「この戦いで、すべてが終わる。もし、この一見勝ち目のない戦いに勝利することができたなら、人類は永久に今日という日を忘れないだろう。人類が真にこの星で生きていく権利を勝ち取り、守り通した日として刻まれる。おれたちが、ゴジラを倒し、そして、おれたちが歴史をつくる！」
力強い宣言に、アダムが鬨の声をあげた。それを皮切りに快哉が波のように拡がった。司令部は興奮のるつぼとなった。
ハルオはただちにユウコやベルベとともに塔の外へ向かった。ま

ずベルベがヴァルチャーに乗り込んで空へ飛び立つ。ヴァルチャーはもう小さな点となっている。

性能の限界を知るための曲芸飛行ではハルオもユウコも目を瞠った。重力を感じさせない奇抜な運動性能。亜音速で直進していたかと思えば、一瞬にして慣性もなく正反対の方向へ同等の速力で転進する。上昇の加速度も下降のそれと変わらない。むろん、頑強なビルサルドだからこそ可能な機動であり、地球人のふたりではせいぜい９Ｇ機動が限界だが、ヴァルチャーの驚くべき諸元は確認できた。

（ヴァルチャーの性能は）

はるかに人間の限界を超えている、とハルオは思った。つまり人間の物理的脆弱性のためにヴァルチャーは本来のスペックを発揮できないともいえる。ナノメタルでつくられた、いわば「人間大のメカゴジラ」たるヴァルチャーでもっとも弱い部品はほかならぬパイロットだ。ビルサルドなら生身でもすさまじい機動ができる。地球人類がビルサルドの頑健さに追いつくにはナノメタル化しかない。

（もし……）

パイロットがナノメタルの体なら、そのときこそヴァルチャーはなんらの制約なく大空を縦横無尽に駆け回り、第２宇宙速度すらも易々と突破せしめるだろう。

ヒトの肉体に拘泥するべきなのか、自身をナノメタルとするべきなのか、巨翼をひろげて着陸しようとしているベルベのヴァルチャーを前に、ハルオは暗憺たる心持ちになった。

続いてハルオとユウコがそれぞれのヴァルチャーを試す。強大なＧにハルオは思わずうめいた。鍛えられた腹筋で下肢から上半身へ血液を強引に送り返さねば瞬時に気絶してしまう。だがパイロットの操縦意図をすばやく解釈する演算機能はハルオに自由自在な翼を与えた。ホバリングも急停止も急上昇も思いのままだ。

パワードスーツに熟達しているユウコはヴァルチャーの扱いも呑み込みが早く、すぐさま実戦的な空中機動を自らのものとした。

「この短時間でここまでできれば、及第点だ」

人間がエラを失ったように、社交辞令の概念を進化の過程で切り捨

てたかのようなビルサルドの教官は、ふたりの技量をそう評した。
あらためて司令部で作戦を確認する。地形から封鎖域はシティの南西部に設定された。高低差５００メートルの陥穽だ。ヴァルチャーによってゴジラを封鎖域に誘導したのち地面を定置爆破。落とし穴へ引きずり落とす。
そこへすかさず液化ナノメタルを急速注入する。膝あたりまでナノメタルで満たして硬化させれば３０秒は身動きがとれなくなる。
ほぼ静的目標となったゴジラへ、メカゴジラシティが総力をあげて統一射撃を敢行する。ゴジラはシールドで防御しようとするだろう。ノイズの瞬間を見計らって背びれを攻撃し、シールドを無力化させる。
仕上げは３００メートルのゴジラに合わせたＥＭＰハープーンだ。体内へ直接叩き込まれるＥＭＰがゴジラの電流を暴走させるのだ。
司令部の戦術コンピュータが警報を発令。メインモニターにシティ東部を眺望する映像が出される。
深い森が敷き詰められた大地と空の境目から、微細な黒い芥子粒のようなものが舞い上がって散っていく。幾度となくハルオたちを襲ってきた翼竜たちだと全員が気づいた直後、それは姿を現した。
絶望色の山が進んできていた。
がっしりした体躯は、直立歩行をするそのフォルムこそ先史時代の大型爬虫類に類似しているが、あまりにも巨大にすぎる。距離から縮尺を計算すると体高３００ないし３２０メートルと算出された。歩くだけでも天災なみに地形を変えてしまう巨体と大質量だった。頂きにそびえる頭部は年老いた竜のようでもあり、顔からはむしろ温和な印象さえ受ける。
王が立ち止まり、こちらを、メカゴジラシティをにらみつけたかと思うと、満身の力をみなぎらせて、牙状に縁どられた口を大きく開く。
集音機能がないにもかかわらず、地球人にせよ、ビルサルドにせよ、司令部に詰めていた者たち全員の耳に、あのおぞましい声がよみがえった。
あの咆哮が。

あの恐怖の音色が。
人類が栄々と築き上げてきた大都市をまばたきのあいだに月か火星のような荒野に変え、からくも生き残った人々が瓦礫や死体とともに遠く聞いた、あの忌々しい波長が。
人類に地球を捨てさせた怨敵にして、同時期に出現したほかのあらゆる怪獣たちでさえ歯が立たなかった、生きて歩くカタストロフ。
ゴジラが、ほんの十数キロのところまで迫ってきていた。
だがハルオたちに怯懦の色はない。ハルオだけでなく、降下部隊の30人、ビルサルドたち、いずれもが、腕を組み、仁王立ちで、宿敵を待ち構える。
「来い、ゴジラ!」
ハルオの宣戦布告に応じるかのように、ゴジラの背びれに紫電が走る。青白い光輝が増していく。正対しているハルオたちからは、まるでゴジラが光輪を背負っているかのように映った。
空間電位の急上昇に反応したメカゴジラのＡＩが、ナノメタル粒子を散布、シティとゴジラのあいだに霧のように展開する。
後光の差していたゴジラ自身が球状の輝きに包まれる。青みを帯びたその電光はゴジラの顔正面に集中。
「来るぞ!」
ガルグが怒鳴ったのと、画面が白く塗りつぶされたのは、ほぼ同時だった。
ゴジラが発射したまばゆい光条は、通過する大気さえもプラズマ化させながら亜光速で森上空を駆け抜ける。
しかし1本だった熱線はシティ直前で幾条にも分散。不可視の壁に阻まれたように扇状に広がり、無関係な山々を超運動エネルギーと高熱で削って崩落させたにすぎなかった。
運動エネルギーは速度の2乗に比例する。質量のある物体が光速で動くと無限大の運動エネルギーを得られるが、光速に到達するまでに無限大の動力と時間を要するので、現実には存在しない。
しかし、電子や陽子など、極微の質量をもつ粒子を亜光速まで加速させることは可能で、それはすさまじい破壊の力となる。要求される

電力量は最低でも１０ギガワット。
ゴジラは大規模核融合炉数十基と同等、またはそれ以上の莫大な電力により、電気を帯びた粒子である荷電粒子を亜光速で射出し、大量破壊兵器として使用する。一見すると光線のようだが、実際は砲弾とおなじく実体のある質量兵器といったほうが正しい。
その破壊力は、いくつにも分割された流れ弾でさえ山を砕いたことからもわかるとおり、強力無比。
周囲には戦争級の大被害。だがメカゴジラシティは全域にわたって無傷だった。ゴジラが訝しげに目を細める。少なくともハルオにはそう見えた。
ナノメタル粒子散布型熱エネルギー緩衝層は、ナノメタルの微粒子で赤外線を拡散させ、砂山に銃弾を撃ち込んだときのように実体質量弾の運動エネルギーさえ奪う。ディフェンス・ネオバリヤーの異名をとるナノメタルの障壁がゴジラの熱線を弾いたのだ。
揺るがぬハルオの背中をみて、地球人の同胞たちも確信をいだいた。ゴジラの象徴ともいえる必殺の熱線を防いだ。メカゴジラは、本当にゴジラに勝てる！
「作戦を開始する。ガルグはメカゴジラとナノメタルプールの運用を。おれとベルベ、タニ曹長はヴァルチャーでやつを誘導する」
「了解。いそげよ！」ガルグの厳めしい顔には笑み。
「ぼくらはここで呑気に観戦かい？」
マーティンが肩をすくめた。
「いまこの地球上で、いちばん安全なのはここだ」
ハルオが言うと、マーティンやアダムらは一様に敬礼した。
「サカキ大尉、武運を祈る」
「ああ。ゴジラのいない世界で会おう」
ハルオも答礼する。
３人は３騎の天翔る騎士となり、双肩に人類の未来を乗せて羽ばたく。視界いっぱいに拡がる曇天と森林、そしてゴジラ。俯瞰してもなお常識はずれの巨大さだ。これほど大きいと、生物ではなく、地形としてしか認識できない。

だが、ハルオの戦意は微塵も衰えなかった。亡き両親の顔が脳裏に浮かぶ。
「お前だけには、絶対負けない！」
編隊を組んだ3騎は飛燕の速度で接近。
「挨拶がわりだ！」
ハルオの号令一下、電磁投射砲の砲口を向ける。電力投入。絶大なローレンツ力がナノメタルの弾体を前へ導く。
レールガンが爆音の絶叫で砲弾を送り出す。音速の7倍という極超音速で砲口から飛び出した砲弾は、プラズマの焔を曳きながらゴジラに殺到。
3発の弾丸が筋肉の塊のような胸板に着弾。砕けて火花を散らす。
ゴジラの顔にはなんらの痛痒もない。２００キロ先の要塞すら粉砕できる運動エネルギーも、巨神の積層泡状表皮と、その直下にある非対称性透過シールドの二段構えの盾は貫けない。文字どおり錐刀（すいとう）を以て泰山（たいざん）を堕（こぼ）つようなものだ。だが、それでいい。
3騎は揃って右に旋回。ゴジラの老成した瞳もそちらに動く。
「さあ、こっちだゴジラ！」
背後からの熱線を警戒しつつ、ハルオらは封鎖域のある方角へ逃れる。
ゴジラが鋼鉄の天使たちを見送る。
首を戻し、前進を再開させる。
「くそ。もう一度だ！」
ベルベにハルオが応と答え、ユウコも翼を翻してゴジラに再接近。マッハ7の砲撃を左のこめかみに当たる部分に集中させる。
整然と並ぶ背びれが青白い光をまとう。その周囲で紫電が百万の蛇となって跳ね回る。ハルオは叫ぶ。
「ブレイク！」
ゴジラの眼前に凝集した荷電粒子が亜光速まで加速され、直線のビームとなる。超々運動エネルギーと熱量の刃が空を切り刻まんばかりに振るわれる。
破壊光の一閃を3騎は紙一重でかわす。ヴァルチャーの運動性能

と操縦システム、パイロットの卓抜した感覚、技量があってはじめて可能とする回避能力。
　直撃はまぬかれたが、ビルサルドの技術に守られていなければ、熱線がまき散らす電磁パルスに電子機器は破壊され、大量のマイクロ波に血液が沸騰させられるか、さもなくば高線量の放射線に脳幹を貫かれて即死していただろう。
　熱線の放出を終えたゴジラは、ヴァルチャーから興味を失い、針路を変えぬまま進みはじめる。
「どういうこと。どうして誘いに乗らないの？」
　空中で定位するユウコも苛立ちを隠せない。
「罠があると知っているのか？」
　ありえないと思いつつハルオは口にした。
「それだ。もしかしたら、ゴジラはこちらの作戦を知っているんじゃないか」
　司令部で戦況を見守っていたマーティンが掌（たなごころ）を打った。
「われわれが撃破した個体、かりにゴジラ（ゴジラ・フィリウス）の息子と呼ぶが、ゴジラから分裂して生まれたあのフィリウスと、大元の本体であるオリジナルのゴジラとのあいだには、テレパシーによる交感があったのかもしれない。フツアの人たちがテレパシーでコミュニケーションをとっていたように。そうだとしたら、われわれがフィリウス相手に展開した作戦はすべてゴジラに筒抜けになっている。ゴジラとフィリウスはたしかに物理的には別々の個体だ。しかし、あのゴジラには、フィリウスの経験が乗っている。おなじ手は二度も通用しない」
　五感を無線で共有するなど、あまりに常識から外れすぎている。だが人類の常識の外にいるのが怪獣であり、ゴジラであると、この場にいるだれもが知っていた。
「どうする。見破られているなら作戦が破綻するぞ」
「問題ない」
　ハルオの焦燥を司令部のガルグが退けた。
「やつが来ないなら、こちらから動く」
　ガルグが目にも止まらぬ速度でコンソールを操る。

司令部に地響き。堅固だったはずの床が揺れる。地球人たちが驚きの声をあげながら、倒れないようバランスをとる。
「なにが起きているんだ！」
「案ずるな。２０年前にできなかったことをするだけだ」
アダムにガルグがこともなげに言った。
マーティンは床に手をつきながら、ビルサルドの制御卓に投影されているメカゴジラシティの外観図が、直径１４キロにわたって形成されていた都市から、ひとつの集合体へ形を変えようとしているのを垣間見た。シティが変形しようとしているシルエットは、見間違いでなければ、ゴジラに似ていた。
「ガルグ、なにをしたんだ！」
上空を飛行するハルオは通信機に問いをぶつけた。シティ周辺から土煙が噴出している。峯々（みねみね）が崩れ、大地に亀裂が走り、地盤沈下する。地殻変動なみの烈震。
「メカゴジラは待ち受けるだけの要塞ではない。メカゴジラは増殖し、要塞都市でもあり、そして機動する。ゴジラという怪獣を倒すには、ゴジラを超える怪獣を生み出さなくてはならん。それが、この決戦機動増殖都市（メカゴジラ）だ」
ガルグの声には絶対の自信があった。
「刮目せよゴジラ。さしものおまえも、これは見たことがないだろう！」
シティを構成していた、石油化学工場や摩天楼を模した建造物が騒音を奏で、あるものは部品ごとに分解され、あるものは液体状に溶解して、それこそ都市規模の変身をはじめようとしている。
それまで歩いていたゴジラの足が早まった。歩みは早足となり、疾走となる。超質量がシティに向け驀進（ばくしん）する大迫力。
「ゴジラが、焦っているのか」
信じがたい光景にハルオも目を奪われた。
ゴジラが疾駆する先では、異形の都市として振る舞っていたナノメタルが、プログラムにより指向性を与えられ、それぞれが定められた部位の形状へと自らを成形、高速で組み合わさっていく。

頂点に頭部ユニットが接続。首をもたげる。
現れたのは、ゴジラよりもさらに一回り大きい全身から、金属の棘を毛虫のように生やした、白銀の恐獣。
直立歩行を支える脚部は、鳥類や恐竜のような獣脚。足の裏全体を地に着けるのではなく爪先だけが接地している。
腰部から胸の上半身に繋がり、冷たく輝く腕と、その先端にある手指が生物のように滑らかに稼動する。
顎が左右に開閉。
瞳孔のない、複眼のような目は深紅に染まり、画角の範囲内に存在するものをあるがまま映す。
斧のような背びれの並びが、長さ１ｋｍもの脊柱のような尻尾の先端までつづく。
金属板の直線だけを複雑怪奇に組み合わせて形づくられたその巨躯は、各部だけをみていくと、ゴジラとは似ても似つかない。しかし全体として概観したとき、いかにもゴジラの似姿といえる外形となる。
体高３５０メートル、質量１０２９万トンの、人類最後の希望。ゴジラの骨格標本のごとき無機質な、機械じかけの大怪獣。
「これが、メカゴジラの真の姿！」
都市が機械怪獣に変形する驚天動地に、ハルオは二の句が継げない。
「ゴジラは2万年かけて成長し、メカゴジラはさらにそれを超えたというのか」
マーティンも愕然とした。メカゴジラの体内である司令部では実感しにくいが、各方角の映像とパラメータから、状況をつぶさに理解していた。
５キロの距離をはさんだ地点で停止したゴジラの開かれた口腔から、怨嗟のうめきが漏れる。瞳には憤怒。
ゴジラの背びれがチェレンコフ光のような青を放つ。宇宙でもっとも美しいといわれる光がゴジラの吻先に集まる。
「収束中性子砲（メガバスター）、用意！」

「了解！」
ガルグにおなじくコンソールを操作する部下のビルサルドが返した。
昆虫のようなメカゴジラの顎が震える。挟まれた空間に光が生じる。
ゴジラが構わず熱線を発射。
同時にメカゴジラも顎を横方向に全開させ、七色の奔流を解き放つ。
ゴジラの熱線と、メカゴジラの荷電粒子砲が、真正面から衝突した。
拮抗。
刹那、両者のあいだで爆光が弾ける。
質量から姿を変えた熱量で空気が膨張。短秒時に出現したあまりの高温に膨張速度が音速を超え、衝撃波となる。
水平方向に拡散する衝撃波と、大地にぶつかって反射した衝撃波とが重なり、さらに威力を増した壁状のマッハステムとなって、爆心地を中心に同心円状に駆け抜ける。体細胞に金属を多分にふくむ木々がたやすくへし折られ、マッチ棒のように薙ぎ倒される。
原子崩壊の大爆発にもメカゴジラは大地に足を踏みしめて不動。
一方のゴジラは、左足が後ろへ下がり、たたらを踏んだ。受けとめた地面がめくれあがる。土砂がまき上がる。
「ゴジラが、のけぞったぞ」
これまで、だれも見たことがなかった。ゴジラが、あのゴジラが、押されている。司令部の地球人が感動に沸いた。「メカゴジラ万歳！」
「ビルサルド万歳！」
ゴジラが左足を引いた態勢から踏み込みつつ、半時計回りに巨体をひねる。連動して長大な尾が振られる。
「つかまれ！」
ガルグがマーティンらに促した。メカゴジラの膝がたわむ。直後、司令室の重力が急激に増す。
ゴジラの振るう尾の先端が超音速に達する。マッハ４の衝撃波に、背びれからの高電圧により加速された電子で分子が電離、ねずみ算式

につぎつぎと原子から電子が極端に乖離したプラズマ状態となった大気が乗り、摂氏２５００度から６０００度の大鎌となって薙ぎ払われる。
水平のプラズマカッターはメカゴジラの足の裏をわずかに掠めた。
空中で旋回しているハルオは目を疑った。
体高３５０メートル、全長１１００メートル、重量１０２９万トンの金属塊が、宙へ跳躍していた。
ゴジラの目前へ落下しながら、メカゴジラは機械の両腕を大上段に掲げる。着地と同時に剛腕を頭頂へ振りおろす。超巨大質量の大瀑布。ゴジラもたまらず腰が折れ、地に手を着く。
すかさずメカゴジラは右足でゴジラの下を向いた顔を蹴りあげる。
強制的に立たされたゴジラも反撃の蹴りで、自らを模倣した機械獣を押し戻す。距離をとってふたたびつむじ風のように回転。
尾の攻撃を読んでいたメカゴジラは屈んで回避。颶風（ぐふう）をまとった一撃が頭上を払っていく。背を見せているはずのゴジラへ攻勢に出ようとして、怪獣王の背びれの鬼火に気づく。
首をひねったゴジラがメカゴジラを向いていた。すでに荷電粒子が口先に収束している。ナノメタルの防壁は間に合わない。
閃光。電荷を持った無数の粒子がひとまとまりになってメカゴジラへ亜光速で放たれる。
メカゴジラは左腕を顔の前に翳した。そこへ熱線が直撃。推定３テラワットの途方もない電力で加速させられた荷電粒子の激流は左腕を貫き、消滅させ、代償としてわずかに軌道が逸れた。熱線の流れ弾が富士の北にある節刀ヶ岳に命中、山脈を一刀両断する。
メカゴジラは左肘から先が溶解していた。とっさに外殻を変形させた積層耐熱装甲板で左腕をおおっていなければ頭部への加害は防げなかった。
「レフトアーム破損！」
「構わん！」
部下にガルグが即答。
メカゴジラの破断した左腕から、ナノメタルが高速増殖。機械にも

かかわらず再生する。
修復された左手の拳を開く。四本の指を揃えてゴジラに突きつける。
硬質金属の指が、電磁加速で弾丸よろしく射出された。槍のような指はゴジラの胴に着弾し、マッハ１０という飛翔速度に由来する高圧力で怪獣王の表皮のユゴニオ弾性限界を突破、常温のまま流体に塑性変形させて深部への貫徹を図る。
皮下に展開されていた非対称性透過シールドが侵徹を阻止。
しかし、ナノメタルの残骸が、ゴジラの泡状表皮のＧ細胞と同化、侵食を開始する。
ゴジラが喉の奥で唸った。
侵食金属電磁投射弾頭（フィンガーミサイル）は、単体でもゴジラの皮膚を貫通できるだけでなく、メカゴジラシティが翼竜のＧ細胞をナノメタルに変質させて増殖していたように、徐々に肉体を蝕んでいく。最終的にゴジラはナノメタルに食われ、メカゴジラの一部となるのだ。
「メカゴジラを援護するぞ」
ハルオたちが黒翼を傾け、ゴジラの側方から砲撃する。
反応して放射された熱線を巧みにかわし、その隙にメカゴジラが収束中性子砲を支配者の首へ叩き込む。虹色に輝く光の柱はゴジラの首もとの体組織をえぐり、液状化させ爆発させる。煮えたぎった表皮が飛び散る。さしもの中性子線もシールドは貫通できないが、持続的に照射すれば１／１００００秒以下のノイズの時間だけ深部へ到達できる。微小にすぎるがダメージは確実に積み重なる。
怒り狂ったゴジラが熱線を発射しようとしたところへ、ハルオとユウコとベルベが、その左目に電磁砲を撃ち込む。全身から電磁波を放射していて死角がないゴジラの目を潰しても意味は薄く、しかも数分で再生される。一瞬でもメカゴジラから注意を逸らすことが狙いだ。そこへまたメカゴジラがオーロラを束ねたような荷電粒子砲を首に向けて発射する。
筋骨隆々としたゴジラの頸部が穿孔される。竜のような口から絞り出された声は、悲鳴にも聞こえた。

機械怪獣は執拗にゴジラの首を収束中性子砲で狙う。
空間電位の上昇と背びれの発光という前兆現象からゴジラの熱線を先読みし、ナノメタルの緩衝層と耐熱装甲板で２重に防ぐ。受けた損傷はナノメタルが自在に変形して復旧する。両手を腰だめに構えて指の弾頭を発射。ついでメカゴジラは前へ屈み、四足獣の姿勢となって尾を後方へ伸ばす。銀の背びれの並びが一直線となる。
瞬間、メカゴジラの背びれが弾かれるように前方へ爆走。電磁カタパルトで射出された背びれは鋭利な戦斧となってゴジラの胸や肩、腕に食い込む。これらも微生物サイズの自律思考金属体であるナノメタルがゴジラの細胞を食ってがんのようにたちまち増殖をはじめる。
超生物は猛烈な再生能力で対抗。Ｇ細胞と、細菌のようなナノメタルが鎬を削る。
並行してゴジラは高加速荷電粒子ビームを紡ぐ。今度はヴァルチャー編隊からのレールガンも意に介さない。しかし発射直前、メカゴジラの右フックで右を向かされ、明後日の方角を焼き払い、地平線まで森を深紅で裂断する。
熱線を外されたゴジラが収束中性子砲の連射で過熱しているメカゴジラの口吻を掴む。ゴジラの手が灼け、蒸気があがる。メカゴジラが至近から指の弾頭を撃つ。腹に猛毒の細菌金属を受けながらも怒り狂うゴジラは止まらない。全身が筋肉の塊といってよいゴジラの絶大な膂力が、メカゴジラの嘴を真横に開いていく。軋む音。ついに稼動限界を超えた頭部ナノプレートが左右ともに折られる。破壊音はメカゴジラの苦鳴のようだった。
吻部を失ったメカゴジラが右腕を構えて引く。肘からプラズマブースターが噴出。瞬時に音より速くなった拳がゴジラの顎を捉える。同様にブースターで加速した左アッパーカットが下顎を打ち抜く。怪獣王の頭が揺れる。脳が存在しないため脳震盪は狙えないが、砲台たる口腔が正面を向かないようにする。
ゴジラが吠える。メカゴジラも疑似生物として反応し、甲高い咆哮を返す。
２万年のときを越えた因縁。

双方が距離を詰める。
メカゴジラの右貫手(ぬきて)をゴジラが交差させた両腕で挟んで防御。左手からナノメタルの侵徹弾を射とうとしたメカゴジラは、右大腿に当たる部分に低い蹴りを入れられ、態勢が崩れる。
好機に頭部ユニットを狙ったゴジラの拳は、メカゴジラの畳んだ肘に撃墜される。
姿勢を回復したメカゴジラが強烈な左フックでゴジラの顎関節部を殴ると、ゴジラはメカゴジラの脇腹へ４３２万トンの体重を乗せた拳をめりこませる。
つづく断罪の右手刀はメカゴジラが左上腕で阻む。
空いたゴジラの腹へ機械獣の右掌底がぶちこまれる。
ゴジラの咆哮による超振動波が放たれる寸前、メカゴジラがその上顎と下顎を強引に閉じさせる。
３００メートルのゴジラは咆哮さえ武器になる。超大音量の共振現象により極端に振動させられた物体が分子単位で砂のように崩壊する。それがゴジラ自身の口内で炸裂した。
溶解した組織が牙のあいだから血のように吹きこぼれる。
メカゴジラが直角に曲げた右肘をゴジラの頭に見舞う。さらにもう1発。だがゴジラの左肘がこれを相殺。
地球の覇権を争う二大怪獣がにらみあう。
霊峰富士を背景に、ゴジラの右ストレートと、メカゴジラの右ストレートが激突。風圧が旧関東一円をなぶる。
双方が示し合わせたように上体をひねる。互いに背を向け、黒の尾と、銀の尾が交差して打ち合う。衝撃で周囲の空間が歪む。
反動で向き直ると同時に、2体の大怪獣は相手のボディーに重い右拳の一撃をぶちこむ。両者とも質量で受けとめきれずにあとずさる。
ゴジラが足を踏み込む。またも尾による攻撃。
メカゴジラは左腰で受けた。轟音。１０００万トンを超える超々質量が右へ流れる。機械の両足で大地を削って耐えながら、ゴジラの尾を両腕でかかえる。
銀の竜が大きく足を開く。

ナノメタルの関節部が雄叫びをあげる。足から腰、肩から腕へと剛力が伝達される。
ゴジラの足が大地から離れる。
メカゴジラは尾をかかえたまま１８０度回転し、４３２万トンの大質量を投げ飛ばす。
怪獣王の巨体はおそろしく緩慢な弧を描いて、５キロ南の愛鷹山（あしたかやま）に落下。標高１１８７メートルの山体を原型もとどめず瓦解させて倒れ込んだ。
それを見届けるメカゴジラが、全身の各所から高温の蒸気を排出する。
遠巻きに眺めるしかないハルオは固唾を呑んだ。漆黒の魔獣と、白銀の巨竜の戦いは、ふたつの生きた大災厄が激突しているようなもので、一帯に天変地異なみの災害をもたらす。神話における神々の戦いを見ているかのようだった。
山津波を起こしながらゴジラはすぐに立ち上がった。
メカゴジラの顎もすでに修復されている。
「メカゴジラⅡ号機からＸＩ号機までの自律制御シークエンス、完了。全機アクティベート」
部下がガルグに報告した。ガルグが頷く。
「遊びは終わりだ、ゴジラ」
富士山麓が鳴動する。地鳴りの轟音を伴奏として、メカゴジラシティのあった跡地から、土と岩石が逆さの瀑布となって噴きあがる。
「この２万年でメカゴジラが量産したナノメタルは１億２０００万トン。このメカゴジラは１０２９万トン。残る１億９７１万トンはどこにいったと思う」
ガルグが口角をつりあげる。
地中から、水銀が固化したような背びれが浮上する。つづいて現れたのは同色の背中。扁平な頭部はメカゴジラそのものだった。体を揺さぶって土を払い落とす。
まったく別の場所で、地を割って銀色の骨のような尾が持ちあがる。

また離れた地点で、機械獣が土中より誕生するように現れる。
新たなメカゴジラがシティ跡地からつぎつぎ出現する。１体、また１体、また……。
ゴジラが憎悪に吠える。
ガルグらの搭乗しているメカゴジラに加え、おなじ体高３５０メートル、質量１０２９万トンの無人メカゴジラが１０体、ゴジラと対峙していた。
１体でもゴジラと互角に戦えていた機械怪獣が、１１体。
「彼らのＡＩには、ナノメタルと同化したわれらが同胞がひとりずつ割り当てられている」
ガルグが感慨深く見渡す。
「ともに戦えることを誇りに思うぞ、わが同志たちよ」
ガルグに呼応するように、メカゴジラⅡからＸＩが高らかに咆哮した。
ハルオは戦慄していた。
ビルサルドたちは自ら望んでメカゴジラシティに取り込まれた。彼らはいまメカゴジラの頭脳となっている。まさに生きながらにして怪獣と化したのだ。ビルサルドはむしろそれを進んで受け入れているのだった。
１０体のメカゴジラとなった１０人のビルサルドたちを上空から見下ろしながら、この機械獣に生まれ変わることが果たして進化といえるのか、その疑問がハルオの心を捉えて放さなかった。
◇
「これがメカゴジラの……ビルサルドの力か」
地上３万５７８６キロの静止軌道で待機していた恒星間移民船アラトラムの艦橋で、人類の代表として地球を脱出することになった移民５０００名――２０年のあいだに病死や自殺で４０００名に減少していたが――をまとめる立場にある地球人の船長ウンベルト・モーリ大将は、送信されてきた戦況の推移に複雑な顔となった。
「メカゴジラがここまで成長していたことは僥幸。であれば、この偶機を最大限に利用することだ。これでわれわれはゴジラに勝てる。

そればかりか、ゴジラに蝕まれた地球の環境をナノメタルで改善することもできる」
　同乗しているビルサルドの族長ハルエル・ドルド中将が、冷静ながらも論理的希望を語った。
「勝つことができれば、の話だ」
　エクシフの族長エンダルフ枢機卿が異を唱えるでもなく懐疑的な迷いをみせた。
「これほどの戦力差だ。ゴジラとて現実に存在する生物である以上、物理的な限界からは逃れられん。貴官はゴジラの破壊と殺戮を過大視するあまりやつをこの世の理を超越した存在かなにかだと神格化しているのだ。生まれたからにはどんな生物も死ぬし、殺せる」
「われらの故郷も怪獣に滅ぼされた」
　ドルドにエンダルフが言った。エクシフ族長の秀でた額には苦悩の亀裂が刻まれる。
「その名を呼ぶことも禁忌とされてきたほどの不吉な存在。星を喰うもの。それは文明が栄え、爛熟し肥大した星ばかりを獲物とする。宇宙はひとつの壮大な生態系とエクシフは考えている。かの怪獣も宇宙においてなんらかの役割を担っている。そこにあるのは過程の行き着くさきとしての結果ではなく、ただ結果ありきの運命だけ。たとえわれらが〝黄金の王〟を倒していたとしても、似たような役割の怪獣、あるいはまったく別の原因で、わが母星エクシフィルカスは滅亡していただろう」
「なにが言いたいのだ」
「ゴジラを倒したとて、それが最後の1頭とだれが断言できる。われらが地球に降り立ち、文明を再建させ、際限なく肥大をつづけるかぎり、いつ、またあのゴジラの同類が現れるかわからぬ」
「まだ倒せてもいないうちから言ってもはじまらん」
　ドルドは呆れた。
「それこそ、地球をナノメタルで惑星ごと改造することで、外からの怪獣災害にも万全の備えをしておくべきではないか」
「太陽系外から高エネルギー反応が急速接近！　推定速力、約０．３

５ｃ！」
オペレーターの悲鳴にアラトラム首脳部が騒然となる。
「なにごとだ。目標の方向と針路は」
モーリ船長にオペレーターがメインモニターへ画像を表示する。
モーリが目標物の方角に面した３層構造の窓外を見やり、呼吸が途絶した。
ドルドも、エンダルフも、艦橋にいただれもが、言葉を失った。
暗黒に塗りつぶされた絶対真空のかなたに、青く輝く巨大な、あまりに巨大ななにかが浮かんでいた。
青く見えるのは光のドップラー効果により、おそろしいほどの速度でこちらへ接近しつつあるからだった。
アラトラムへと。その背後にある、地球へと。
◇
ゴジラの熱線を、メカゴジラ１１体が散布したナノメタルが完璧に防ぐ。
１１体が収束中性子砲の一斉射で反撃。１１条のまばゆい虹がゴジラに集中する。ゴジラが苦しむ。その背びれがひときわ激しく光る。怒りの熱線はこれまでで最大の威力でほとばしった。ナノメタル粒子緩衝層を再度展開するも防ぎきれない。メカゴジラⅣの右足と、メカゴジラⅦの首から上が消失する。
しかし、メカゴジラⅣは右足が瞬時復旧。メカゴジラⅦも機械の頭を元通りに生やして攻撃を再開した。
「１１体のメカゴジラを建造してもなお、シティ跡地、いや、メカゴジラ開発工場跡地の地下には６００万トンの余剰ナノメタルがある。それは地下を自由に移動し、傷ついて修復が必要なメカゴジラに即座にナノメタルを補充する。すなわち、この地にいるかぎり、メカゴジラは無敵」
ガルグが勝ち誇る。
「このバトルエリアに足を踏み入れた時点で、おまえの敗北は決定していたのだ！」
メカゴジラⅨ、Ⅹ、ⅩⅠがプラズマブースターで直上へ飛翔。高空

へ昇る。
　残るガルグらのメカゴジラをふくむメカゴジラ８体が、収束中性子砲と侵食金属電磁投射弾頭と背びれのブレードランチャーを乱れ射ちする。ビームと砲弾の乱舞。ゴジラが鉄火の暴風に閉じ込められる。爆発につぐ爆発。重金属の爆裂と光の炸裂が、位牌岳や越前岳といった山岳を掘削し、灼熱の溶岩に変えていく。余波だけで大地が耐えきれず海面のように揺れ、旧静岡県全域の地表がめくれあがる。ゴジラも逃れようとするが、８体のメカゴジラが形成する弾幕は、旧関東地区すべてが射程内。ゴジラは中性子とナノメタルの猛攻を一身に受けるほかない。３００メートルの巨体がよろめく。
　集中砲火によりゴジラの非対称性透過シールドにノイズが生じた。ノイズの現れる周期を観測。その瞬間に攻撃が通るよう計算し、上空で待機していたメカゴジラ３体が隼のごとき急降下を開始。
　ノイズ発生周期を維持させるために、地上のメカゴジラたちは弾幕を張りつづける。ゴジラが苦痛の声をあげても手を緩めない。
　重力加速度の速度をはるかに超え、白銀の落雷となってゴジラの頭上に逆落としにふりそそいだ３体のメカゴジラは、合掌した両腕を高速伸長。ナノメタルを急速粒子圧縮で硬質化。モース硬度、ビッカーズ硬度ともにダイヤモンドの１０倍に達する、５００メートルの槍を生成する。
　１０２９万トンの全体重と、高々度からの急降下までも加重させたハイパーランス・チャージが、ゴジラの尾の付け根付近、右足と左足の甲を垂直に貫通し、地に深く縫いつける。
　ゴジラが絶叫する。
　メカゴジラ３体は自らと槍を分離させて離脱。
　立ったまま磔刑（たっけい）にかけられたゴジラが標本にされた昆虫のようにもがく。３本の槍は地中にすみやかに根を張り、互いが手を繋ぐように結合した。ゴジラといえども容易には抜けない。また、槍のナノメタルがやはりゴジラの細胞を侵食し、力を奪う。
「ここからが本番だ」
　ガルグが指令をくだす。メカゴジラ１１体が、大地に固定されたゴ

ジラの南から西に扇形にひろがる。
全メカゴジラが火力を解放する。
メカゴジラⅡが手首を回転させながら侵食金属電磁投射弾頭（フィンガーミサイル）を発射。
メカゴジラⅧが収束中性子砲を射ち、近接戦闘能力より砲台の役割に特化した超攻撃型メカゴジラたるⅤが、頭部ナノプレート砲身から収束中性子砲を、胸部砲身から高出力中性子砲をそれぞれ発射しながら、両肩に1門ずつ担いでいる長砲身の荷電粒子砲も火を噴かせる。
となりのメカゴジラⅥも口からの収束中性子砲と併せて、両手のフィンガーミサイルだけでなく、両肩から伸びる多連装ランチャーからもナノメタル弾頭を射ち込む。
メカゴジラⅢは四足歩行形態で、収束中性子砲を連射。さらに背びれのブレードランチャーを飛ばす。
かと思えば、メカゴジラⅣとⅦ、Ⅷが、収束中性子砲を放射しながら、手の指、膝、腰から侵食金属砲弾の追撃を重ねる。
メカゴジラXとXⅠが収束中性子砲と、通常の手指発射型の侵食金属砲のみならず、膝発射型侵食金属砲（ホーミングショット）、足の甲に追加形成された砲身からの足背発射型侵食金属砲（ハイブレッシャー）の砲門を開く。
荷電粒子砲とナノメタル砲弾の絶え間ない連撃。
そのすべてが着弾の同期をとり、ゴジラの胸板に集弾する。
ゴジラは無抵抗のまますべてを食らう。悲鳴も極大の爆音にかき消される。両足と尾を地面ごと串刺しにされているゴジラは倒れることすら許されない。しだいに動きが弱々しくなっていく。
「この威力！」
ハルオの援護位置についているベルベが興奮のままに叫ぶ。
「すごい！　これじゃゴジラも……」アダムも感嘆した。
極小面積への大火力集中で、ゴジラを無敵たらしめているシールドに致命的な隙が生まれる。
「いまだ！」
ガルグが掌でタッチスクリーンを叩く。
攻撃許可を下されたメカゴジラが、ノイズ発生周期を見定め、最大

出力の荷電粒子砲をゴジラの背びれへ発射。
もっとも大型の背びれが破砕され、周辺の幾枚かが巻き添えで吹き飛ぶ。溶解した筋繊維が飛び散る。
ゴジラが悶絶。背びれを再生するまではシールドが張れない。メカゴジラの群れが追撃を停止。
ガルグのメカゴジラが右腕の部品を組み換え、１００メートル以上はある銛になる。ただの銛ではない。強力な電磁パルスを発生させられるＥＭＰハープーンだ。メカゴジラが銛を構えて突進。大質量の勢いそのままにゴジラの背中、背びれの破壊された傷口を刺し貫く。銛が深く呑み込まれ、先端が体内中心にまで届く。苦悶していたゴジラが痙攣し、やがて力尽きたようにうなだれ、口を半開きにしたまま動かなくなる。
メカゴジラがオブジェとなった破壊神から距離をとる。ＥＭＰハープーンが起動。
ゴジラの内部で２０兆メガワットを超える電磁パルスが荒れ狂う。体内電流が暴力的に乱される。動力源が電力であるゴジラにとっては、原子炉が冷却水を失って制御不能に陥り、メルトダウンしてしまうに等しい。ゴジラはかつて月とおなじ質量の小惑星をも熱線で砕いた。それほどのエネルギーがゴジラ自身の体内で爆弾となるのだ。
「もはや勝敗は決した」ガルグがモニター越しに怪獣王へ勝者の笑みを送る。「さらば、ゴジラ」
ハルオも宿敵の最期を眼下に見届ける。
間の抜けた沈黙が通りすぎた。
「まだなの？」焦燥にユウコがたまりかねてだれにともなく問いを投げた。
鳥瞰するハルオからは、微動だにしないゴジラから陽炎がたち昇って揺らめいているのが確認できた。モニターをサーモグラフィーに切り換える。赤外線分布を可視化した映像では、ゴジラが純白となり、周囲の大気が燃えるような赤に染め抜かれていた。
ゴジラの踏みしめる大地も、原始の色に輝く高温の流体へ変じていく。木々が繁らせる金属の葉が光と高熱をともなう急激な酸化反応、

つまり燃焼しながら、線香花火のように糸を曳いて滴る。
「ゴジラの胸部中心温度、１１６０度を突破、レッドゾーンに入りました。なおも上昇中！」
　ガルグの部下の声には畏怖の響きがあった。
「どういうことだ？」
　ガルグにもわからない。作戦に間違いはなかったはずだ。岩を削り出したような顔に汗が流れる。２キロ離れたメカゴジラ体内の司令部もゴジラからの熱波で室温が４０度以上に上昇している。暑熱はなおもとどまるところを知らない。
「これは、ゴジラの攻撃だ」
　汗だくとなっているマーティンに全員が振り返る。
「おそらく、体内分子を高速で振動させるか、電気抵抗物質に変質させた体組織にとてつもない大電力を流すかして、超高温を生んでいる。骨格も臓器もない、自分自身が鉄をも融かす高温に耐えられるゴジラだからこそ可能な荒業だ」
　前例がある。２０４５年には、人類はビルサルド、エクシフ両異星文明との共同で、世界最高峰たるヒマラヤ山脈を２０００発の核攻撃で崩落させてゴジラを生き埋めにするオペレーション・グレートウォールを決行した。大断層帯に幽閉されたゴジラは熱量を溜め込んで地下を溶融させ、１年かけて膨大なマグマ溜まりを形成。地表近くまでマグマ溜まりに変えたところで、ついには熱線で人工の大断層帯を破壊し、復活を果たした。メカゴジラとナノメタル開発工場を失うことになる富士裾野決戦が生起したのは、その２ヶ月後である。
「高熱は単純だが、防ぎようがない。ナノメタルは耐えられても、ここにいれば、ぼくらは蒸し焼きだ」
　マーティンの言葉は地球人たちの狼狽を誘った。
「ならば、いまこそ決断のときだ」
　ガルグが制御卓に指を踊らせる。
　ビルサルドの部下らが苦痛の声を噛み締めた歯のあいだから漏らす。彼らの足が接している床だけが液化し、さらに脛、膝まで重力に逆らって液体金属が登ってくる。

「なにをしているんです！」
　アダムがガルグの背に詰問した。
「これが生身という脆弱な肉体の限界だ。絶滅を強いるほどの苛烈な淘汰圧に直面し、なお生き延びたいと願うなら、生物は限界を超えねばならん」
　平然と答えるガルグの下肢もすでに液体状のナノメタルにおおわれている。
「人体のナノメタル化こそ、より優れた生物として次なる階梯に登る、生存への唯一の道。これが進化だ」
「環境だけならまだしも、生物としてのありようまでも人の手で変えてしまう、それを進化といえるのか」
　噴き出る汗を拭ってマーティンはビルサルドを非難した。室温はいまや摂氏７０度に迫っていた。環境維持システムの緩衝があるからこそ、この程度ですんでいる。
「個人の同一性や連続性など、考慮するに値しない形骸だ。まずなによりも〝生きる〟ことがすべてにおいて優越する。きみたちを守るにはこれしかないのだ。さあ、ナノメタルの体となって、ともにゴジラと戦おう！」
　振り返ったガルグが金属に置換された手を差し伸べてくる。全身がナノメタルに包まれたビルサルドの輪郭が変容する。全身の肉がみるみる液状化して腐り落ち、歯と歯肉がむき出しとなり、銀に輝く頭蓋骨が露出、金属の骨格標本と化す。背中からは枝分かれした背びれが生えた。さらには腰から脊柱のような尾が長く伸びる。
　その姿はまるで、ゴジラのようだった。ビルサルドはナノメタルの力を借りてゴジラになろうとしていた。
「これが進化だ！」部下のビルサルドたちもゴジラに似た異形の金属生命体に変貌し、口腔から気炎とともに高温の蒸気を吐く。彼らの足元には、血の赤や脂肪の黄が混じった肉色の汚泥。ビルサルドたちが脱ぎ捨てた炭素基の肉や臓器の残骸が白皚皚（はくがいがい）としたナノメタルの床を汚していた。脱皮を遂げて歓喜の声をあげるビルサルドらが、故意ではないだろうが、いましがたまで自分たちの肉体を構成していた腐

肉を踏みにじる。
「ちがう。あんたたちはいま、いちばん大切なものを自ら捨ててしまったんだ。生物として脈々と受け継いできたものを」
マーティンの顔には、むしろ憐れみさえあった。
「生きてるんだか生かされてるんだかわからない進化なんて、ぼくはごめん被るね！」
マーティンは背(そびら)を返して司令部から逃げ出した。
それに触発され、ほかの地球人たちも度を失って出口を目指す。ガルグの金属の顔には失望。
「しょせん下等生物か」
人間大のメカゴジラと化したガルグは、モニター上のヴァルチャーに機械の目を動かした。
「だが、きみだけは違うと信じているぞ、ハルオ」
メカゴジラの緊急脱出口から飛び降りたマーティンたちは、気密服の窒素ジェットパックで減速しながら着地した。
外はすでに噴火口付近のような焦熱地獄になっていた。酸素モジュールでなく外気を呼吸すればたちまち気道と肺を焼かれるだろう。
膨大な輻射熱によりゴジラを中心に強い上昇気流が発生し、周囲から空気が流れ込んできている。マーティンらはゴジラへ吸い寄せられるような暴風に耐えながら、前へ体をかたむけ、1歩1歩、足を踏み出していかなければならなかった。
ゴジラの体温はとうとう５０００℃を突破、ナノメタルを構成するナノマシン群の耐熱性をはるかに上回った。Ｇ細胞と同化して増殖していたナノメタルが、燃える汚泥となってゴジラの体内から押し出され、力なく流れ落ちる。
両足の甲と、尾の根本を垂直に串刺しにしていた槍も赤熱し、蝋のように溶け、重力に引かれて自らを伝う。自重すら支えきれなくなり、半ばから曲がりはじめる。
背中に刺さる長大なＥＭＰハープーンもまた、赤を通り越して白く発光し、石突(いしづき)から垂れ下がっていく。もはやその機能が沈黙している

ことはあきらかだった。
うなだれたままのゴジラは今や、その巨体の各所が業火のごとく染まっていた。戦場離脱を急ぐアダムが振り返り、烈風が吹きすさぶなか、大火災の中心にたたずむ焔の化身のごとき英姿に畏怖の声をあげる。
「龍(リュウ)だ！　赤い龍(リュウ)だ！」
司令部で、完全にナノメタルと一体化したガルグはメカゴジラたちに攻撃を命じた。どのメカゴジラもゴジラに面した部分は高熱にさらされて夕陽のような色を宿している。荷電粒子砲の発射準備に入ったとき、ゴジラを拘束していた3本の槍と、ＥＭＰハープーンが、完全に溶け崩れた。
ゴジラが目を閃光のごとく見開く。その瞳孔が蛇のように細く収縮する。
猛り狂う超高温の熱エネルギーに触れた地形があちこちでプラズマ化し、爆発を起こす。まるで大地が究極生物の復活を熱烈に祝福しているかのようだった。
赤く燃えているようなゴジラが、偽りの生物たちに咆哮を浴びせかける。
ガルグのメカゴジラが収束中性子砲を吐く。
ゴジラも応射。その熱線は青ではなく、怪獣王の赫怒(かくど)をあらわすような真紅の光条だった。
虹のビームと緋色の光が、真正面から衝突。
ゴジラの赤い熱線は、激流を遡上する龍のように、メカゴジラの七色を力任せにかき分けながら直進。砲台たる頭部まで貫通して爆砕させる。
ほかのメカゴジラからビーム砲が殺到する。
１０条の中性子ビームを一身に受けても、ゴジラは動じない。焔に染まったゴジラの背びれが鮮紅色に光る。いままでとは比べ物にならない超高電圧が、周囲の大気組成すら変化させていく。
メカゴジラたちがナノメタル粒子を緊急散布する。しかし高熱の大気中に放出されたナノメタル粒子は、空気中に躍り出るや溶解し

て、正常に機能できない。
ゴジラの眼前に真紅が集中。それは稲妻のようなエネルギーが螺旋に巻いた、紅蓮の熱線となって発射された。
直撃を受けたメカゴジラVはわずか数秒で全身の９７パーセントを喪失。同化していたビルサルドの人格を維持することも不可能になり、修復に必要な電力も発電できなくなった。論理的帰結として、ただの鉄屑となって機能停止するほかない。
赤色熱線は運動エネルギーによる破壊だけでなく、１００万度という太陽コロナなみの高温が、ナノメタルを蒸発どころかプラズマ化させ、不可逆的に消滅させる。単位面積あたりの熱量は限定的ながら核融合にも匹敵する。
指向性を持った水爆といってもよい瞋恚（しんい）の焔が、今度はメカゴジラⅢを呑み込む。積層耐熱装甲を多重展開したが盾ごと本体を素粒子レベルにまで分解されてしまう。それどころか熱線は背後の大洞山（おおほらやま）にまで到達。旧静岡県と旧山梨県を別つ標高１３８４メートルの山岳を抵抗などないように貫通し、どこまでも真紅の道が伸びる。火炎の直線は旧山梨県を縦断するだけではとどまらず、１５０キロ先の旧群馬県にまで届いているように思われた。まさに荒ぶる破壊神の鉄槌。
太陽の表面を跳ねる紅炎のような熱線が過ぎ去ったあと、そこに残っていたものは、メカゴジラⅢのふたつの足首だけだった。核融合の炎に等しい怪獣王の熱線の前にはいかなる防御も意味をなさない。
ただそこにいるだけで溶岩流を生む災厄が、赤く渦を巻く熱線を放つたび、メカゴジラがプラズマの光と炎に消えていく。しかも、発射するごとに威力がさらに強くなっている。
爆音に爆音が重なり、轟音が轟音を覆い、爆発が爆発を食う破壊の光景。関東地方がまるごと業火に燃やしつくされている。それがたった１頭の生物に引き起こされている。首をなくしたメカゴジラの体内で、ヒト型種族の姿を捨てたガルグが歯をくいしばる。
「もうなにをやっても無駄だ。やつを止めることはできん……」
暴れ狂うゴジラの無限赤色渦流熱線（インフィニット）が１０体めのメカゴジラをプ

ラズマにした。残るはガルグの乗るメカゴジラのみ。憎悪を隠そうともしないゴジラが容赦なく最大出力の熱線を浴びせる。メカゴジラのナノメタルも、ガルグの意識や意志も、分子ひとつ残さず消滅し、関東から東海地方を経て中国地方にまで伸びる半円筒状の巨大な溝を大地に穿ち、そのまま日本海を越え、朝鮮半島にまで届く炎の一部となった。

富士山麓を中心として放射状に刻まれた11本の火線は、衛星軌道上のアラトラム号からでも目視で容易に確認できただろう。地球規模の厄災。それほどの惨劇でもマーティンらが無事だったのは奇跡というほかなかった。

「まだだ。まだ終わってない」

ベルベの音声無線に、世界の終わりを見せられたような衝撃に思考が追いついていなかったハルオは耳を疑った。

「まだゴジラの背びれは完全には再生されていない。いまなら間に合う」

ハルオには理解できない。ベルベはなにをしようとしているのか。

「ヴァルチャーもナノメタルでできている。機体ごとＥＭＰハープーンに変形させ、突撃すれば、勝機はある」

「それって」ユウコの声が震える。「特攻……？」

「いまを逃せば、ナノメタルを失ったわれわれにチャンスは二度とこない。しかしわれわれ3人と引き換えにゴジラを倒せるかもしれん。0パーセントより0．1パーセントに懸けるべきだ。われらがここで命を落としても、それでゴジラを抹殺できれば、生き残ったものたちが歴史を引き継いでくれる」

どこまでも合理主義を貫くビルサルドの生きざまそのものだった。

ハルオは決断を迫られた。ベルベの案以外に良策は思い浮かばない。時間は刻一刻とすぎる。ゴジラの背びれが完全再生すればもう終わりだ。打つ手はない。

「ユウコ」ハルオは無線で呼びかけた。「一緒に死んでくれるか」

立体光学映像のユウコが目を大きくひらき、そして、決意に満ちた顔で頷く。

「先輩と一緒なら……」
ハルオは指揮官として顔を伏せた。
「すまない」
地球を飛び立った日、ハルオは両親の乗る輸送車両がゴジラに焼かれるのを見た。約束の地であるはずのくじら座タウｅにたどり着くまでに、１０００人近くがこの世を去った。反転して地球に帰還し、降下してからも、ゴジラに何十人もの同志が虐殺された。ハルオは知識としてしか知らないが、地球ではかつてゴジラを倒すために何億という人間と、さらには人類に味方した怪獣たちまでもが立ち向かい、散華していった。
彼らはみんな、自分の犠牲が未来の人類の礎になると信じていたからこそ、とうてい勝てるとは思えない怪物に挑んだのだ。彼らの出血なくしてアラトラム号もオラティオ号も完成しなかった。人類は絶えていたかもしれない。ならば、いまこそ自分たちが彼らになるときではないのか。
成功しようとしまいと、きっと自分は死ぬだろう。戦って死んだのなら、あの世で胸を張って両親や先に逝った仲間たちに会える。おれはゴジラに屈せず、人類を信じて、この命をなげうったのだと。人間としての義務を果たしたのだと。だが、それをユウコにまで強いることになったのが心残りであることは、否定しがたかった。
「先輩」
ユウコが声をかけた。ハルオは画像に視線を戻す。宙に投影されている幼馴染みは、忠実な軍人の虚飾が剥がされているような、ユウコというひとりの人間の表情だった。
「これが最後ですから、言っておきます」
ハルオは続く言葉を待つ。ユウコは何度かまばたきしてほほえむ。
「あなたのことが、好きでした」
まったく予期していなかったハルオは、しかるべき返答も忘れて、ただユウコの光学映像を凝視するばかりだった。
「だから、先輩、自分を責めないでください。先輩のいちばんそばに最後までいられるのが、わたしはうれしいんです」

ハルオは、どうすればいいか判断がつかず、ただ顎を引いただけだった。自分がどんな顔をしていたかわからない。ただユウコは、画面のなかで、大輪の花を咲かせた。
「時間がない。ハルオ、行くぞ！」
ベルベが勇壮な声を響かせる。ユウコも緊張を取り戻す。貫徹する加速度を得るためには対流圏と成層圏の境目である対流圏界面まで上昇しなければならない。
ベルベのヴァルチャーが最大推力で宇宙を目指すかのごとき飛翔をはじめた瞬間、地上のゴジラが背びれを点滅させはじめた。ハルオには嘔吐感に似た悪寒。おそらくベルベは全身の毛が逆立つ静電気を感じたはずだ。
ゴジラが上空を仰ぎ、青い熱線をベルベに射つ。
「当たるものか！」
ベルベはビルサルドの強靭な肉体に物を言わせ、人類には不可能なハイGマニューバで回避した。
熱線が直前までベルベのいた空間をむなしく貫いていく。
そのままチャフの雲を衝くはずだった光条が、寸前で屈曲。意思をもっているかのようにベルベを追跡する。
「なに！」
あまりに予想外すぎる挙動に、歴戦の軍事教官たるベルベすら対応できなかった。
反転し、さらに亜光速のまま追いすがってくる熱線は、龍のようにベルベのヴァルチャーに食らいつく。爆炎。ナノメタルの天使は破片すら残らなかった。高空にある金属粉の積乱雲群で稲光が閃く。
「そんな。熱線が誘導追尾するなんて」
ユウコの声には純粋な恐怖。
「ゴジラの熱線は荷電粒子砲だ。電子や陽子、あるいは重イオンなどの粒子に電荷を付加して発射している」ハルオは衝撃から自らを早急に立ち直らせるためにも、思考を組み立てていく。「通常は電荷的に中性な中性粒子砲だが、仮に熱線の電荷をプラスにして、ターゲットの電気属性をマイナスに傾けることができれば、磁石のS極にN極が

引き寄せられるように、ビームは曲がってでも目標を追尾することになる」
どのような手段で目標にマイナスの電荷を持たせるのか不明だが、考えられる理由はほかにはない。
２機のヴァルチャーをにらむゴジラが、また背びれを光らせる。
「ホーミング熱線がくる。ユウコ、プラスの電荷でしのげ！」
「了解、先輩！」
ハルオがヴァルチャーのＡＩに指示式を高速入力する。それ自体が発電機でもあるナノメタルがパイロットの命令をすみやかに実行。ハルオとユウコの両機はプラスの電気に守られる。こうなればゴジラの熱線はＮ極に対するＮ極のごとくヴァルチャーと反発するため、絶対に当たらない。
閃光は地上からではなく、真上。
すさまじい稲光と轟音が、大気を引き裂く。
同時に、熱せられた空気が急激に膨張して真空を生みだし、補填しようと周囲からふたたび空気が流れたときの振動で、雷鳴の重低音がとどろく。
無線からはユウコの絹を裂くような悲鳴。
空中を飛ぶユウコのヴァルチャーに落雷が直撃したのだ。ハルオは反射的に空を確認。金属粒子の厚い雲が広がるばかりだった。ときおり稲妻が走っている。雲を構成しているのが微細ながら重い金属の粉であれば、互いに激しく摩擦することにより、自然雲の霰（あられ）と同様、雲中にはマイナスの電荷が蓄積される。雷雲と地上との電位差が拡大しつづけると、その不均衡を解消しようとして放電現象が起きる。これが雷だ。電圧は最大１０億ボルト、持続時間は０．０００１秒ほどしかないが、９００メガジュールの熱量は、瞬間的に２万から３万度もの高熱を発生させる。
ユウコも墜落こそしていないが、中破相当の損害を負っている。２発めは耐えられない。
ゴジラが背びれを青く発光させながら、まだ狙いつづけている。ハルオには確信。落雷は偶然ではない。チャフ雲の雷はマイナス電荷

であるため、プラスの電荷をもつものに引き寄せられる。
ゴジラの誘導熱線をかわそうと電荷をプラスにすれば、天空から10億ボルトの雷撃で撃墜される選択地獄。自然現象までがハルオたちに牙をむいていた。
（地球が……）
ハルオの心が無力感に塗り込められていく。
（地球が、ゴジラの味方をしているということなのか？　おれたちではなく）
ゴジラの前方に、垂直の光輪が出現する。光に近い速度で追いかけてくる熱線が発射寸前となる。
「ハルオ先輩、逃げてください」
ユウコの声は弱々しかった。
「わたしがゴジラをひきつけます。そのあいだに」
「バカを言うな！　その機体でどうやって」
「だから、です」
ユウコの機体がハルオから離れる。
「だめだ。やめろ！」
不安定な飛行はたしかにゴジラの注意を惹いた。
「先輩は、わたしの希望だったんですよ。だから先輩」ユウコが決別を告げる。「みんなをお願いします」
光輪が収縮してゴジラの口先で光の球体となる。常識はずれの電圧で加速させられた荷電粒子が、亜光速の激流となって大気中を迸る。
ユウコはプラス電荷を撒かなかった。
砲口外（オフボア）にいるユウコへ熱線が曲がる。まるで目がついているかのように導かれ、それでもユウコがその卓越した操縦技術でゴジラに人間の意地と最後の抵抗をみせたか、ヴァルチャーの下半身だけを食いちぎっていった。
ハルオは激情に喉が張り裂けそうなほど絶叫し、急加速。ユウコのヴァルチャーを空中で回収した。
怒れる炎をその身に宿したゴジラが背びれを輝かせる。ハルオは

上半身だけのヴァルチャーをかかえたまま、低空飛行で撤退した。怪獣王の背びれから電光が消える。次いで、空へ挑戦するような咆哮が、長く長くつづく。
撤退途中、ハルオはマーティンの一行と遭遇した。生きて再会できたことを喜ぶ間もなくハルオは着陸しヴァルチャーのハッチをこじ開ける。
「ユウコ、大丈夫か……」
惨状を目にしたハルオは最後まで言いきることができなかった。
眠っているようなユウコの閉じられたまぶたから、涙のように血が流れる。
あまりにも軽すぎるユウコを抱きしめ、ハルオはただただ、慟哭するほかなかった。
そのときだった。
アダムが天穹を見上げる。ほかの士官もつられて仰ぐ。ひとり、またひとりと立ち上がり、呆然とした顔で、空に釘付けになる。
号泣していたハルオも異変に気づき、ユウコを抱いたまま皆の視線をたどる。
いつの間にか中天を塞ぐ金属粉の暗雲は消え去っていた。降下してからはじめて見た、抜けるような青空だった。
しかしそんなことはどうでもよかった。桁(けた)が違う、異様極まるものが空にあった。
大空を覆いつくす金色(こんじき)の巨体。
左右に備わる翼のような部位は、両端が東西の地平線のさらに向こうまで届く。
蒼穹に霞むほど遠方にあるのに、なお巨大を通り過ぎて広大な雄姿は、全体像を掴むだけでも、かなりの時間を要するものだった。
「龍……」
アダムが我知らず呟いた。いわれてみると、たしかに黄金の翼をひろげた、3本の首をもつ龍にみえる。
巨翼はおそらく恒星のエネルギーを吸収するソーラーパネルの役割を果たすのだろう。

現実に目の当たりにしているのに、ハルオたちにはいまひとつ現実感がなかった。恐怖すら湧かないでいる。人間の感覚では捉えきれないスケールだからかもしれない。
北半球を両翼で楽に覆い隠してしまえる、惑星級の黄金龍が、3本の首を伸ばし、大気圏外から地球を冷徹な眼差しで値踏みするように見定める。
「あれが、生物だっていうのか……」
士官のひとりが膝からくずおれた。
「そう、あれこそ、わが母星を滅亡させた、忌むべき怪獣」
エクシフの神官メトフィエスが、長身に抑えがたい感情の沸騰と想像を絶する自制心との葛藤をみなぎらせて、拳をにぎった。
「その名すらわれらエクシフのあいだでは禁忌とされてきた、生命あふれる星を自らの糧とする宇宙超怪獣――ギドラだ」
「ギドラ……」
アダムが反芻した。
「まさか、地球にくるとは……」
メトフィエスが言ったとき、富士の方角から、ゴジラの雄叫びが轟いた。
ゴジラが、天空のギドラに戦いを挑もうとしていた。
「そうか、ゴジラの本当の敵は、ぼくたち人類なんかじゃない、ギドラだったんだ」
マーティンに全員が注目した。
「地球生命という考え方がある。地球もひとつの生命体という意味だ。地球は、どの時点でかはわからないが、いつかギドラが自分を喰いにくると覚(さと)った。それで自分を守らせるために怪獣たちを生んだ。人類さえ、そのプロトタイプのひとつだったのかもしれない」
月より巨大な宇宙生物というこの世ならざる光景から目を離さず、あるいは離すことができないまま、マーティンはつづける。
「ついに地球はゴジラという最高傑作を創った。だがゴジラといえども単一個体だけではギドラには勝てない。地球をまるごとゴジラが利用できるよう生態系を書き換え、万全の迎撃態勢を整える必要が

あった。ゴジラは、2万年もの昔からこの日がくるのを予知していたんだ。地球に外宇宙から危機が迫ってくることを。そのときのために2万年かけて準備しておかねばならないことを。だからまず邪魔な人類やほかの怪獣を駆逐し、この地球を自分が有利に戦えるようつくりかえ、自身も成長させてきたんだ」

2万年という時間さえ、ゴジラにとってはぎりぎりだったのかもしれない。マーティンは付け足した。

「いままでメカゴジラシティを襲ってこなかったのもそれが理由だ。ゴジラはシティを見つけられなかったんじゃない。あえて放置していたんだ。メカゴジラはたまに飛来するG細胞由来生物を捕まえて増殖するだけで、新たな指令がないかぎりはゴジラと戦おうとはしなかった。ゴジラにとっては脅威ではなかった。それをわざわざ焼き払うエネルギーさえ惜しかったんだろう。だから、ぼくらがシティに入って起動させたとたん、破壊しにきたんだ」

ゴジラが吠えた。地球上のどこにいても視界に入る黄金の宇宙超怪獣が3本首をもたげる。ゴジラを捉える6つの瞳には、蟷螂(とうろう)の斧を振りかざす虫けらをみる冷笑が浮かぶ。

「2万年溜めたエネルギーの全身全霊を込めた熱線なら、もしかしたらゴジラはその身と引き換えにギドラを倒せていたかもしれない。だが……」

マーティンは歯噛みした。メカゴジラと死闘を繰り広げ、傷を負い、1億トンあまりのナノメタルを完全焼却するために、ゴジラは少なくないエネルギーを消耗していた。ゴジラは勝ち目のない戦いにもなお退く気色を見せない。ギドラとの対比もあるだろうが、あれだけ大きかったはずのゴジラの後ろ姿が、いまはとても小さく見えた。

ほかならぬゴジラこそが、地球にとって最後の希望だった。ハルオたちがそれを摘み取ってしまった。

「おれたちが、地球を殺してしまったんだ。おれたちは……何も……」

物言わぬユウコを胸に抱き、黄金の三つ首龍に支配された空を眺めながら、ハルオの唇は絶対に認めたくない言葉を紡ぐ。

「おれたちは……何もしないほうがよかったんだ……」

地球（ほし）を継ぐもの

ハルオたちは、一様に天を仰いだまま、凍りついたように凝然と硬直するほかなかった。

青く霞む大空を、光輝あふれる金色が覆いつくす。

ハルオたちのいる旧静岡県側の黒河内岳中腹から見て、南の海風を遮るように横たわる真富士山や青笹山といった屏風のような山々のさらに向こう、太平洋の水平線のかなたから伸びる、3本の長い首が、別々の生き物のように動く。それぞれの頂きにある龍にも似た頭部が、王冠のごとく何本も屹立した角を振りかざす。2つずつ嵌まった眼には、捕食者の欲望が恒星のごとく赫々と燃える。

尋常でない大きさのために、地上のハルオたちには、数億の星霜を閲してきたであろうことが容易に理解できてしまう3つの荘重な頭部以外、その全容を掴むことはできない。3本の首の根本である胴体は東南アジア全域から陽光の恵みを奪い、右の翼は西太平洋を、左翼は旧中国から旧インドを覆って、地球の表面積の半分におのれの巨影を落としていた。2本の尾は太平洋と南極大陸の上空を南北に縦断して、先端は南米大陸南端の空にまで届く。

その全身がくまなく黄金に輝き、さながら天があまねく燃えているかのようで、冒しがたい神々しささえあった。

「これが、ギドラ……！」

物言わぬユウコの体を抱きかかえたまま、黄金色に輝く空という、この世の終わりを告げるにふさわしい壮麗無比な光景を前に、ハルオは畏怖と恐怖に肺が押しつぶされ、呼吸すらままならない。常識はずれという表現すら陳腐に思えるほどの巨大さだった。

ハルオのそばに佇む神官メトフィエスが、なにかに思い至って彫像のような横顔をしかめる。

「そうか。タウeも、おまえの糧となっていたのか」

ハルオらはメトフィエスに目を動かした。くじら座タウ恒星系第4惑星e。地球に近似した環境をもつゴルディロックス惑星と目され、ゴジラによって母星を捨てざるをえなかった人類の新天地となる

はずだった星。
だが、ハルオたちを乗せた恒星間移民船アラトラム号が２０年かけてたどりついたそこは、重力も気温も大気組成も、地球とはまるで違う、どんな極限環境微生物さえも生存の芽がない荒涼たる地獄の惑星だった。
なぜ、ビルサルドやエクシフの優れた科学力も借りた予測と大きく異なる結果となったのか。おそらくは、地球からタウｅを最後に観測してからアラトラム号が到着するまでのあいだに、ギドラによって滅ぼされたのだ。１１．９光年という距離を考慮すれば、地球人類が〝約束の地〟として白羽の矢を立てたときには、タウ星ｅはすでに生命を育む星ではなくなっていた可能性さえある。
震動。富士山麓のゴジラが九天（きゅうてん）を支配する黄金の三つ首龍を睨む。深い淵のような眼は、人類と相対（あいたい）していたときとは比較にならない憤怒の坩堝（るつぼ）となっていた。大樹を束ねたような強靭な足を踏みしめる。長さ１キロ近い尾を叩きつけ、体高３００メートル超という自らの巨体を大地に固定。
その背びれに、雷光として視認できるほどの高電圧が走る。
「まさか……あいつとやり合う気か」
高台で遠望するマーティンの顔には信じられないという色があった。ハルオも同感だった。いくらゴジラが規格外の怪獣とはいえスケールが違いすぎる。
人類の思惑など関係なく、ゴジラの柊（ひいらぎ）の葉のような鋭利な背びれ群で荒れ狂う紫電は光度と勢いを増していく。
ゴジラの瞳孔が憤怒に細く収縮。
次の瞬間、青みを帯びた、目もくらむような閃光が、ゴジラから発せられた。
本来、大気中では荷電粒子はたちまち分散してしまう。水中で水鉄砲を撃ったときのようなものだ。地球上で荷電粒子ビームという水鉄砲を発射するには、大気という水を克服する技術が必須となる。
ゴジラはその物理的難題を、３テラワットという途方もない膨大な電力による超高電圧で、強引に大気を貫通するという力業で解決して

いた。単純だが、実現可能であればこれ以上に有効な方法はない。この高加速荷電粒子ビーム……熱線によって、ゴジラはかつて全世界の大都市をことごとく灰塵に帰し、あすを信じて立ち向かった人間たちを細胞すら残さず全滅させてきたのだ。

その破壊の光が、限界まで引き絞られた矢のようにわき目もふらず、大気圏外のギドラを目指す。空気の存在できる高度から真空の宇宙空間へ瞬間的に飛び出した熱線は、たがわず黄金龍の中央の首なかばへ突き刺さった。

だが、熱線の放出が終わってからも、ギドラの動向にはなんらの変化も見られない。

ゴジラが喉からうめきを漏らす。

その３００メートルの巨魁（きょかい）から陽炎が昇る。とくに熱上昇の著しい部分は赤熱して輝く。漆黒の魔獣に燃え盛る炎のような紋様が加わる。背びれで真紅の電光が激しく荒れ狂うさまは、紅蓮の業火そのものだった。

「ゴジラを中心に、周辺の空間ならびに地表面の温度が急上昇！」

ジョシュ・エマーソン少尉が端末で観測して叫んだ。

「メカゴジラを倒した、あれをやるのか。まだそんなエネルギーが残っているとは」

マーティンの声にはゴジラへの畏怖とともに希望もわずかながら含有されていた。メカゴジラを、1億トンのナノメタルを完全焼却した無限赤色渦流熱線（インフィニット）なら、あるいは……。ハルオも我知らず拳を握る。

背びれの赤い発光が最高潮に達して、ゴジラの周囲に展開。それが鼻先の一点に凝集する。

天が二つに割れた。

紅炎（プロミネンス）のような渦を巻いた真緋（あけ）の熱線が、黄金の空へ向かって一直線に疾（はし）り、ギドラの中央の首元へ吸い込まれていく。地上からでも金の体表面で爆発が起きたことはかろうじて目視できた。見かけ上は小指の爪ほどもない爆発だが、小さな島なら跡形もなく消し飛ぶほどの規模だった。

それだけだった。
月をも凌駕する体積を誇るギドラにとって、島を吹き飛ばす程度の攻撃など、人間なら蚊に刺されたよりも些事にすぎない。
ギドラが、ようやくゴジラに気づいたように3本の首をめぐらせる。
ゴジラが吼える。赤熱が急速に退色していく。
3つあるギドラの頭部のうち、向かって左の龍が顎(あぎと)をひらく。舌はない。10万キロの距離を隔ててもなお、鋭い牙の並びがみてとれる。
ハルオは脊髄に液体窒素をそそぎこまれたような錯覚をおぼえた。それがなんという名の感情なのか自分でもわからなかった。思考を放棄して膝を屈し、ひたすらに平伏して許しを請いたくなる誘惑が、強烈な衝動となってハルオの五体を襲ったのである。現に地球人のなかには、無意識にか手を組み合わせて呆然としているものすらいる。自分たちを屈伏させんとしているその感情こそ、原初の時代に無力な塵芥(ちりあくた)でしかなかった人類が、森羅万象を統べる超越的な存在――神へ捧げた祈りとおなじものであるとは、ハルオは知らない。
開かれたギドラの口内に、第二の太陽のような閃きが灯った。
爆光。
天よりふりそそいだ凄まじい雷霆(らいてい)が、神に歯向かうゴジラを天罰のごとくに打ち据える。ゴジラを中心とした半径10キロの地表は瞬時に蒸発。その外周部では地殻が断裂して数キロ単位の破片となり、巨船が沈没する寸前に舳先が持ち上がるように聳立(しょうりつ)する。
光に遅れて、衝撃波と爆轟が狂える圧力となって吹き荒れる。爆風ではなく極大の音波がハルオたちにまで及んだ。余波にすぎないにもかかわらず、内臓を震動させられてのたうちながら嘔吐している地球人もいた。ハルオやマーティンは、頭が内側から破裂してしまいそうな激烈な頭痛に叫び、膝からくずおれた。
「ゴジラは……」
あまりの激痛に視界に原色が飛び交うなか、ヘルメットにつつまれた頭を両手で押さえながら、ハルオは死力を振り絞って前方へと顔を

上げる。
風景が一変していた。
富士の麓に一面ひろがっていた原野は、目測で直径２０キロ、深さ数キロという擂り鉢状にえぐられていた。元よりゴジラとメカゴジラとの戦いで天災のあとのように荒れ果てていた裾野だったが、その痕跡すらもない。圧倒的な破滅の光景に言葉を失う。
絶叫。アダム少尉が意味をなさない悲鳴をあげながら、ヘルメットに包まれたみずからの頭を引っかきまわしていた。涙とよだれと鼻水を垂れ流し、瞳孔が左右で別々に動いている。マーティンが抱きしめてなだめるがアダムは幼児に退行したように泣き叫ぶばかりだ。だれもアダムの醜態を責められなかった。抱き留めるマーティンも、青くなった唇が震えていた。
「あれは、ゴジラどころの脅威じゃない……！」
マーティンとまったくおなじ思いをハルオも抱いた。どれだけの楽観主義者であっても、ギドラが人類のためにゴジラを倒しにはるばる宇宙から駆けつけた救世主だとは、とうてい考えられまい。ゴジラが倒れたときが地球の滅亡するときだ。この場にいる全員がそう直感させられていた。
巨大隕石の衝突痕のような擂り鉢の中心で、動くものがあった。長い尻尾が振るわれる。ゴジラだ。生きていた。しかしその挙動は満身創痍のように弱々しい。立ち上がることさえ精いっぱいとハルオには映った。
「ゴジラには、１５０発の核弾頭も完全に防いだ非対称性透過シールドがあるはずだ。なぜ傷を負っている」
ジョシュが機器を操作し、愕然となる。
「ギドラの攻撃のさい、ゴジラを中心に半径５０００メートルの範囲で、最大２の１０の１１乗Ｇの重力加速度を検知。ありえません！」
「そうか、引力か」
マーティンの目が見開かれる。
「角運動量が２で質量も電荷もない寿命無限大の重力子を集束し、重力波を媒介として重力相互作用を発生させれば、対象は中性子星なみ

の重力加速度で急激に引っ張られるため、イオン間相互作用に水素結合、双極子相互作用に中性原子や分子の凝縮力を分断されて、分子レベルで分解してしまう。重力波という振動は真空だろうが大気中だろうが関係なく空間自体を媒介にして光速で進む。重力波そのものは目に見えないが、光子の流れが重力との相互作用で曲げられることによって、われわれにはまるで通過する空間が稲妻のように輝いて見えることになる。さしずめ」マーティンは苦い顔のままだった。「――引力光線、とでもいうべきか」

質量をもつ物体が存在するだけでその空間に歪みが生じる。水の上にアメンボがいるとその脚が接している水面が歪む。アメンボが動くと波紋が広がっていく。これとおなじように物体が運動すると時空の歪みが宇宙空間へ波となって影響を及ぼす。ただし重力は質量に比例する。観測できるほどの重力波は、中性子星や白色矮星などのように極めて重い星が連星をなしてワルツを踊るような加速度運動をするか、それらが衝突合体するか、あるいは超新星爆発、ブラックホールといった、劇的な天体現象でしか放出されない。それほどの重力波でようやく、太陽と地球の距離が髪の毛の直径の百万分の一程度伸縮する力が生じる。しかしギドラは極微の時空を歪曲させるどころか星の地殻を破壊するほどの強大な重力波を自在に発生、集束、制御しているのだ。

怪獣という存在が既知のものとなっているハルオらにとってさえ、生物の概念を根底から覆させられる事実だった。

「重力は次元すら越えて作用する。まして同一次元上なら重力波にはあらゆる防壁が無意味だ。天体さえ貫通してしまう。熱攻撃でも砲弾でもない、特定座標の空間そのものに干渉する引力光線には、非対称性透過シールドといえども、まったくなんの役にも立たないんだ」

立ち上がったゴジラは、しかし、すぐによろめいて片膝をついた。それでもなお戦意は衰えておらず大音響の咆哮をギドラへ浴びせかける。

はるかな天に座す三首龍が、今度は口を3つともひらいた。

「逃げましょう、いますぐ、ここから!」

生物としての本能がジョシュ少尉に叫ばせた。だがマーティンは震えるアダムを抱きすくめたままだった。
「逃げるって、どこにだ」マーティンの横顔には苦渋。「あんなもの相手に地球のどこにも逃げ場はない。助かるとしたら、そう、神の気まぐれにでも頼るしかないよ」
直後、ギドラの三つ首から引力光線が発射され、それは途中で蛇のようにからまり、1射目よりさらに超強力な極太の光の束となってゴジラを呑み込んだ。
一帯の大地まで最小単位の粒子に分離させて消失させながら、ゴジラを北の方角へ押し飛ばしていく。破壊の道筋はたちまち地平線のかなたへ伸びた。
ハルオの耳に、ゴジラの断末魔の声が聞こえた気がした。
◇
「いったいどうなっているんだ、地上の状況は」
高度3万5876キロの静止衛星軌道を周回する恒星間移民船アラトラム号の船橋で副長タケシ・J・ハマモト准将は度を失ってオペレータたちに怒鳴った。アラトラム号からギドラまでは数万キロも離れているが、手を伸ばせば届くところにいるように感じる。ギドラが惑星のように巨大だからだ。退避しようにも下手に動けば軌道から外れてしまうおそれがある。アラトラムにはヒト型種族の居住可能な新たな星を探す出航以来の最重要任務があった。20年以上という長期の放浪で動力炉も燃料も限界に近づいている。だからこその地球帰還という決断だった。外れた衛星軌道にふたたび入るぶんの動力も惜しい。数少ない同胞たる降下部隊の生存者たちを見捨てることもできないため、ギドラ出現後も危険を承知で現状を維持していたのである。
オペレータが観測機器を駆使し、コンピュータに演算させる。出力された結果にオペレータも信じられない顔となる。
「ゴジラの現在位置、41。24′29．7″サウス、43。16′47．5″ウエスト、半径200キロメートルの範囲内と推定！」
「ばかな！」座標は南米大陸の旧アルゼンチン東1500キロの沖合

いだった。「あれだけの質量を、ほんの一瞬で地球の裏側まで吹き飛ばしたというのか」
　上ずった怒号を飛ばすハマモトをよそに、船長ウンベルト・モーリ大将は地球を青い星として俯瞰できる船橋の耐熱ガラス越しに現実を見せつけられて戦(おのの)いた。日本列島のほぼ中心にあたる富士山麓から北へ、衛星軌道上からでもはっきり視認できる規模の焔の道が描かれ、それは旧ロシア領を縦貫し、北極圏を越え、北米大陸東部にまでなんなんとしていた。地球を半周していてもなんら不思議ではなかった。
「アラトラム、こちらサカキ大尉。聞こえるか」
　音声無線に船橋の面々が我れを取り戻した。
「いますぐ軌道を離れて最大速力で退避してくれ。おれたちに構うな。亜空間航行でもなんでもいい、とにかくこの化け物から逃げるんだ」
「しかし」
　モーリは船長としての責務から逡巡を見せた。降下部隊は次代を担うべき若者ばかりだった。ゴジラとの戦いですでに十数名しか生存していないとはいえ、地球人類の未来は彼らこそが紡いでいかねばならなかった。
「こっちにはアラトラムに戻る手段がない。アラトラムの揚陸艇がいまから大気圏に突入しておれたちを拾う猶予もない。ここでぐずぐずしていたら人類は全滅だ。まだそっちには３０００人以上もいるんだろう！」
　映像ごしのハルオが焦燥しきった顔で怒声を飛ばした。その肩に手を置いてマーティンがモニタを覗き込んでくる。
「モーリ船長。サカキ大尉の具申はわれわれの総意です。残念ながらいまのわれわれには奴への対抗手段はありません。あなたがただけでも逃げてください。だれも恨みはしませんよ、こんな奴が相手じゃ……」
　マーティンが上方へ視線を動かした。モーリも窓外に目をやった。いまふたりは軌道上と地上から、月より巨大な有翼の三頭龍を同時に

見つめていた。
「ビルサルドはサカキ大尉の進言を受け入れる。３０００名余と十数名。現状では即刻離脱がもっとも合理的な選択だ」
　アラトラムの最高意思決定機関たる中央委員会の一角でもあるドルド中将が常と変わらない口振りで表明した。ドルドならたとえ自分が地球降下部隊の側（がわ）だったとしてもおなじ決断を下すだろう。ビルサルドはだれもがそうだ。
「献身のみによって道は開かれる。元よりわれらは地球に残留した数多の同朋の献身でここに立っている。いままた彼らの献身によりて命を永らえること、あるいは是非もなし」
　エクシフ代表として中央委員会に属しているエンダルフ軍属神官兼中将が七芒星の印を切る。
　ドルドとエンダルフにモーリ船長を加えたのが中央委員会の中軸となる三巨頭である。そのうちふたりが離脱に賛成していた。
　船長、とハマモト副長が脂汗を流しながら眼鏡の位置を直す。
「やむを得んか……」
　モーリ船長は断腸の思いから左目のそばの長い古傷を歪めた。
「これより本船は３号事案を破棄。現宙域からの退避と同時に、現時点でもっとも移住成功の可能性が高い第１候補地に繰り上げとなった、メシエ第７８散光星雲ＳＹ―３恒星系第３惑星キラアク星への移民計画を発動する。１６００光年の超長距離亜空間航行だが、活路はそこにしかない。全乗員に通達。コンディション・デルタ。宙域離脱（ショック・アウト）に備えよ」
　決まれば生粋の軍人であるモーリの指揮は早かった。地球人とエクシフ、ビルサルドの３種族が連携してアラトラム号をジャンプさせるべく尽力する。
「主機、点火準備」
「了解。通常推進機関停止。船内生命維持以外の全エネルギーを重力コイルへ注入切り換え」
「１０秒後に隔壁緊急閉鎖」
「ゲマトロン演算卓、重力コイル制御卓、起動」

「ゲマトロン演算統合システム、スタート」
「主機伝導システムは動力注入を継続」
「重力コイル、出力８５％で稼働中」
「注入作業続行。１番ブロックから６６６番ブロック出力正常。スピン開始」
「ハブステーション異常なし」
「重力コイルへのエネルギー流入、順調です」
　オペレータたちが複数のモニタに表示されるおびただしい情報を捌きながら必要な入力をこなしていく。エンダルフが亜空間航行に欠かせないゲマトロン演算子を用いて無理式を整数へ変換させる。動力区画へ移動したドルドが主機関連作業の陣頭指揮をとる。３０００人の乗組員が奔走する。
「初期コンタクト問題なし。第１次チェックリストをクリア」
「全隔壁の閉鎖を確認。乗員の亜空間航行配置確認を終了」
「補機、出力上昇中。異常なし」
「主機システム、臨界まであと５％」
「流入エネルギー圧力、２００％」
「構わん。流入続けろ」
「第５４番、９１番ブロックで爆発！　なおも炎上中！」
「どうでもいい！　動力強制注入。警報は無視しろ！」
「フライホイール、ロック解除。回転開始」
「ゲマトロン予言座標突入。時空俯瞰ポイント算出。ワームホール出現確率４４０％で規定観測」
「ゲマトロン演算子、実体化予測座標入力完了。自己診断プログラムによる確認終了。問題なし」
「フライホイール回転数１万。なおも上昇中」
「重力コイル、出力１０１％。臨界突破」
「時空間制御を開始」
「亜空間航行プロシージャ、最終段階です」
「いけます、モーリ船長！」
　ハマモト副長にモーリがうなずく。

「カウントは省略だ。重力コイル接続」
「接続、了解！」
管制室からのモーリの指令を受けたドルドが亜空間航行のトリガーとなるレバーを押し上げる。
アラトラムの前方に、背景の宇宙空間よりなお暗黒の球体が現れる。奇跡的な確率をゲマトロン演算で操作して、ビルサルドの科学技術を手足にひらいた、人為的なワームホールだ。そこへ飛び込めば１６００光年のかなたへ脱出できる。
アラトラム号がワームホールへの突入をはじめる。
そのときだった。
ギドラが動いた。
まるで羽ばたくように巨翼を打ち下ろす。
ギドラ自身はアラトラムなど眼中にすらなかっただろう。だが体積と同様に質量も地球に迫るギドラはそれ自体が強い引力をもつ。そのわずかな坐作進退（ささしんたい）さえ周囲の重力場に大きな影響を与える。
「軌道誤差、修正できません！」
「ワームホールとの距離拡大！」
モーリとハマモトが愕然とする。アラトラムがギドラの引力圏に捉えられたのだ。
「亜空間航行を中止。通常推進機関を緊急始動！」
「機関始動まで９００秒！」
「スラスターで対応できないのか」
「だめです。ギドラの引力が全スラスターの推進力を凌駕。本船が、ギドラに吸い寄せられていきます！」
開かれた脱出口が無情に遠ざかっていく。全長１．５キロメートルのアラトラム号が姿勢を維持したままワームホールとは反対側のギドラへ流される。すべての船窓はいまや金一色に染まっている。
「なんとかならんのか、このままではギドラに墜落するぞ！」
喚き散らすハマモト副長が混乱の感情のまま腕を振るう。そこで異変に気づく。ハマモトの右腕から金粉のような粒子が飛散していた。モーリも副長の身になにが起きているのか理解できなかった。

「モーリ船長、これは」
いったい、とハマモトは最後まで口にすることができなかった。全身が金の粒子に分解されて消失。眼鏡があるじをなくして床にむなしい音を響かせた。
オペレータたちから悲鳴があがった。彼ら彼女らからも光る粒子が舞っていた。生きながら肉体を分子に還元される未知の恐怖。痛覚さえ反応しないことがさらにおぞましかった。恐慌して両腕を払って抵抗するが無意味だ。なすすべなく光となって昇華する。シートに残ったのは気密服だけだった。
人体が煌めく粒子に変換されていく異常な現象は、船内全体をひとしく襲った。「ママ！　怖いよ！」居住区で金粉へと姿を変えつつある幼女が必死に母親に取りつく。「どうして、どうしてなの」母親は次第に質量を失って軽くなっていく娘を魔手から守るように強く抱きしめる。「ママ！」娘の後頭部が粒子となって分解。さらには首から上が消える。娘は小さな気密服を残して霧散した。「うそよ。こんなのうそよ」母親はひきつった笑いを貼りつけて娘の名前を連呼しながら、空になった気密服のなかを狂ったように探す。だが彼女もまた、すべての細胞を構成する分子が量子変換され、風化するように消滅した。
亜空間航行の要となる重力コイルを擁する第1機関室では、作業に従事していたビルサルドが光の粒に変じて一掃された。最後に残ったドルド中将も原因不明の分解がはじまっている。ドルドはただ現状を打開する方法を脳内で高速検索した。検索結果はゼロ。自分たちを襲っている異変が何なのかすらわからないのでは手の打ちようがない。できることがないのであればあらゆる行動に価値は生まれない。したがってドルドは黙して堂々たる直立不動を保つのみだった。
老将の脳裏ににわかによみがえる光景があった。永い放浪の果てに、居住可能な環境を有する緑の星、地球を訪れたばかりのときのことだ。移住に先だって、地球側の代表と協議する過程で会食の席が設けられることになった。地球人は食事を挟んで会談を行なう習慣が

あるらしかった。すなわち地球人は――ゴジラという脅威を前にして異星文明の科学技術という対抗手段を手に入れられる好機だった事情があるにせよ――ビルサルドを異物ではなく、客としてもてなした。絶対真空の宇宙を当てもなく旅する宿命のビルサルドにとって食事は燃料補給の意味合いしかない。そんなドルドから見ても、かつては歴史ある宿泊施設であったという欧州連合軍司令部で提供されたのは、異星人たるビルサルドに対して礼を失しないよう、最大限の配慮をもって斟酌されたであろうことが容易に想像できる料理の数々だった。

最後に、1本の瓶が封を解かれた。地球人たちが秘蔵していたとおぼしき赤紫の醸造酒。発酵という時間と手間をかけたからといって栄養価が高まったり携行性が良好になるわけでもない、単なる嗜好品である。飲んだドルドにはただエタノールと糖、アミノ酸、タンニンなどが溶け込んだ水としか感じられなかった。ただ味わいや向精神効果を得るためだけに貴重な資源を費やす、それはビルサルドの哲学では無駄以外のなにものでもない、非効率な文化で、忌むべき不合理であった。

だが、ビルサルドが合理性のみを追求してきたのは、そうでなければ宇宙の旅など耐えられなかったからだ。身も心も鋼(はがね)たれ。ただ生き抜くために。それがビルサルドだった。

もしビルサルドも、母星がブラックホールの近くなどではない豊かな環境であったなら、地球人のように自然を慈しみ、人生を謳歌し、その一環として食事を楽しむという文化が醸成されていたのかもしれない。生存に必要でない不合理を楽しむ余裕があったかもしれない。それこそが知的生命体の文化というものなのかもしれない。不合理なことにも資源を注力できる世界でこそ、そういった精神的な豊かさは育まれるのだろう。

巌(いわお)のようなドルドが厚い唇をわずかにほころばせた。

「また、あの不合理を味わいたかったものだ」

ビルサルドを束ねていたハルエル・ドルドが、全身を完全に粒子へと変換され、それはアラトラム号の隔壁を透過してギドラへと吸い込

まれていく。
　エクシフの代表でもあるエンダルフ枢機卿は、自身の存在が瓦解する破局にあって、ひたすらガルビトリウムの結晶に祈った。母星エクシフィルカスでわずかに産する翡翠色の鉱物から成形されたこの神器にして祭具こそは、故郷を想うよすがとしてエクシフたちの心のよりどころでもあった。エクシフが滅びゆく母星から持ち出せたのは自らの命とガルビトリウムだけと言っても過言ではなかったのである。結晶は世代を超えて受け継がれてきた。星を奪われた先人たちの無念と、自分の世代ではなくとも子や孫がいつかは第2の故郷を探し当てるはずという希望を、小さなエクシフィルカスともいうべきガルビトリウムに託したのだ。
「もはや幾度も代が替わり、われらの星を食らいつくした〝虚空の神王〟の記憶は神話と歴史のかなたのものとなっていた。星を捨て、命をつないで逃げ延びたわれらが、ふたたびきさまの目撃者となるとは、これが定めというのか。エクシフは、きさまからは逃れられぬというか」
　エンダルフはガルビトリウムを捧げもった。
「わが母なるエクシフィルカスよ、その化身たるガルビトリウムよ。献身こそが救済の道。願わくはわれらに救済を！」
　ガルビトリウムの結晶が激しく明滅し、感極まった表情のエンダルフ枢機卿とともに金の光と化して崩壊する。
　モーリ船長はガラスのように透けはじめた両手をかわるがわる見て絶句した。ギドラとの距離はもう幾ばくもない。しかも接近するにつれ加速している。重力は重力源との距離が近いほど強くなるからだ。第1管制室の人員はモーリを除いてすべて物理的に消え去った。運命は決していた。モーリは手ずから無線機をとった。
「サカキ大尉、聞こえているか、いいか、奴には、ギドラには近づくな。命を吸いとられるぞ」
　ハルオが反駁しかける音声を最後に無線が途絶えた。船体のきしむ音。すさまじい重力で船殻が圧壊している。モーリは地球で戦っていたころを思い出した。まだ人類が地球を捨てて新天地を目指そ

うなどと荒唐無稽な計画を立てる前の、怪獣を駆逐して霊長の座を守ろうと奮闘していた時代、若かりしモーリは、エクシフとビルサルドの技術協力を得て建造された当時最新鋭の潜水艦〈轟天〉に副長として乗り組み、北大西洋を支配していた海龍マンダ殲滅の任におもむいたのだ。艦長ジングウジ1佐の指揮のもと、就役したばかりの〈轟天〉はドーバー海峡の深海でマンダと丁々発止の海中戦を展開した。業を煮やしたマンダがその長い体を〈轟天〉に巻きつけた。鋼鉄の艦体がしめあげられて軋り声をあげた。あのときとおなじ音だ。マンダには勝った。だが人類はゴジラに負けた。

敗北を受け入れ、7億にまで落ち込んでいた総人口から生き延びるに値するとＡＩに判断されたわずかな人間たちを抽出して、アラトラム号という方舟で送り出した。

モーリは幸か不幸かそのわずかな人間に含まれたひとりだった。7億の同朋を見捨てたという自責の念から解放された日はなかった。

いま、人類が自分たち移民船に懸けたすべての犠牲が水泡に帰(き)そうとしている。

モーリの胸に潜水艦乗りとして師と仰いだ武人の顔が浮かんだ。

「ジングウジ1佐！　わたしたちがしてきたことは、間違いだったのですか」

声涙ともに下る告解を吐き出しきる直前に、声帯のある喉にまで量子変換の手が伸びて黄金の砂粒に遷移した。

無人となったアラトラム号が、打ち下ろされるギドラの右翼に最接近。巨大質量の有する超重力が船体強度の限界を突破し、不可視の巨人に握りつぶされるように圧搾される。

２０年にわたって3種族５０００人の家だった全長1．５キロの方舟は、あっという間に人間の握りこぶしほどの大きさに潰され、ただのデブリとなった。

◇

ギドラの翼手目(よくしゅもく)のような翼の先端で、大気が圧縮されて過熱し、1万度の猛火となる。次いで3つの頭部の先端も焔に包まれた。やがて壮大なる全身へ広がる。さながら三つ首龍のかたちを象った焔の

かたまりのようだ。
現象が意味することはひとつ。ギドラが降下をはじめていた。大気による断熱圧縮の高熱は、地球の最後の抵抗のようだった。
燃えるギドラの巨躯は、厚さ１００キロの大気の抵抗をたやすく突き破り、最下層たる対流圏にまで難なく到達した。天をおおいつくし、はるかかなたまで無限に伸び広がっている焔――のしかかるように降ってくる恐るべき超弩級の火炎に、いまにも押しつぶされそうで、マーティンをはじめとしただれもが、反射的にしゃがみこんでしまった。
やがて焔は消えた。空は朦々（もうもう）たる黒煙に塗りつぶされている。昼を偽りの夜に変え、天雷の重低音を響かせながら、身にまとう積乱雲のようなその煙を突き破り、とてつもなく巨大な物体がぬうっと姿を現した。雲のなかからいつ果てるともなく延々と、湾曲した下向きの円錐形が降りてくる。その常軌を逸した大きさに肝を潰されたか、森林にひそんでいた金属の翼竜たちが、必死に羽ばたいて思い思いの方向へ逃げまどう。
天地を震撼させ、ギドラの左翼外縁の爪のひとつが、かつて旧インド北部ニューデリーだった金属質の密林地帯に、杭のごとく打ち込まれる。爪とはいえ、付け根は直径５０キロメートルもある。鋭利な爪が突き立った衝撃は地表が波打つほどの大地震となり、旧インドはもとより旧パキスタン、旧アフガニスタン、旧イランの大地までもが裂け、新たな断層が生じ、地の果てまでも続く撓曲（とうきょく）が現れ、顕著なところでは地層がせり上がって、アラーヴァリー山脈に並ぶ高さと幅の断崖を形成した。残りの爪はアラビア海からインド洋の紺碧を貫く。
右の翼は大気の空気抵抗を極超音速で突き破り、爪が北太平洋、中部太平洋、南太平洋の海に激突。５０００メートル級の水深もやすやす突破して、海底に深く食い込む。
２本の尾のうち１本は南極大陸に垂直に突き刺さった。もっとも厚いところで４０００メートルもある氷床ごと、その下にある陸地を剛直が容赦なく深く掘削。氷床の亀裂は南極全域にまで広がった。砕けて分裂した青い氷が大陸からすべるように海へ落ちる。氷床に

閉じ込められていた南極大陸は、実に３０００万年ぶりに外気を浴びた。もう一方の尾は南極海から地球の地殻を穿孔する。
ギドラが、両の翼と尾で、地球という星そのものに食らいついていた。
宇宙超怪獣の接している海では海水が逆さの瀑布となって吸い上げられる。ギドラの質量に起因する重力により、海が空へ落ちていく。それとおなじように、旧インド領では地盤が剥がされ、地形ごと宙に浮いた。
世界の終末のごとき天変地異に、しかしギドラの３つの頭部は分子ほどの興味も抱かず超然としている。
「逃げる、早く！」
天地創造の再現を垣間見ているような大厄災を呆然と眺めるほかなかったハルオたちのもとに、突如現れたミアナの一喝で、皆はようやく破滅的な光景から視線を剥がすことができた。ミアナの先導で這う這うの体ながらフツア族の部落を目指す。ハルオはユウコを抱いてヴァルチャーに乗り込み、上空から障害物を指示、徒歩組の退却を支援した。
部落は地下の広大な空洞内にあるとはいえ、地球そのものを破壊しかねないギドラがいる以上は気休めにしかならないが、気休めになることはたしかだったので、ハルオらは雪崩れを打つように逃げ込んだ。ときおり立っていられないほどの揺れと遠雷のような深い轟きで、天井から砂がこぼれ落ちてくる。それでも、ただ見ているだけで正気が原子崩壊させられるような宇宙超怪獣の偉容を目にしなくてすむことは、精神的にいくらかでも幸いといえた。
ミアナの姉であるマイナが立ちはだかった。無言だが妹に険しい顔をしている。おそらくは、フツアの本来の言語である精神感応でミアナと会話していると思われた。
「この人たち、仲間。だから助けた。いらない、理由、仲間、助ける」
ミアナが音声言語で姉に宣言した。ハルオたちにも会話の内容が推測できるようにとの配慮だろうか。
また不思議な間があった。マイナの胡乱げな表情は変わらない。

ミアナが胸に手を当て1歩前へ出る。
「そう、仲間。わたしたち、ゴジラと戦わなかった。わたしたち、あきらめてた。でも、違う、この人たち。この人たち、あきらめない。つくること、ゴジラのいない世界」
マイナが顔をしかめた。ハルオたちを睨みつけて背(そびら)を返す。
通された居室の一室で、眠っているように意識のないユウコを筵(むしろ)のような敷物の上に寝かせる。ユウコは腰から下を失っていた。しかし胴の断面は、溶かした半田(はんだ)でコーティングされているかのように白銀に輝き、血の一滴もこぼれていない。ハルオには彼女の生死すら判然としなかった。
「マーティン博士、ユウコの容態はわかりますか」
「ああ、さっきざっと診させてもらったが」
ヘルメットを解除したマーティンが汗で額に張り付いていた前髪をかき上げて、
「心肺は機能している。どうやらナノメタルがタニ曹長の生命維持装置の役割を果たしているようだ」
「ナノメタルが」
「おそらくヴァルチャーのナノメタルが、パイロット保護を優先して同化をしようとしたんじゃないだろうか」
ビルサルドたち10人は望んでメカゴジラシティと一体化し、10体のメカゴジラへと変身を遂げた。メカゴジラI号機に搭乗していたガルグたちも、自身の肉体をナノメタルに明け渡し、あまつさえマーティンら地球人にもそれを推した。指令がなければナノメタルは生きている生物と触れても同化はしない。シティが接近する鋼鉄の翼竜を捕殺していたのは、ゴジラ打倒の命令が翼竜のG細胞に反応したこと、同指令のためにナノメタルが自身を増殖させなければならなかったこと、以上ふたつの条件が、生きている限りは生物を取り込まないというｉｆ構文の抜け穴をたまたま突いたかたちになったためだ。
しかしヴァルチャーには、パイロットが搭乗中に即死しかねない重傷を負った場合、その生存を第一目的として、本人ないし指令の権限

をもつ者の承認なしにナノメタル化を実行するルーティンがあると思われる、というのが博士の推論だった。
「ではユウコは……」
「医学的な意味では生きている。だけど、それ以上のことはわからない。なにせナノメタルはビルサルドの技術の粋をあつめたしろものだからね。メカニズムどころか基本的な扱い方すらぼくら地球人にはブラックボックス同然なんだ。タニ曹長と一体化しているナノメタルとどうコンタクトすればいいのか、まずそこからして手がかりもない」
ハルオはしゃがんで上半身だけしかないユウコの左手を握った。顔だけ見ているぶんにはただ眠っているかのようだ。それは死者によく見られる表情でもあった。激しい後悔の念がハルオの胸にこみあげてきた。ゴジラが追尾熱線を撃つなどだれにも予想はできなかった。しかしそれは免罪符になりうるだろうか。そもそもユウコが志願したからといってヴァルチャーのパイロットに起用しなければ、こんなことには……しかし、その場合はほかのだれかがヴァルチャーに乗っていた。そのだれかがいまのユウコのような状態になっていただろう。結局のところ、指揮官であるハルオがすべての責任を背負わなければならないことに変わりはないのだ。犠牲を強いて作戦を完遂する、その点にだけおいては、自分が船内テロを起こしてまで抗議したアラトラム号中央委員会のタウｅ移民強行と、どこが違うというのだろう？　揚陸艇に老齢の乗員ばかりを積めこんで、タウｅに降下させ、あからさまな口減らしをもくろんだ、あの中央委員会と？
また、ギドラの来襲も、予知能力でもないかぎりは予見しようもなかったが、現状を考えれば、ハルオがゴジラ殲滅を提言したり、さらにはメカゴジラを用いて決戦を挑んだことが、地球滅亡という最悪の結末を招いていることはたしかなのだ。結果論にすぎないが、結果こそがすべてである。
だが、ゴジラを倒そうとしたことが間違いだったとは、自分だけは口にしてはならない。ハルオは喉元まで出かけた悔悟を飲み下した。

いまさらそれを言ってしまえば、これまで散華してきた地球降下部隊の犠牲が真の意味で無駄になる。人類に退路はない。いまここですべきは安易な逃げ道を模索することではなく、地球を守るためにはどうすればいいか、最後の一瞬まで脳漿（のうしょう）を絞りつづけることだ。なんといっても、自分たちは、もう２０年以上も逃げつづけてきたのだ。

ミアナが水を運んできてくれた。ハルオは礼を言って一気にあおった。隣にメトフィエスが腰を下ろす。

「あれがギドラだ」

「あれがギドラか」

ひと心地ついてもなお、思い出しただけでハルオの膝は凍えるように震えた。宇宙にはゴジラ以上の怪獣がいるのだ。

「星を喰うといっていたが、ギドラはいったいなにをしに地球へ？」

マーティンがメトフィエスに訊ねた。

「この星のマナを吸収している」

「マナ？」

「地球を生命あふれる星たらしめているもの。生命の根源。マナなくして星に生命は生まれず、栄えることもない。わがエクシフィルカスも、この地球も、マナあればこそ生命を育む惑星となりえた。ギドラはそれを貪るもの」

「たしかに地球でも、ポリネシアやメラネシアには、マナという超自然的な力が世界の秩序を保っているというような伝承があった、と聞くが、具体的にはどういうエネルギーなんです」

「生命は単なる電気信号の連続ではない」メトフィエスが信徒に説くように滔々と語った。「生命とは星からのマナを宿すもの。肉体とは、なべてマナのまとう鎧。マナは星に存在するありふれた物質を利用して等比級数的に増殖する。ゆえに、いかに生命をかたちづくる物質があろうとも、マナなき星に命もまたありえない」

いまから４６億年前に地球が生まれた。その地球で最初の生命が誕生したのは３８億年前といわれている。舞台は海中だった。太陽とのほどよい距離は液体の状態で水が存在する環境をととのえ、数千

年にわたる豪雨による海の形成をたすけた。水は多種多様な物質が溶け込む性質をもち、ある物質が混じるとほかの物質もさらに溶けやすくなる特性から、海には地球に存在するほぼすべての元素が含まれている。原始の海でアミノ酸、核酸塩基、糖などの有機物が、二酸化炭素や窒素、水などの無機物と、太陽光のエネルギーで合成され、生命が自然発生した。これが現在、有力視されている生命の起源である。

だが、地球人類はもちろんのこと、極めて優れた科学力を有するエクシフもビルサルドも、化学物質から人為的に細胞を創造する試みに成功した例は皆無であった。ビルサルドの精製したナノメタルは生物というよりウイルスにちかい。ナノメタルはエネルギーが供給されていても単独では増殖できない。生物の細胞に侵入してはじめて自己複製を可能とする。生物と非生物の相違点が細胞の有無であるなら、ナノメタルは構造的には細胞をもたないので生物ではない。あくまでも生物の挙動を模倣しているだけの「もどき」である。

すなわち、生命が誕生するには、物質的な材料を揃えただけでは不足している。そこになにかが触媒として働いて生命が完成するのだ。その「なにか」こそが、メトフィエスによればマナだという。

原始の海という非生物のスープにマナが宿ったことで生命が誕生した。生命は海中の有機物で栄養を補い、やがて無限の資源である太陽光を利用するべく光合成をはじめた。そのシアノバクテリアをまるごと取り込んで栄養にする細菌も現れた。そうして地球にあるエネルギーは生物に利用されるようになった。

マナは特定の化学物質の集合体に寄生しているともいえる。生物が周囲の物質を集めればマナの寄生する宿主が増えることになる。これが生物の増殖・繁殖のはじまりなのだ。

マーティンが少し考えて、

「つまり、われわれ人類もふくめたあらゆる生命体は、マナが地球で増えるための乗り物として利用されていたと？」

「生命が死を迎えたとき、マナは星へと還り、新たな生命が誕生するときに祝福として星から贈られる。そうしてマナは増えていく。ギド

ラは星がそのエネルギーで充溢（じゅういつ）した頃合いを見計らい、降臨する」
「そのマナというのは、いつ、どうやって生まれるのだろう。生命体の増殖にともなって増えるとはいえ、マナがなければ生命が誕生しないというなら、その星には、最初のマナ、種芋みたいなものがあったはず。どういう星に最初のマナが？」
　聞いていたハルオの脳内に、思考の光が閃く。
「ギドラか……！」
　マーティンたちの顔には疑問の色。メトフィエスだけが頷く。
「そのとおり。ギドラは生命が繁栄する物質的な条件を揃えた星にマナを与え、機が熟すのを待って収穫に訪れる。原始の地球は種、生命体は花、そして命で飽和したいまの地球こそは果実」
「それが本当なら、ギドラこそが地球の全生命の創造主ということになる。まさしく神か」
　マーティンが顎を撫でて唸った。
「ゲマトリア演算回路、起動成功しました」
　メトフィエスと協力して調整した端末から得られたマナの観測結果をジョシュが分析する。
「まさに、極度に発達した科学は魔法と区別がつかない、ですね」
　生存者のひとり、ベンジャミンが感心した。アーサー・C・クラークの第3法則である。原始人が宇宙船を目撃したなら神の舟としか認識できないだろう。いまだマナを観測することのできない人類にはその存在を非科学的なものとして本心からは信じられない。だが、エクシフ、ビルサルド両文明と接触するまで、人類は宇宙全体の質量の４％に過ぎないバリオン（陽子、中性子など、いわゆる〝ふつうの物質〟）しか観測できておらず、７４％を占めるダークエネルギーも、残りの２２％であるダークマターも、検知することすらできなかった。人類はいまだ宇宙の1割も理解できているとは言いがたい。宇宙を数学に還元するゲマトリア演算は、人類には想像もできないエネルギー、マナの観測と定量をも可能にした。
「現状が維持された場合、マナは２４時間後に枯渇すると予測されます」

「あと1日でわれらが地球は生命の育たない星になるわけか」
　マーティンは嘆息した。
「地球に満ちるマナのみならず、最後にはいま生きている生物さえもマナに分解され、ギドラに食いつくされてしまうだろう。むろん、われわれも含めて」
　メトフィエスが付け足した。ギドラが地球の生物に容赦する理由などないのだ。
「そうでなくとも、ギドラの重力で巻き上げられた海水が、1時間あたり８００万立方キロメートルのペースで大気圏外へ逃げています。生物の生存できる環境という意味なら、もっと早いかと……」
　ジョシュにマーティンは呆れたように肩をすくめてみせる。
「ギドラにはゴジラでさえ手も足も出なかった。体そのものが強大な重力をもち、しかも引力を自在に操って対象の分子構造そのものを破壊する光線を吐き、なにより大きすぎて対抗しようがない。こちらに残された武器は、サカキ大尉の乗ってきたヴァルチャーが1機。それだけであしたまでにどうにかしなきゃ、地球もタウｅの二の舞になる、と」
「万事休す、ですね……」
　ジョシュも絶望を通り越して苦笑いした。
「たとえギドラが創造主だったとしても、食われるためだけに命を与えられたのだとしても、地球はその運命に抗おうとした。だからゴジラを創ったんだ」
　ハルオの言葉に一同がはっとなる。メトフィエスが微笑して目を閉じ、耳を傾ける。
「おれたちがギドラを倒すんだ。そして地球にこう言ってやる。〝おまえは、おまえが追い出したものたちによって守られたんだぞ〟と。そのときはじめて、おれたちは大手を振って地球で生きる資格を得る」
　ひどく通俗的な弁ではあったが、そのぶん素直に皆の心に届いた。
「地球に向かって、ざまあみろ、か。相変わらずサカキ大尉はおもしろいことを言う」

「しかし、実際問題、あんなでかぶつをどうやって？」
　不敵に笑うマーティンにベンジャミンが切実な問いを投げかけた。
「そもそも、ギドラは死ぬんですか？　何十億年もかけて生命をあやつるような怪物ですよ。死をも克服している可能性だって」
　だれもが考え込んだ。
「牙があった」
　マーティンが唐突に思い出して言った。意図を図りかねてハルオが先を促す。
「ギドラにとって、翼のソーラーパネルで吸収する恒星の光エネルギーが人間でいうブドウ糖、星のマナがタンパク質だとすると、ギドラは食物を経口摂取する必要がない。つまり歯は不要なはずなんだ」
　たしかにギドラがゴジラに向けて引力光線を発射するさい、開かれた口腔には鋭い牙が生え揃っていたような覚えがある。
「歯はその動物の外見よりも生態の本質を表している。歯の形状をみれば食性が類推できるし、傷や磨耗具合には個体の歴史まで刻まれている。ギドラの歯は牙だ。これは肉食動物の特徴だが、さっきも言ったとおりギドラは口での捕食をしない。ギドラにはわれわれでいう足に相当する器官がなかっただろう？　宇宙空間を気の遠くなるほど永く遊泳する生物であるためにギドラには足がないんだ。生物は使わない機能をオミットしていくからね。厳密に言えば、生態がおなじであれば、使いもしない足を維持している個体より、突然変異で足のなくなった個体のほうがそれだけエネルギー効率で優れることになる、それで前者が淘汰されて、足がないギドラが生き残るという図式だがね」
　ガルグに言われていたことをハルオは思い出していた。現状にそぐわない不要なものを切り捨てていく、いま持っているものを捨てる、それが進化だと。退化もまた進化の一側面なのだ。
「では牙はどうか？　これは完全な私見だが、ギドラも元は地球の動物と同様に、どこかの星でひとつの動物として生まれ、食う食われるの関係にあった、だから捕食のために顎と牙を発達させていた。それが、何万年か何億年かわからないが、果てしない進化のすえに宇宙へ

進出して、経口摂取ではなく、星からエネルギーを吸いとる代謝構造へ変化した」
　かつて、地球で怪獣が出現する前、火山活動で海洋に突然出現したハワイという島に、肉食性のシャクトリムシが生息していたという。ふつうシャクトリムシは葉をかじる草食である。ハワイはその出自ゆえ最初は生物相がまるごと空白だった。渡り鳥の糞に種子や卵が混じるかたちで、あるいは流木に乗って流れ着くことで、植物や動物が徐々に定着し、生態系の椅子ともいえる役割（ニッチ）は埋まっていった。だが虫食性の小型昆虫という椅子はいつまでも空席のままだった。競合する相手がいないということである。そこであろうことか、ハワイにたどり着いた当初は草食だったシャクトリムシが肉食に転じたのだ。これはウマやヒツジがいきなりライオンのような肉食獣に進化するのにひとしい。生物は、ときとして食性さえも正反対に変えるのだ。
「おそらく、宇宙にはギドラと同格の競争相手、敵がいるのではないか。ギドラには引力光線という強力な武器があるが、ときには肉弾戦に迫られる局面もあるのではないか。そのためにもともと持っていた顎、そして牙という物理的な攻撃手段を残す必要があったのではないか」
　ハルオはギドラ級の大怪獣どうしが宇宙で激突するさまを思い浮かべた。
「あまり想像したくはないですが……」
「まあ、いまはその敵の怪獣についてはさておいて、重要なのは、ギドラにも、牙を使ってでも戦って身を守らなければならないときがあるということだ」
　ハルオにも核心が掴めてきた。
「不死身なら、食う以外の目的で牙をもつ理由がない……」
「そういうことだ。必要のない戦いを能動的に仕掛ける動物は極端に少ない。リソースの無駄だから早々に淘汰される。動物が戦うときは、捕食か、自衛か、ふたつにひとつなんだ。純粋な攻撃目的だけで牙を持っているということは、すなわちギドラもわれわれとおなじ、

ひとつしか命を持っていない、れっきとした生物であると結論づけられる」
「生きているなら、いつかは死ぬ。つまり殺すこともできるということか」
たちこめる暗雲からひとすじの光芒が差した思いだった。
「どうせ黙っていても滅ぼされる。なら先を信じて前へ進むしかない。ギドラはお伽噺の神さまなんかじゃない。おれたちとなんら変わらない1匹の生物にすぎない。ましてや、おれたちが家畜のようにしたがう筋合いなどない」
ハルオに生存者らは、おお、といっせいに応じた。足音が近づいた。皆が振り向くと、アダム少尉が入ってきていた。紅顔の青年は憔悴しきっていた。だが目に光が戻りつつあった。
「さっきは、お見苦しいところを……」
アダムが所在なさそうに詫びた。
「いや。おれもおまえのようになりかけた」
ハルオにアダムは苦笑した。
「なりかけたと、なったとでは、全然違うんですよ」
アダムはあらためて背筋を伸ばした。
「自分も戦います。なんなりと使ってください。もうおれたちしかいないんですから」
一同は同調して頷いた。地球に降り立ったとき、降下部隊は６００名いた。ゴジラ・フィリウス、オリジナル・ゴジラ（ゴジラ・アース）との連戦で１３名しか生き残れなかった。アラトラム号も宇宙の藻屑となった。今や、２１世紀の記憶を継ぐ人類はこの１３名だけなのだ。
ギドラを倒す。その大方針は決まったが、手段がない。場は重苦しい沈黙が降り積もった。
そのとき、ごくごく小さなうめき声にハルオが気づいた。
「ユウコ？　ユウコ！」
ハルオが駆け寄って呼びかける。マーティンたちもなにごとかとユウコを覗きこむ。
仰臥（ぎょうが）させられていたユウコの繊細なまつ毛が震え、東の地平線から

朝陽が昇るように――そんな情景は記録映像でしか目にしたことはないが――まぶたが、ゆっくりと開かれていく。
　まぶしそうに眉間をしかめ、明確にハルオの顔が網膜に映ったのは、何度かまばたきをしたあとだった。
「先輩……」ユウコが安心したように表情をやわらげる。「よかった。わたし、先輩を守れたんですね……」
　ハルオは、幼なじみの健気さに「ああ、おまえに救われた」と言ったきり、あとに言葉が続かず、ただ嗚咽を漏らすほかなかった。ベンジャミンらも目尻を拭った。
「ゴジラは、どうなったんですか」
　ユウコにマーティンが話して聞かせた。ギドラという、月より大きな怪獣が襲来したこと。ゴジラでさえギドラには一瞬で敗北したこと。アラトラム号もギドラに撃沈されてしまったこと。アラトラムとの最後の通信から、どうやらギドラは一定範囲内にいる生物の命を自動的に吸収する能力があるらしいこと。そしていまは、地球で生物が生きていくために不可欠なエネルギーであるマナを、ギドラが吸収していること。あと２４時間でギドラにマナが喰いつくされてしまうこと。戦おうにもまるで戦力が足りないこと。
　聞き終えたユウコが、覚悟を定めた顔となる。
「メカゴジラがあります」
　皆は顔を見合わせた。
「メカゴジラを構成しているナノメタルは、生物ではありません。また、１０００Ｇの高重力でも変形しない結晶格子構造に組成を変えられますから、ギドラに接近しても機能停止はまぬかれると思います」
「だが、メカゴジラはもう」
　マーティンは言葉を濁した。ゴジラにより１１体のメカゴジラはすべて破壊され、蒸発させられた。もはやビルサルド種そのものが全滅している。たとえビルサルドの母語で組まれたソースコードを読み解いて、ヴァルチャーのナノメタルに増殖を命じることができたとしても、じゅうぶんな量を確保するより先にギドラがマナを枯渇させてしまうだろう。

「いいえ、あります」
　ユウコは断言した。
「地下に隠れていた、６００万トンの余剰ナノメタル。それが今もシティの跡地にそのまま残されています」
　ハルオは、はっとした。シティをメカゴジラに変身させてゴジラと戦っていたときのガルグの言葉を思い出す――〝１１体のメカゴジラを建造してもなお、シティ跡地、いや、メカゴジラ開発工場跡地の地下には６００万トンの余剰ナノメタルがある〟。先の戦闘では、攻撃を受けて部位欠損したメカゴジラにナノメタルを補充することで、瞬時に修復させる役割を負っていた。地下を粘菌のように移動してメカゴジラたちを支援していたため、ゴジラの熱線を受けずにすんだというのである。
「しかし、どうしてそんなことがわかる？」
　マーティンが戸惑いを隠せず質した。
「感じるんです。どう言えばいいのかわからないけれど、わたしのなかのナノメタルが共鳴している、というより、かすかな信号を受信していると言ったほうがいいのかもしれませんが」
　ユウコがまっすぐにハルオを見つめる。
「余剰ナノメタルはスリープモードで待機しています。ですが、わたしが自分のナノメタルを介して、じかにアクセスできれば、コントロールできるはずです」
　ハルオは言葉を詰まらせた。ユウコがなにを考えているのか理解しはじめていた。
「それをやれば、ユウコ、おまえは」
「ガルグ中佐やほかのビルサルドたちみたいに、わたしの肉体はナノメタルと融合して、消えてなくなるでしょう」
　ユウコは率直に明かした。
「でも、いまも似たようなものです。わたしは本当は死んでるんです。ただナノメタルに生かされているだけ……もう、自分の足で立つこともできない」
　下半身を失っているユウコは仰向けのままかすかな吐息をした。

「わたし、もともとこの体が嫌いでした。小さくて、どんなに鍛えても、ビルサルドはもちろん、おなじ地球人の男の人にも敵わない。だから強くなろうとして、パワードスーツの操縦をだれにも負けないくらい練習して……でも、それだって機体から降りてしまえば、元どおり。そこにはちっぽけで弱いわたしがいるだけ」

はじめて聞くユウコの本心だった。ギドラの超重力に地盤が悲鳴をあげて地下空洞ごと部落を揺らしても、だれひとり気にしない。

「人間は医療の技術を発達させて、それまではどうにもならなかった病気や障害を克服してきました。薬に、手術に、義肢。どれも自然界にはないものです。なぜ、医療行為はよくて、体をナノメタルにすることはいけないのでしょう」

ハルオには答えられない。人間と自然を互いに相反し対立するものとする二元論では、たとえばある生物が絶滅したとして、その原因が大規模な災害か環境の変化によるものであれば、一般的には自然の摂理として片付けられる。しかし、乱獲や環境汚染など人為的なものが原因であれば、一般論はその罪科を人間という単一種に請求する。ここには、人間も自然の一部であり、人間のあらゆる行ないは、ほかの生物のそれと同様に、自然の摂理に内包されたものである、という論理はない。世界は自然と人間に二分されている、それが歴史的に見ても地球人類にひろく浸透している哲学である。これは異星人たるビルサルド種も変わらなかった。苛烈な環境の星で生まれたビルサルドにとって、自然とは純然たる敵であり、絶滅を受け入れるか、屈服させるか、選択肢はつねにそのふたつだった。ビルサルドは自然に勝つためにナノメタルをつくりだし、母星をまるごと機械化させる道をえらんだ。結局ビルサルディアはブラックホールにより崩壊したが、それとてもビルサルドからすれば、宇宙という、より大きな自然に敗北したということであり、敵の解釈がさらに拡大したにすぎなかった。

ビルサルドは生命史を顧みるに、適切な変化を遂げることができたものだけが生き延びられるとの結論に到達した。

もし嫌気性バクテリアに知性があったなら、好気性バクテリアは、

猛毒の酸素を呼吸する異形の怪物として映るだろう。
ハワイの肉食性シャクトリムシが発見されたとき、本来は草食のはずのシャクトリムシが、鉤爪でハエを捕らえてむさぼり食うその異様な生態に、世界中の昆虫学者が戦慄したという。
バージェス動物群の時代からすれば、陸上に棲み、発達した脊椎をもち、エラではなく肺で呼吸し、体温を自らつくり、二足歩行し、極めて広範な食物を利用できて、体内で子供を育てるヒトという動物は、まったくの異世界からきたエイリアンであるにちがいない。これらの特徴は少なくともカンブリア紀の動物にはどれひとつとして存在しなかったのである。
ようするに、進化した生物は、それ以前の生物にとっては、例外なく理解しがたい姿かたちをした怪獣にほかならないのだ。時代と環境の移り変わりに対応するためなら生物は自らのありようをも捨てる。正確には、多様性から生じた無数の形質による総当たりで、偶然にも環境に適応し生き残った個体群が優位的に次代へ命のバトンを渡すことができるということだ。ちょうど、太古の魚類のなかで鰾（うきぶくろ）を経由して空気から酸素を取り入れることができるようになったものが両生類となり、あるいは、宇宙を飛翔するギドラが足を失くしたように。
「進化は」ハルオは得心できなかった。「世代を重ねていく過程で、自然に起きるものだ。人の手でなすべきものじゃないはずだ」
「哺乳類も、最初から妊娠という方法で繁殖してたんじゃないんですよ」
ユウコはハルオと繋いでいるのとは反対の手で自分の下腹部をなでた。
「レトロウィルスの話か」
ユウコがわずかに頷いた。
哺乳類も1億２０００万年前までは卵生または卵を体内で孵化させる卵胎生で繁殖していた。哺乳類には、自分に侵入してきたウィルスに有用そうな性質があると、それを自分の遺伝子にコピーする能力がある。白亜紀前期ごろ、寒冷化のため卵を体外に産み落とすのでは

なく、体内保育する卵胎生に移行しつつあった原始哺乳類は、ある内在性レトロウィルスに感染した。そのウィルスは、増殖のために宿主の細胞と自身のエンベロープ（ウィルスのもつＤＮＡまたはＲＮＡを手紙とすれば、エンベロープはそれを入れた封筒のようなもの）とをいったん融合させて、細胞内にＲＮＡを送り込んでＤＮＡにする。細胞の分裂能力を利用してウィルスはＤＮＡを増殖させていく。

他者と他者を結合させるこのエンベロープ遺伝子を原始哺乳類はコピーした。卵ではなく、胎児と母体をエンベロープ遺伝子によって結合させ、母子間での栄養交換やガス交換をおこなう連絡が可能となったのだ。これが胎盤と妊娠のはじまりである。

また哺乳類は、すでに有しているウィルス由来の能力の上位互換の遺伝子をもつウィルスに感染すると、後者を積極的に採用する性質がある。このことは、ヒトもまたこのさき、新たなウィルスからなにかしらの能力をコピーして、胎盤を用いた妊娠よりも優れた繁殖方法に変化する可能性があることも意味する。例として、フツアは人類が昆虫に関係するウィルスに感染してその因子を取り込んだ種族と考えられる。

「哺乳類はレトロウィルスを利用して、新しい繁殖方法を獲得しました。なら、人間がナノマシンというテクノロジーを利用して自分を変化させることもまた、正当な進化のうちではないですか？」

「ナノマシンは、ナノメタルは、人工物だ」

「人がゼロから創造したものなんて、ありません。真の意味での人工物なんて、この世にはないんですよ、たとえば、その端末は……」

ユウコはジョシュの操作しているコンピュータを指し示した。

「それは人工物なのか、それとも自然物でしょうか。多くの人間が人工物と答えると思います。でも、外装のプラスチックは石油由来ですし、石油は地球から採取されたものです。液晶も、希少金属も、シリコンも、ＨＤＤのアルミも、筐体を構成するあらゆる原料は地球産ですから、端末は自然物ということになります。ナノメタルもまたおなじです」

ハルオは反論できなかった。

「ですから、わたしがナノメタルと同化することは、わたしたちの遠い祖先がレトロウイルスで自分を変えようとしたことと、本質的にはなんら変わりないんです、どちらも地球から生まれたことに変わりはないんですから」
　ユウコは小さな声ながらはっきりと言い切った。だが、その黒い瞳がわずかに揺らぐ。
「でも、本音を言うと、ちょっと怖いんです。自分が自分でなくなる、それがどんなものか想像もできない。わたしが逆にナノメタルに取り込まれて、意識も自我も、きれいさっぱり、消えてしまうかもしれない。そうなれば、わたしはどこにもいなくなってしまう。それは怖い」
　ユウコはハルオを見据える。
「だから、ハルオ先輩。わたしに命令してください。わたしに、ナノメタルと融合して、メカゴジラを起動しろと。人類のためとか、地球のためとかじゃなく、ハルオ先輩が生きていくために、わたしに怪獣になれと」
「おれのために？」
「わたしにはこの星の思い出がありません。だから地球のためなんかに命は懸けられない。わたしが勇気を出すには、ずっとずっと好きだった、あなた個人の願いが必要なんです。わたしのわがまま……聞いてくれますか？」
　かたわらで見守るマーティンは絶句していた。ユウコは、ハルオの心の傷になろうとしている。大義名分に逃げることを許さず、自分が生き残るためだけにユウコを犠牲にしたのだと、ハルオに自責の念を背負わせようとしている。もし奇跡的にこの戦いに勝利を収めることができたなら、ハルオは生涯、ユウコを忘れることができないだろう。そうすることで、ハルオのなかで永遠に生きつづける気なのだ。
　自己犠牲によって深い傷を刻むことで愛する者の心に残ろうとする。恐ろしいまでの執念、女としての情念だった。
「わかった」
　ハルオもユウコの本心を察していた。自分が生きつづけるかぎり、

ユウコもまた生きつづける。それは罰でも償いでもない。ならばよろこんで受け入れよう。
「ユウコ。おれのために、メカゴジラになって、ギドラと戦ってくれ」
断固たる口調で言い渡したハルオに、ユウコがにっこりと微笑む。
「わかりました。あなたのために、死にます」
ユウコを横抱きにしたハルオが部落の出入り口に向かう。アダムやベンジャミンらが気圧されつつも敬礼して見送る。ハルオはユウコとともにヴァルチャーに乗り込み、一路、メカゴジラシティ跡地へと飛んだ。
「うまくいくでしょうか」
ヴァルチャーを見送りながらアダムがだれにともなくごちた。それはユウコがナノメタルを統率できるかどうかという懸念でもあり、ギドラを倒すというそもそもの大目標に対する不安かもしれなかった。
「クラークの第1法則だよ。〝可能であると言った場合、彼の主張は正しい。不可能と言った場合、彼の主張は間違っている〟。そう信じるしかない」
マーティンは肩をすくめて返した。
「ほかのフツアの人たちがどこにも見えないようだけど」
地下部落に戻ったマーティンが思い出したように辺りを見渡した。目の届く範囲にフツアはミアナしかいない。
「みんな、フツアの神のところ」
思念波で会話をするように、超常的な感覚をもつフツア族は、数値としてマナを観測することはできないまでも、地球の命運が旦夕（たんせき）に迫っていることを、直感的に理解しているようだった。
「みんな、滅ぶときはフツアの神のそばがいい、って言ってる」
「そりゃ神頼みもしたくなるさ」
マーティンはエクシフの大司教でもあるメトフィエスに水を向けた。
「古来、宗教とは法の支配が行き届かぬ時代、または法治の概念そのものがなかった時代に、権力者が民らに規律を遵守させ、もって共同体

として統率し、治安を維持するために考案した原始的な法律であり、個人にあっては日常生活を円滑に営み、精神的な豊かさを得て、ときに苦境を乗り越えるよりどころとして、自然発生したにすぎません」

メトフィエスはいつものつかみどころのない笑みで答えた。

「雷や日蝕といった脅威的なものから、季節の移ろい、豪雨に干魃などの天災までふくめた自然現象の原因に神話という理由を付与することで、仕分けをし、精神的な制御下に置き、安堵と納得を得ようとした。その〝原因〟とは実数として観測可能な存在であってはならなかった。見ることも触れることもできぬ、人智を超えた存在でなければならなかった。虚偽であることが露見しないよう、存在そのものを悪魔の証明にする必要があった。それこそが神。われらエクシフの神はわれらが創造し、地球人の神は、やはりあなたがた地球人によって創造された。やがて、豊穣と安寧を求める共同体は、神の怒りを買うとされる行為を設定し、それを忌避することをよしとするようになった。人々は見えもしない神の顔色をうかがうようになった。そんな彼らを統治するには神の概念を流用したほうが都合がよい。ゆえに古代の王はいずれも神の子孫を自称した。その系譜には、文字をもたないゆえに正確な記録を残せなかった未開の蛮族までもが加わった。ときに神として、ときに悪魔や怪物として。宗教は文字なき時代の歴史を後世に伝える手段でもあったのです」

宗教家らしからぬ持論にマーティンはむしろ面食らった。

「雲の上から天祐を与えてくれる都合のいい存在としての神はいないと?」

「物理的に庇護する超越的な存在があったなら、わが星エクシフィルカスは滅亡しなかったでしょう。考えられる仮説は4つ。まず、神はいない」

人差し指を立てる。

「つぎに、神はいるが、エクシフを守る神はギドラを守る神でもあるために、座して静観するほかなかった」

指を2本立てる。

「もしくは、神は滅びゆく星を眺めて娯楽とする嗜虐的な趣味を持っ

ているか」
　エクシフの神官は3本の指を伸ばす。
「最後の可能性は、神はわれわれの運命に興味をもっていないか」
　４本の指が伸ばされ、閉じられる。
「この４つの可能性に共通していることは、神に対して物質的な利益を求めても願いが成就することは事実上、ないということです。神は物質面ではなく精神面での幸福のためにあるからです。真なる神は、信じるものの心に存在するのです」
　よって、地球における宗教は、神が被創造物たる人間を苦難から実際に救済するという欺瞞への追求を避けることに腐心することとなる。現世は試練の場であり、善行を積んだ人間だけが死後に救済されるという教義はその典型である。実際、それをすべての構成員が盲信すれば、その共同体はなんら問題なく健全に運営されていく。
「われらエクシフも、人格を有した存在としての神の実在を信じているわけではありません。われらの神は科学における物理法則のようなもの」
「科学も宗教も、元は自然現象の仕組みを解明し、社会の発展のために有効利用しようとする試みであるという点では共通しているからね。科学と宗教は水と油のように対立するものとして考えられがちだが、アプローチの方法が違うだけで出発点はおなじだ。科学は物理法則を唯一神とする宗教であるともいえるわけか」
　マーティンにメトフィエスが首肯する。
「知性ある生物に利他的な行動を強要するとかならず破綻します。しかし利己的なふるまいばかりでは共同体は崩壊する。そこで宗教により、本人にとっては利己的な行動が結果的に利他的な行動になっているように誘導したのです。われわれエクシフは献身をこそ貴び(たっと)ます。それは、献身でのみ魂は救済されるという建前が存在するからです。本人は自らの救済のために献身する。それが全体の利益になる。エクシフの神は、心弱きわれらが献身の道を進む口実のためにあるのです。しかし――」
　メトフィエスはミアナを見やった。長身のメトフィエスと小柄な

ミアナの視線が身長差の斜めで結ばれる。
「彼女たちには、彼女たちを実際に守護してくれる神がいるらしい」
「ハルオは」ミアナがメトフィエスに言う。「まだ、あきらめてないの？」
「ハルオは決してあきらめない」
メトフィエスの返答は確信に満ちている。
「ゴジラを倒すなどもはや不可能であると、だれもが思考を停止させていた。だが、遠い星の海にあって、ハルオだけが、ゴジラを克服する使命の炎を燃やしつづけた。それは地球の住人としての資格を取り戻すため。ならば、たとえ相手がギドラでも、ハルオは最後まであらがうだろう」
ミアナは胸を打たれた顔をして、つぎに銀の眉をそびやかし、皆に言った。
「来て」
◇
天翔（あまかけ）る人工の天使は、その秀逸な飛行性能ですぐさま富士の麓へハルオとユウコを運んだ。上空からだと引力光線がもたらした壮絶な破壊の惨状を再認識させられた。地球を卵とするなら、石にぶつけて殻を割られたようなありさまだ。
「ナノメタルは無事だろうか、いくら地下に隠れていたとはいえ……」
つい、そんな不安がハルオの口をついた。
「感じます。ここで降ろしてください」
ユウコに請われてハルオはヴァルチャーを着陸させた。
時刻は日暮れどきだった。地平線ちかくまで傾いた夕陽の赤光が、空をおおうギドラの左翼の付け根と胴体のあいだから射し込んで、荒れ果てた大地を血の色に染め、またハルオの目を射ぬいた。ハルオは手を翳（かざ）して西日をさえぎりながら、はじめて見る地球の夕暮れだ、と思った。ユウコより5歳上のハルオにも、地球での思い出はほとんどない。強いて挙げるなら、人工知能による選別でアラトラム号への搭乗が決まって、家族3人で軍の施設に身を寄せていたころ、父と母に連れられて、近くの小さな山に登ったことくらいだ。陽射しの暖かな

日だった。目にも鮮やかな草花が迎えてくれた。あのときの甘い風の薫りをおぼろげながら覚えている。
地球はゴジラを頂点とする異界へと変わり果ててしまった。だが地球に生命があふれていること自体には変わりがなかった。
いま、それさえも根こそぎ奪われ、真に滅びの秋(とき)を迎えようとしている。
惑星なみの超巨大な怪獣が黄金の天幕となっているさまは、出来の悪い悪夢にしか思えなかったが、直接の妨害を受ける気配はない。たかが人間などギドラには微生物にひとしいからだろう。ハルオは一瞥をくれてから、ユウコを抱き上げてヴァルチャーから降りた。引力光線で穿たれた直径２０キロの大穴は、急速に忍び寄る夕闇を湛えて、奈落のように底が視認できない。その淵に立つ。
ユウコが瞑目する。ユウコの内臓機能を維持しているナノメタルが、地下で活動休止しているはずの同胞に呼びかける。
じれったいほどの沈黙が過ぎ去った。
「ハルオ先輩。ここでお別れです」
腕のなかで口火を切ったユウコの意図が、一瞬わかりかねた。
「ナノメタルがわたしを待ってる。どんな姿になっても、どうか嫌いにならないでくださいね」
まるで死にに行くような口振りだ、と思った瞬間、ハルオの首の後ろに腕を回していたユウコが、顔を引き寄せた。突然のことで反応できなかった。理解が追いついたのは、ユウコが紅潮した顔を離したあとだった。唇が熱かった。ユウコがはにかむように微笑した。
「えへへ。先輩のそんな顔、はじめて見ました」
思考が麻痺したハルオの胸を、おもいきり突き飛ばす。上半身しかないユウコが大穴の闇へ躍り出る。
「さようなら」
果てしない暗黒のなかへユウコが呑み込まれていく。ハルオが伸ばした手は虚空を掴むばかりだった。
ユウコの姿が見えなくなってしばらくすると、ハルオが膝をついている地面がかすかに震動しはじめた。微震は当初、よほど神経を集中

させていないと見逃してしまう程度のものでしかなかった。しかし、徐々に徐々に、それははっきりとした有感地震へと変化しだした。
大穴の淵が、しだいに崩れはじめる。ハルオは思わずあとずさった。地震はさらに強さを増し、重低音で周囲一帯をつつみこんだ。
だしぬけに、クレーターから、巨大な、巨大な白銀の腕が伸びあがり、倒れかかってきて、ハルオのすぐそばの地に五爪を食いこませて固定する。ハルオなど簡単に握りつぶせそうな手だった。
さらにもう1本の腕が奈落から現れ、拳をつくってたたきつけ、連結している本体を地の底より牽引する。
せりあがってきたのは、鋼の平板を積み重ねて構成されているような無骨な造形。昆虫の複眼にも似た目が左右1対あり、砲身もかねる口吻は、節足動物のように横方向に動く。
それは顔だった。金属の顔につづき、鏡のように反射する固形ナノメタルで形づくられた頸部、肩、胸がつづく。間近で見ているため恐ろしくでかい。夕陽を背負った機械怪獣の長い影にハルオが呑まれる。
人類最後の希望（メカゴジラ）が、もういちど立ち上がる。
大地にそびえ立ったその体高は292．5メートル、総質量600万トンと、さきの戦闘に投入されたメカゴジラたちに比べれば見劣りするが、それでも20年前のプロジェクト・メカゴジラにおいて建造されていたものをはるかに上回る機体規模だ。
「ユウコ！　ユウコなのか！」
ハルオが声を張り上げると、白銀の大怪獣は巨躯を屈曲させ、天空の高みから足元の小さな生き物に機械の顔を近づけてきた。大質量ゆえの圧力はあったが、不思議にも恐怖はなかった。前方へ伸びた吻の先端が地面に触れる寸前まで顔を下げて停止する。
ハルオは金属の大顎の一方に手をあてがった。気密服の手袋ごしにもぬくもりが感じ取れた。
「そこにいるんだな、ユウコ」
メカゴジラは無言だったが、もはや確認の要もなかった。
「行こう、ユウコ。おれとともに戦ってくれ」

メカゴジラが上体を伸ばす。全身の関節部が駆動する轟音は返答のようだった。

と、機械怪獣の両腕が変形。指のある手ではなく、腕全体が螺旋を巻いて、先端はするどく尖る。

斧状の背びれは丸鋸のような半円へと変わった。

プラズマジェット・ブースターが増設され、各部に何基もの排気口が新たに加わる。

それはメカゴジラとは似て非なる外形だった。かつてムルエル・ガルグをはじめとしたビルサルドたち開発陣は、ゴジラ駆逐のためにいくつもの戦術を考案した。過去の交戦記録をあらゆる角度から分析し、絞りに絞った結果、相反するふたつの戦術案が残った。

ゴジラを自然がデザインした究極の戦闘生物として、その似姿をとり、正面から大火力と粒子状ナノメタル散布層の防壁で立ち向かうもの。ガルグたちがゴジラ・アースと干戈（かんか）を交えたさいの形態がこれである。

いまひとつは、ゴジラの熱線が正面方向を完全にカバーしている反面、背後水平方向43度、垂直方向81度の範囲が安全圏であると判明したことから、高速高機動性能を重視し、徹底して背後をつきながら戦うというもの。

ナノマシンの集合体であるためにどんな形状にもなれるナノメタルの特性を活かし、メカゴジラは必要に応じてどちらの姿にも変形できるようプログラムされていた。

いまハルオの前に堂々とそびえるのは、ゴジラの模倣への拘泥（こうでい）を捨てた、もうひとつのメカゴジラ。モード名を地球の言語で表すなら、Mobile（対）Operation（作）Godzilla（戦）Expert（用）Robot（飛）（行）（型）（機）（動）

通称、MOGERA（モゲラ）モード。

ヴァルチャーに乗り込んだハルオが翼を広げて空へ上がる。モゲラも全ブースター・ユニットに点火、600万トンの巨大質量を感じさせない上昇力を見せつけ、ハルオに追随する。

ともにナノメタルから生まれた天使と怪獣が、地球の傘となっている宇宙超怪獣ギドラへ向かう。

◇

マーティンらがミアナに連れられた場所は、地下空洞の最奥部だった。えてして人類は自分たちにとって精神的主柱となる重要な施設ほど、拠点の奥のほうへ建造する傾向にある。フツアも例外ではないようだった。岩壁をくりぬいた――あるいは逆に、そこにあるものを中心に磐座（いわくら）を組み上げたか――入り口には、さかんに篝火（かがりび）が焚かれ、地下とは思えないまぶしさが満ちていた。入り口は狭い。人ひとりがようやく抜けられるくらいだ。おそらく大勢の敵の襲撃をうけてもいちどに侵入されないようにするためだろう。戦うにしてもここに籠（こも）れば各個撃破のかたちになるから楽に対処できる。士気の面でも籠城して徹底抗戦するなら信仰対象の膝元ほど効果的な場所はない。フツアにとっていかに神聖な場か、それで知れる。

「ここが、フツアの神さまを祀っている祭壇というわけか」

マーティンが興味津々に呟いた。

ミアナがその細い肢体を入り口へ滑り込ませていく。

「鬼が出るか、蛇が出るか」

意を決して、マーティンやアダム、ジョシュらも横歩きになって祭壇場に足を踏み入れる。

内部は狭い出入り口からは想像もできないほど広大だった。アラトラム号の乗員５０００人が存命だったなら、そのままここに移住しても問題はないだろうと思われるほどだ。高さもあるので圧迫感はない。

その広大な空洞には、フツア族の褐色の背が集まり、結跏趺座（けっかふざ）の形（ぎょう）で一心に祈念している。

人類の末裔たちの浅黒い海のむこうに、純白の巨塊があった。おおまかに横に長い楕円をしている。長径２００メートルほどもあろうか。質感は凝灰岩にも似て滑らかだが、これほどの大きさで一枚岩とは信じられない。フツアはそれにかしずいているのだった。

「岩、でしょうか。変わったかたちをしていますが」

「彼らが何年もかけて磨いて成形したのでは」

アダムとベンジャミンが口々にささやいた。

「奇岩や巨岩を御神体と崇める民族は少なくない。しかし、これは……」マーティンの両眉が跳ね上がる。「まさか、フツアの人たちがたびたび言っていた〝卵〟か？」

地球人たちがおどろいてマーティンに注目した。

「あれが卵ですか」ジョシュが受け入れがたい顔で白い球体を指さす。

「卵だとすれば、あんな大きさ、怪獣の卵としか」

「そうとも、物理的に脅威から守ってくれる、そんな力をもつ存在がもしいたとしたら、それは怪獣でしかありえない。フツアの神とは、彼らに好意的な怪獣のことだったんじゃないか？」

マーティンは興奮をかくしきれない様子だった。

フツア族が一同へ振り返る。そこからマイナが代表して進み出て、階(きざはし)の上で立ち止まって見下ろす。妹を映す双眸には弾劾の色が浮かんでいた。

「ここ、フツアの神、いるところ。入ること、許しがいる」

マーティンらにも言って聞かせるように、音声言語で拒絶の意思を伝えた。

「フツアの神、言わない、わたしたちに、あきらめよと。だからわたし、あきらめない。この星の未来を。命、つないでいくことを」

「命あるものはいつか死ぬ。遅いか、早いか、それだけだ」

ミアナが言い募ると最高齢らしい古老が口をひらいた。

「あるがままを受け入れる。ここそ現世(うつしよ)の理(ことわり)なり。理はわれらの力の及ぶところにあらず、また及ぼすことあってはならぬ。理が生きよと言うなら人は生きる。滅びるときはいかに抗えども人は滅びる。われらとて、われらの運命の主人ではないのだ。世の事象はわれらとは関係のないところではじまり、われらが関知しえぬうちに終わる、たとえそれが、われらの命運を左右するものであっても。おまえはそれを知るべきだ」

「わたしたちの進む道は、本当にそれしかないの？　わたしたちは仲間がゴジラの炎に焼かれても、村を踏み潰されても、ただ逃げるだけだった。そうするしかないって、みんな言ってた。でも、本当にそうなの？　ゴジラで死んだ仲間たちは、本当に死ぬしかなかったの？

だれも考えなかった。わたしたちの親がゴジラをなくしてくれていたら、あの人たちは死なずにすんだって。そして、わたしたちの子供や孫が、おなじことを思うんじゃないかって」

フツアたちに動揺が広がった。

認識の違いだ、とマーティンは痛感した。アラトラム号の全乗組員は、マーティンをふくめ、地球人類が総力を挙げてもゴジラに太刀打ちできなかった事実を知っている。だからゴジラは倒せないものという認識が深く根づいた。ゴジラも生物であるから必ず死に追いやることができると頑なに信じていたのはハルオだけだ。ほかの４９９名は、ゴジラにはなにか物理法則を超えた力があって、人類の手では打倒できないようになっていると、非科学的ながらも漠然と考えていた。ゴジラに関することだけ思考が停止していたといってもよい。

フツアはさらにその思想が尖鋭化していて、ゴジラは地震や台風のような自然災害であり、よって倒すものではなく、耐えるものとして受け止めているらしかった。

これも淘汰の一種だとマーティンは渋さを感じた。

過去にはフツア族のなかにもゴジラを倒そうと挑んだものたちがいたにちがいない。だが彼らはことごとく敗れた。一方で、ゴジラを災害と認識して、逃げに徹する集団が生き残る。それが２万年もつづけばフツア族が後者のみで純化されてもおかしくない。

「命あるもの、たしかにいつか死ぬ。でも、命の本分は、生きること、生き抜くこと。なにもせずに死ぬことは、負け。死ぬのはいつでもできる。でも死んだあとでは、生きること、できない。だからいまの自分になにができるのか、考えて、考えて、考え抜いて、精いっぱいがんばって生きる。いまのわたしたちいるの、祖先が必死に生き抜いてくれたから。わたしたちはわたしたちのためだけに生きてるんじゃない。この大地は、未来の子孫から預かったもの。ちゃんと返す役目がある。命をつなぐ、使命がある」

だから、ミアナのような考え方は、おそらくは突然変異のようなものなのだろう。思えばミアナは、保守的なフツア族のなかにあってた

だひとり、宇宙人にもひとしいハルオら降下部隊を率先して介抱し、魔法にしか見えないであろうハイテクノロジーにも積極的に興味を示していた。

生物はつねに進化のチャンスをうかがっている。いまの形質が最善とはかぎらない。だから突然変異を定期的に生む。その変異体が環境にそぐわなかったら死んで終わる。それを飽くことなく繰り返すのだ。いつか変異体のほうが通常個体よりも有利な環境になるかもしれない。突然変異と環境変化がたまたまぴったりと噛み合うときがくるかもしれない。進化はそうして起きる。

「あなたはなにを願うの」

マイナがミアナに問い質した。妹とおなじ青い瞳が揺らいでいた。その目をミアナは正面から受け止める。

「フツアの神に、ワタリガラスとともに戦うことを願う。ギドラを倒してと。神が戦うに足る世界にしてみせるからと」

フツアがざわめいた。彼らでさえ神の姿は見たことがなかった。

「フツアの神が応じると?」

「応えてくれないなら、わたしはわたしだけでも戦う」

ミアナは1歩も譲らなかった。

「まるでどこかの不良大尉どのみたいだな。伝染(うつ)ったのか、似たものどうしなのか」

マーティンにジョシュがほんの小さく吹き出した。

「わかった」マイナが決心した顔で頷いた。「神に歌を捧げましょう。聞き届けるか否か、それはわたしでなく、神が決めること」

ミアナも顎を引き、きざはしを昇る。ふたりの巫女が進み、フツアの群衆が戸惑いながらも左右に避けて、岩塊へ通じる1本の道をつくる。

白く巨大な扁球の前に立ったマイナとミアナは、ともに歌を唄いはじめた。未知の言語だった。だが、その平和を希求する思いや、至純の恵愛、フツアの神を衷心から讃えるひたむきさが、てらいなく詞に込められていることは直観で理解できた。傾聴しているうち、マーティンらは彩雲を踏むような気持ちにのめり入った。言語を超えた

共通の人間性に到達した高吟は、ふたりの天上の美声もあいまって、渾然一体となって胸に迫り、マーティンたちはその彩雲に乗り、地にいながらにして天を踊躍(ゆやく)した。

夢を見ているような歌が終わった。

そのとき、扁球の上部がかすかに動いた気がした。マーティンは見間違いかと目を細めて注視した。見間違いではなかった。扁球の背がときおり盛り上がる。まるで、内部にいるなにかが外へ出ようとしているかのようだ。

「神はかつてゴジラに挑んだ。人々を守るためにその身を犠牲にした。神には忘れ形見があった」

マイナが語り、

「忘れ形見は、人々の手で最果ての地より海を渡り、この地へ逃れた。だからゴジラの炎をまぬかれた。卵の親とあまたの同胞(はらから)がともにゴジラの足を止めんと戦った。命をなげうち燃え尽きた。その灰が神の卵を生かした。神はその恩をけっして忘れない。かのワタリガラスはわれらの神のために命を賭したものたちの血に連なるもの。時を超え、波を越え、いまこそ恩に報いるとき」

ミアナが引き継いだ。

内側からなにものかに押されていた扁球上部が弾性限界を超え、絹のように破れる。裂け目からは七色の粒子が女神の息吹のように噴き出す。色彩豊かな粉が頭上で荘厳に舞うさまは極地の夜天を彩るオーロラのようだ。祭壇場が浄福の気で満たされる。

「これは」舞い降りる鮮やかな粉を掌に乗せたマーティンが、親指と人差し指ですりつぶして確認する。指先は虹に染まった。「まるで、鱗粉のようだ……」

マーティンは自らの間違いに気づいて顔を上げる。

「そうか、これは卵じゃない。――繭だ!」

「繭?」

アダムがマーティンを見る。

「卵と繭を同一視する民族もいる。繭は成虫原基の卵のようなものだからだ。なぜ昆虫は幼虫と成虫に分業化がなされているのか。幼虫

は養分をたくわえることに特化した形態だ。その養分をもとに成虫がつくられる。逆に言えば、卵のなかでエネルギーが吸収できるのなら、幼虫の段階を踏む必要はない。あるいは卵を繭としていた可能性もある」
「待ってくださいよ、幼虫とか成虫とか、じゃあ今から出てこようとしてるのは……」
　地球人たちをよそに、マイナとミアナはいままさに神を生まんとしている繭にひざまずき、祈りつづける。
「われらが神よ、清き聖なる泉にわれらを導きたまえ、正しき道をあなたの光で示したまえ」
「あなたのいるところこそ浄土。天に栄光、地に平和」
「理を超えた命は罪。理を超えた死もまた罪。弱く短き命のわれらから罪を遠ざけたまえ」
「あなたの祝福が、われらのまとう衣となるように。あなたの祝福が、つねに締める帯となるように」
「神よ、あなたの光輝く御名を語り継ぐわれらを守りたまえ」
　双子の巫女が視線を合わせ、頷き、繭へ向き直る。
「あなたの至尊の御名は」ふたりが同時に声高に唱える。「――モスラ！」
　繭の裂け目をこじ開けるようにして、高密度の毛におおわれた、丸みを帯びた大きな物体が昇ってくる。物体には柔和な眉毛のような櫛の歯状の触覚が1対飾られている。その下にある真円の複眼は、すべての生命の生まれた母なる海を思わせる、至高の青。
　節足動物の特徴そのままの前肢が抜け出て、爪を引っかけて踏ん張り、丸い頭部に続いて、しわしわの翅（はね）を背負った胸部、さらには腹が繭から脱する。壮麗さにマーティンは陶然となる。
「ゴジラは2万年かけて成長し、メカゴジラは2万年かけて増殖していた。モスラもまた、2万年ものあいだ、力をたくわえ続けていたというのか」
　万華鏡を覗いているように虹色の鱗粉が群舞するなか、巨大な昆虫型怪獣が6本の歩脚で繭の上に乗る。翅に翅脈を通じて体液が送ら

れて展張。極彩色の翅がどこまでも大きく広がっていく。
それはまるで、日の出のような光景だった。
蛾と呼ばれる鱗翅目に属する昆虫に似ているが、翼開長はざっと１０００メートルはある。
フツアの人々がひれ伏して拝む。
「われらにも、殻破り、繭ぬぎすてよとおっしゃるか。神がおん自ら、われらの進むべき道を体現しておられるというのか」
古老が澎湃（ほうはい）と涙を流した。
羽化したモスラは１０００メートルの翅をゆっくりと持ち上げ、下ろした。烈風が吹きすさぶ。柔らかい体毛につつまれた巨体がふわりと浮かんだ。磐座の天井が守護神獣の飛翔を寿（ことほ）ぐように上昇し、空への道を開ける。
モスラと向き合っていた褐色の巫女ふたりが振り返る。
「モスラは、ギドラと戦うと言っている」
「勝てるか、どうか、わからない。でも、そのために、きょうまでこの命があった、と言っている」
羽ばたくごとに大気を浄化していくような日輪の怪獣が、ギドラへ向かう。
「サカキ大尉から通信がありました。メカゴジラの起動に成功。こちらに向かっているとのことです」
ジョシュにマーティンがわずかに安堵する。
「メカゴジラに、モスラ。戦力大幅増だな」
「これに、ゴジラもいれば心強いんですがね」
ジョシュがなかば冗談という顔でまぜっ返した。ある意味ではゴジラは地球最強の兵器という見方もできる。
「撃沈寸前のアラトラムの通信を傍受していたが、ゴジラはいま地球の反対側だ。マナがギドラに吸いつくされるまであと２０時間強。いくらゴジラでも間に合わないだろう」
マーティンもギドラへの不安が言わせたものだとわかっていて苦笑しながら退けた。ついで真剣な顔になる。
「そもそも、ゴジラが生きているかどうかもわからないのだからね」

「ゴジラ、生きてる」
祭壇のマイナが断言した。
「ゴジラ、負けない。負ける、死ぬこと。ゴジラ、死なない。だって……」
「だって？」
訊ねるマーティンにミアナが揺るぎのない決然とした表情で、言った。
「ゴジラは、ギドラを、許さないから」
日本列島から２万キロ離れた――地球の外周が４万キロなので、日本からどの方角を見ようが２万キロといえばおなじ座標を示す――人類に南大西洋と呼称されていた紺碧の海、水深５２００メートルの深海底に、異様な海丘（かいきゅう）があった。一片の光も届かない暗黒の世界ではあるが、平原のようになだらかな周囲の海洋底から不自然に盛り上がったその海丘は、稜線にいくつもの板状の突起物が、一定の法則をもって規則的に並んでいた。突起物には葉脈のような筋が走っている。
海丘から地に沿って力なく伸ばされているのは、筋肉が束ねられた太い腕だ。とてつもなく大きい。海底に倒れ伏して、海丘であるかのように微動だにしていなかった巨大生物、ゴジラのたくましい腕が震えはじめ、先端が爪となっている指が閉じて堆積物を握りしめる。
閉じられていた眼がひらく。瞳には無限の憤怒。
ゴジラが地形のような巨体を起こす。口腔から大量の気泡が吐き出される。放たれた咆哮は、大西洋全域の海中に轟いた。
◇
「ハルオ、聞こえるか」
ヴァルチャーに乗ってモゲラとともにギドラへ向かっていたハルオにメトフィエスからの通信が入った。超音速で直行しているのに、夜空を四方に照らす黄金の雲のごときギドラは、見かけ上、背景のようにまったく動いていない。あまりに巨大すぎるからだ。下方の太平洋からは海水が白い飛沫となって浮き上がり、そのまま空へと吸い込まれている。ギドラの重力が地球の引力の影響を受けにくくなる

ほどの高度にまで海水を持ち上げているのだろう。地球という惑星そのものがギドラのいる方向に引き伸ばされているといってもいい。マナの吸収などなくともただそこにいるだけで星を滅ぼす厄災だった。
「ギドラの体は、物質化するほどに凝縮したマナで構成されている。生来の細胞ではない。擬似的な肉体といっていいだろう。それゆえ自身の体として統率するには、なんらかの中央制御システムが必要だ」
　動物にせよ植物にせよ、また人類にせよエクシフ・ビルサルド両異星人にせよ、多数の細胞の集合体である多細胞生物であることに違いはない。最初の生物が単細胞生物であったことを考えると、人間という1個体は４０兆の単細胞生物からなるコロニーであるともいえる。そして生物の本質は基本的には利己である。自分に利益があるからコロニーを形成している。たとえば免疫細胞は母体を守る使命感からではなく、あくまで病原菌という餌を捕食して飢えを満たしているだけだ。そういった利己の集大成が結果的に人体を維持する利他につながっている。
「ギドラの体はマナを強引に寄せ集めたもので、おれたちの体のように構成単位が全体を維持する仕組みにはできていない……？　自分の体がばらばらにならないよう統轄する支配者が居るということか」
「そのとおりだ」
「全体を一括制御するコントロールユニットで、群体をひとつの個体のようにまとめあげている、という点では、メカゴジラに似ているな」
　ハルオは、ユウコの脳をニューラルプロセッサとして制御システムに搭載しているモゲラをモニター越しに見やった。
「ギドラの体のどこかに、マナを下僕として強制的に支配している王、コアがあるはずだ。そのコアを破壊できれば勝機はある。問題は、この巨大にすぎるギドラのどこにあるかがわからない、ということだが」
　大海から砂金を探し当てるようなものだ。難題である。
「だがメトフィエス、なぜそんなことを知っている？」

画面のなかのエクシフが、ひどく人間くさく微笑んだ。
「故郷を滅ぼした怪獣を憎みつづけ、落ち延びてより幾星霜、闇と真空を放浪するあいだ、ずっとその打倒に固執しつづけてきたのは、きみだけではないということだよ」
ハルオがタウｅへの旅のなかで寝ても覚めてもゴジラの殲滅に執念を燃やしてきたように、メトフィエスもまた、ギドラへの復仇（ふっきゅう）をひそかに誓って方法を模索していたのだ。似たものだからこそメトフィエスはハルオに共感したのかもしれない。
「わたしのこの手でギドラを倒す日がこなくとも、築いた理論がのちの世代へ受け継がれ、いつか宿願が成就すればいい。そう考えていた。まさか、このわたし自身がやつを拝むことになろうとは、正直言って思いもしなかったが」
「おれがあんたなら、きょうという日をエクシフの神に感謝してるだろうさ」
メトフィエスが意表をつかれた顔をする。
「自分の手で仇が討てる。つぎの世代に後回しにしなくてすむからな」
白皙長身の美丈夫は、いままで見たことがない、きょとんとした表情になって、つぎにほがらかに大笑しはじめた。メトフィエスが声をあげて笑うところを見るのも、これまたはじめてだった。
「そうか、そうだな。ハルオ、わたしたちの世界は、わたしたち自らの手で守り抜かねばならない。健闘を祈るぞ」
画面がメトフィエスからマーティンに切り替わる。
「サカキ大尉、まずはギドラのどこにコアがあるかを探る。モスラというフツアの守護怪獣がギドラの右側面と後方を攻撃する。きみは左翼を、ユウコくんは上空へ回ってやつの背中を攻撃してくれ。手分けしてコアの場所を突き止めるんだ」
「了解。ユウコ、いくぞ！」
ハルオとモゲラが散開。ハルオはヴァルチャーの運動性能と速度性能を人体の限界まで発揮させて西南西に針路をとる。背中がシートの背もたれと一体化してしまいそうになるほど押しつけられる。

対気速度計はマッハ５に届こうとしていた。喉までこみあげてきた胃液が喉を焼く。苦味と酸味の混じった唾液を飲み込んで自らに喝を入れる。ナノメタルの翼は、東シナ海を抜けてからわずか５０分足らずで旧中国領を東西に横断し、かつてオペレーション・グレートウォールで２０００発の核兵器に崩落させられたまま密林に呑まれている元ヒマラヤ山脈上空へハルオをたどり着かせた。

南の方角には、純金で建造されたかのような壁がそびえたっている。高さは天空まで、幅は地の果てまでつづいているかのようで、端が見えない。事実、地球に翼と尾を挿し込んでいてなおギドラの背は高度１００キロの熱圏にあり、左の巨翼はインド亜大陸全土を南北に分かつだけにとどまらず、インド洋を二分し、下端はオーストラリア大陸西の沖合いにあるのだった。

コウモリにも似た翼平面形（よくへいめんけい）の翼が、爪のひとつを元ニューデリーに打ち込んで、地球のマナを飲み干そうとしているのだ。右翼はすべての爪が海に刺さっていることから、マナに接触するには地球のどこでもいいらしい。ギドラには地上と海底の高低差など誤差にすぎないようだ。

近づく生命を無差別にマナへ変換してしまう宇宙超怪獣の重力場に囚われてはならない。ハルオはギドラから５００００メートル以上の距離を保って占位した。レールガンの砲身にナノメタルが発電した融合炉なみの膨大な蓄電量を投入。

弾き出された硬化ナノメタル弾頭はマッハ１２の極超音速で飛翔し、過去にエヴェレストのあった地点から、はるか６００キロ先の旧インド領元ニューデリーの荒野に食い込んでいる超巨大な爪に着弾した。つづいて翼の皮膜にあたる部分にも次々に電磁加速の砲弾を命中させる。

宇宙ロケットのように雄々しく急上昇していたモゲラは、大気と宇宙との境目であるカーマン・ラインを越えて、高度１５０キロに定位した。眼下にはギドラの背中が東南アジア全域とオーストラリア大陸北部まで広がる。高空からの眺めはさながら宵闇に現れた金色の海原だった。

モゲラが全身の各部から長砲身のランチャーを生成。１６門の砲門が、電磁加速によって全長５０メートルの銀の槍を射出する。貫通力に特化した完全装甲重質金属侵徹弾頭（フルメタルミサイル）が銀の落雷となってふりそそぐ。

マッハ１３の槍も、ギドラの外皮こそ塑性変形させて相互侵食を起こすことで侵徹したが、黄金龍に動きはない。弾体は穿孔とともに長さが失われていくので、装甲厚に対して十分な全長がなければ貫徹できないのだ。しかし弾芯をいま以上に長くすると初速が落ちる。

モゲラ自身が急降下。大地のように平面的ですらあるギドラの広大な背に高速で着地する。超重力がモゲラの重量を１０００倍以上にも増加させる。

だが、モゲラは自重で潰れることなく自立していた。

金属の理論強度に対して、実測値はその１／１００ほど。技術的限界に挑戦しても１／１０程度でしかない。鉄の理論強度は２３ギガパスカルだが、２１世紀初頭の自動車用鋼板で０．５９ギガパスカル、実用化できた最高強度のものでも２．５ギガパスカル級が限界だった。強度ばかりを追求しても延性が失われるために製品として実用性に乏しいという事情もあるが、物理的な問題として、金属材料そのものの亀裂、繰り返しの荷重が作用して生ずる金属疲労、原子の配列のばらつき、不純物の存在といった構造的欠陥をなくすことはできないからだ。

だがもし、不純物の混入や、化学的に活性な環境での原子間結合、原子の分布を完璧に均一にできたなら、理論強度を実現できる。

金属材料を構成するナノマシン１個１個にいたるまで操作し、金属疲労の微視亀裂すらもリアルタイムで排除、原子間の距離を寸分の狂いもなく等間隔にととのえた体心立方格子結晶たる超高張力ナノメタルは、まさに地球最強硬度。ギドラの重力によるすさまじい荷重すらも降伏点が上回るため、モゲラは座屈を防いで立っていられるのだ。

モゲラが両腕の螺旋円錐体（バスタードリル）を高速回転させる。自身が踏みしめるギドラの背にドリルを突き立て、掘削していく。根元である肘まで埋

まってから腕ごとドリルを分離。後退する。
理想強度のドリルがそのまま肉を掘り進む。しかし一定の深さで超高密度体に阻まれて侵攻不可となったため、起爆。爆炎が穿孔から噴き出す。
南の水平線が、夜の闇を幽玄な虹色に染め上げている。
ギドラの東側を音よりも速く南下していた巨蛾怪獣モスラから、羽ばたきとともに鱗粉が飛散する。電荷を帯びたそれは意思をもっているように夜気を舞う。鱗粉はモスラの姿に集まって、本体と編隊を組む。
鱗粉によって形作られた分身は、赤からオレンジ、黄色、緑、青、菫色（すみれいろ）にめまぐるしく色彩を変化させながら追随し、モスラがハワイへ到達するころには、１００体にまで増えていた。
モスラとともにハワイ上空で幻想的に旋回していた、五彩に輝く分身たちが、いっせいに星空に散開する。ある一団は西へ直進してギドラの右翼をめざし、ある一団はさらに南進して赤道を越え、南極大陸と南極海に刺さって地球からマナを吸い上げている2本の尾へ殺到。それぞれがマッハ８５という驚異的な超高速で体当たりをしかける。着弾した分身は、翼開長１０００メートルのモスラの姿をした爆弾であるかのように爆発し、宇宙超怪獣の表皮に絶え間なく試練を与える。ギドラには針で刺されたようなものでしかないだろうが、１００の分身による攻撃は１００回繰り返すと1万の打撃になる。
爆発四散した鱗粉はギドラの周囲を波のように漂う。
モスラが櫛状の触角からプラズマ化した光線を七色の霧に射つ。ビームは鱗粉で乱反射し、ランダムに駆けめぐって太平洋上空から珊瑚海、タスマン海、南極海の空まで飛び交い、さまざまな角度からギドラを攻め立てた。モスラはホノルル空域にいながらにして、太平洋を南北につらぬくギドラの右側面全体と、南極圏の尾を攻撃できるのだった。
「ギドラの体表にシールド、およびそれに類似する電磁波徴候、認められません」
フツアの集落がある山の頂上に設けられている櫓（やぐら）で、ジョシュが観

測データを分析する。日が落ちているのにギドラの輝きで明瞭な影ができるほど明るい。
　マーティンも分析結果をたしかめる。
「シールドがないのは、かえってやっかいかもしれんな」
「単純な防御力だけでじゅうぶんだったということですか」
　背中、翼、尾に攻撃を繰り返すが、コアの場所が判明するどころか、ギドラが反撃に出る気配すらない。
「やはり、ここじゃない」
　しかしハルオには想定内だった。
「上面、腹部、側面、後方に反応がないとなると」
「前方、ということになるな」
　マーティンの推測をメトフィエスが引き継いだ。前方、つまりギドラの正面から攻撃するしかない。惑星や恒星がそうであるように球体こそが正解の宇宙空間に棲息しているにもかかわらず、ギドラが前方に火力を集中する姿をしているのは、そこに守らなければならないものが隠されているからだ。ハルオたちはそう睨んでいた。それを確認するためにまずは前方方向以外を叩いたのだ。
「これよりギドラの真正面に回る。ありったけ叩き込むぞ」
　ヴァルチャーの翼をたたんだ超高速飛行モードで日本列島にとって返すハルオの命令に、モゲラが全ブースターの最大推力でギドラの引力圏をふりきって雄翔し、マーティンから双子の巫女を経由して伝えられたモスラも、逆向きの雨のなか北太平洋を北西へ飛ぶ。
「はっきり言ってギドラの正面は避けたかったが、しかたがない」
　旧中国領と旧ネパール領の国境からとんぼ返りした沖縄諸島上空５０キロで、神々の建築物のように動かないギドラの左の顔とハルオは正対した。ヴァルチャーが両手に抱える２門のレールガンを連射。大気が薄いために初速のまま着弾。龍の鼻先で火花が水飛沫のように散る。
　モゲラがギドラの中央の頭部直上に空中定位して、腕を腰だめに構える。ドリル部分を回転させながら射出。螺旋を巻いた円錐が底部からプラズマジェットを噴かせて翔破する。頭頂部に激突し、外皮を

ナノメタルの刃で掘削して内部で爆発。爆裂と金属破片でずたずたに引き裂く。

小笠原諸島の空にある右の首に、モスラが分身を集中させる。長さ２５００キロの蛇のような首が七色の火炎につつまれた。伝説に語られるドラゴンのような頭部までが鱗粉に隠される。触角のビームに加えて、額に嵌まる３つの宝玉のような単眼からも光線を照射する。

単眼の光線は、自由電子レーザーとおなじ原理で光速にまで加速した自由電子を、強力な電磁場干渉で電子軌道を蛇行させ、共鳴的な相互作用によって位相をそろえた高密度レーザーだ。波長が１．３１５マイクロメートルの赤外線レーザーは大気中での減衰率が極めて小さく、長距離を通してもほとんど拡散しない。俗に大気の窓とも呼ばれる減衰の小さい周波数領域なので、数百から数千キロの距離を隔てて発射しても、威力を落とさず着弾させられるのだ。

それらの攻撃で、戦端がひらかれてから初めてギドラが反応らしい反応を見せた。中央の頭部が首をもたげる。それだけで遷音速（せんおんそく）に達した角の先端部分の空気圧が急激に低下し、断熱膨張で飽和水蒸気量が急減することで、空気中の水分が水蒸気でいられなくなって凝固して、雲になる。結果として、荒々しい何本もの角が白い煙状の尾を曳く。まるで龍の怒りが具現化したかのような現象。

大きく裂けた口をひらく。嘲笑うような、あるいは電子音のような、奇怪な響きが夜天を揺らした。顎の稼働音なのだろうが、まるでギドラが咆哮をあげたかのようだ。

数キロメートル級の牙が並ぶ上顎と下顎のはざまに、黄色矮星のごときまばゆい光が宿る。

発生された重力子が収束され、指向性を与えられた重力波を媒介として、光子の流れをねじ曲げることで通り道の空間に稲妻に似た光の洪水を起こしながら、引力光線が光速で空中のモゲラを掠めた。

モゲラがねじ切られるように上半身と下半身に分断される。

ふたつの残骸と化したモゲラは、そのまま本州へ墜落するかに思われた。

だが、下半身を構成している各部品がパズルのように組み替えられ、空中で戦闘爆撃機形態であるスターファルコンに変形。
上半身もまた、落下しながら、左右の砲身を前方へ伸ばした戦闘機、ガルーダへと姿を変える。
２機のドッグファイターは同時にブースターに点火。ふたたび上昇し、大空を自由に飛び回る。ガルーダが両腕のような砲門から収束中性子砲を照射し、スターファルコンは電磁投射砲で実体質量弾の砲撃を、挟み撃ちのかたちでギドラの頭部に集中させる。
立てつづけに顔面に巨蛾の猛攻を受けていた右の首が、うるさそうに引力光線を放つ。いくつもの分身の輪郭がかき消される。さらに中性子星なみの重力は、北太平洋の海面をえぐり、カムチャツカ半島を南西から北東へ真っ二つにせしめた。破壊の余波がオホーツク海を壁のようにそそり立つ怒濤に変えた。サハリンをふくんだ旧ロシア領のオホーツク沿岸全域が大海瀟（だいかいしょう）に呑みこまれる。
左の首が動く。ハルオは急旋回して反対方向へギドラの頭が動いたときに、はからずも深入りしすぎていて、強力に引き寄せられそうになったが、ヴァルチャーの推進力でなんとか脱出した。
接近すれば命を吸いとられる。「これが生身という脆弱な肉体の限界だ」ガルグの冷徹な論理がよみがえった。ナノメタル化すればギドラに近づいてもマナに分解されることはないだろう。激しい葛藤にハルオは揺さぶられた。自分は人として怪獣に勝たなければならないと信じていた。だが、人の姿に拘泥したいがために勝機をのがすことは、果たして人の在り方として正しいのだろうか。だれかのために人の姿を捨てて怪獣となったユウコのほうが、自分よりよほど人間らしいとはいえないか――迷いを忘れるためにハルオはレールガンの引き金を引き続ける。
「マナの枯渇まで、あと１２時間を切りました！」
ジョシュが叫んだ。地球の半分をおおうギドラを攻撃するための移動だけでも時間を食う。まだコアの場所も特定できていないのに、地球滅亡まで折り返し地点にきた。
「火力不足だな……」

マーティンにも焦躁がつのる。ハルオ、モゲラ、モスラが全力を傾注しても、神の威光に届かない。夜空にこだまするのはギドラの笑声なのか。

そのとき――。

富士山を遠望できるフツアの櫓にいたマーティンたちは、唐突に閃光に漂白された。おもわず顔を腕で庇ったマーティンは、一瞬、引力光線にやられたのか、と思った。だがまだ思考がつづいていた。生きている……ギドラの死の光ではない。おそるおそるまぶたをひらく。光に一拍遅れて、天地が裂けるような特大の轟音と激震が一帯を襲った。櫓が逆さまの振り子のように揺れる。地球人もフツアの人々も、メトフィエスも、時化の船上にあるがごとく柵にしがみつくほかなかった。

「あれを!」

ジョシュが指差す方向をマーティンも視線でたどった。

富士山の山頂から、天を衝くような1本の光条がまっすぐ垂直に伸びていた。さきほどの閃光の正体だった。

ビーム状のその光はすぐに消えたが、その代わりに山頂から紅く煮えたぎる溶岩が、爆発したように勇躍しはじめた。

夜空を背景にきのこ雲のような噴煙が急速に膨張し、それを真紅に燃えるマグマが下から不気味に照らし出す。大小さまざまな火山弾が流星群のごとくに沛然(はいぜん)として旧関東地方一円の地にふりそそぐ。八神峰(はっしんぼう)からあふれた溶岩が輝く濁流となって流れ落ち、たちまち富士の広大な裾野が、メカゴジラシティのあったクレーターもろとも灼けた鉄色の大海と化すさまは、地球の生命力の力強い躍動を見せつけられる思いで、見るものの胸には畏敬の念が沸き上がった。

「富士山が……噴火?」

思考が追いつかないという顔でアダムが呟いた。

「いや、これは……」

マーティンは手すりから身を乗り出した。

絶えず溶岩を噴き上げる幽宮(かくりのみや)に、なにか蠢くものがあった。その黒いかたまりは、紅蓮に輝く噴火口を昇って、大内院(だいないいん)の縁を形成する

８つの峰のうち南側にある三島岳（みしまがたけ）と浅間岳（せんげんがたけ）のあいだから、徐々に全身を現す。
老成した竜のような頭部。深い知性の光を感じさせた瞳はいま、火口のように灼熱の業火に燃える。
首から下に続くのは、筋肉のみで構成されているかのような、膨大な質量の詰まった堂々たる体躯。
３列に揃う背びれが、青白い電子の帯をまとっている。
噴出するマグマで逆光となって、体高３００メートルの高峻（こうしゅん）なるシルエットの巨大さを際立たせる。
ハルオが、マーティンが、アダムが、メトフィエスが、そしてフツアの民が、霊峰の頂点に立つ巨神の名を異口同音に叫ぶ。
「ゴジラ！」
地球の支配者、ゴジラ・アースが、爆発的に噴火する日本最高峰の轟きを登場音楽として、天の宇宙神に届けとばかりに雄壮な咆哮を響かせる。
高く跳ねて荒れ狂う溶岩と、成層圏まで届く噴煙中に閃く雷光が、怪獣王の再起を讃えるように壮大に演出していた。
「どうして、地球の裏側にいるはずのゴジラが富士山から……？」
ジョシュの顔は青くなっている。
マーティンはなかば呆然としながらも、
「おそらく、海底から地下へ掘り進んで、地球の中心をまっすぐ通ってマントルの流れに乗り、そこからふたたび富士山のマグマへ……」
「そんな無茶な！　３６４万気圧、摂氏５５００℃の地球内核部を、どうやって……」
「……やつは、われわれの常識を超えた生物だ」
沸騰する玄武岩を浴びながらも、ゴジラは毫（ごう）も気に留めず、富士の山を厳威として下ってくる。
「ギドラだけで手いっぱいなのに、ゴジラまで来られたら、どうしようもない」
「いや。やつの狙いは、ぼくらなんかじゃない」
アダムの焦りをマーティンは退けた。

「おれもマーティン博士に同感だ」ヴァルチャーの操縦席でハルオも確信していた。「ゴジラの考えていることは、ただひとつ。――リベンジだ」

赫灼たる鉱滓状溶岩の大河を、ゴジラが1歩1歩踏みしめて進む。スーパードームほどもある足が、烈火の溶岩を押しのける。超高温の荒波が大地を呑み込んでいく。

ゴジラが傾いだビル群のある一画にさしかかる。人類の築いた建造物表面を蘚苔類がおおって枯死したのち石灰化し、建材が完全に風化したあともビルの形状のまま残った、いわば都市の化石だ。2万年前の人類の繁栄をいまに伝える墓標の街を、ビルより大きい巨獣の足が微塵の躊躇もなく蹴散らし、踏み潰し、倒壊させ、粉砕していく。森林も、都市の名残も、ゴジラの目には入っていない。障害物ですらないのだ。

ギドラの中央の首も、自身がいちど倒したはずの相手がふたたび姿を現したことに興味をいだいたのか、ガルーダとスターファルコンを無視して、地上のゴジラを見据える。

立ち止まったゴジラが、天空に吼えた。

応じるようにギドラも開口。目も眩む引力光線が、神の怒りのようにゴジラへ放たれた。

ゴジラは熱線で正面から迎撃した。青みを帯びた光条は、引力光線の途方もない重力にねじ曲げられ、ギドラに届くこと能わず、地をえぐる。

なにものにも阻害されない重力波の波濤がゴジラに直撃。極大の濁音が響きわたって、初戦と同様にゴジラを中心として半径10キロ以上の広大なクレーターが形成された。ゴジラもたまらず倒れる。

ギドラがとどめとばかりに第2射を紡ぐ。

必殺の引力光線がほとばしる寸前、倒れたままのゴジラが熱線を発射。ひらかれていたギドラの口内を狙撃した。

口腔に亜光速で荷電粒子ビームが飛び込む。そこで暴力的な運動エネルギーを解放。

九州ほどもあるギドラの頭部が内側から大爆発を起こして、アジア

太平洋地域から一瞬だけ、夜が払拭された。
ギドラの中央の首が、断頭されたような無惨な断面を晒す。飛び散った肉片は宙で黄金の粒子となって霧消。
モスラと戦っていた右の首が左を見た。
ハルオがレールガンを撃ち込んでいた左の頭部が、右を見る。
予想だにしなかった事態に2つの頭はあきらかな狼狽をみせた。首を寄せ、立ち上がったばかりのゴジラへ、同時に引力光線を斉射する。
双頭の稲妻がゴジラを痛撃し、富士山まで一気に押し戻した。強大な重力波は富士の足元へ４３２万トンの巨獣を弾き飛ばして、２００００億Ｇ以上の重力加速度で構成分子を引きちぎるだけでなく、背後にある標高３７７６メートルの玄武岩質成層火山を分子レベルで分解。かつてその優美な風貌で日本民族が信仰の対象としていた悠久の山体は、粘つくマグマを漏洩させながら地響きを道連れに崩落し、山津波となってゴジラの上におおいかぶさった。日本最大の芸術品だった富士の山は、今やぶざまに崩れた無数の岩石と成り果てた。
ギドラの直上に、背景の夜より暗い染みが滲む。それは見る間に大きくなっていく。まさに闇の天体だ。
「これは」ジョシュが漆黒の球を観測して得られた情報の津波に目を瞠(みは)る。「まさか、ＳＸＤＦ―ＮＢ１００６―２？　ばかな。線スペクトルは、赤外線のはずが紫外線として観測されてる。青方偏移が起きています」
ＳＸＤＦ―ＮＢ１００６―２は地球から１２９．１億光年彼方(かなた)にある銀河だ。人類が栄華を極めた時代に宇宙望遠鏡で観測したときには、その銀河の水素原子が放つ線スペクトルは、波長１マイクロナノメートル付近の近赤外線として捉えられた。
しかし、この線スペクトルは本来、波長１２１．６ナノメートルの紫外線であった。紫外線が地球に届いたときには近赤外線になっていたのだ。原因は宇宙の膨張にある。電磁波が伝わる空間自体が膨張しているので、地球へ到達する長い旅のあいだに波長が引き伸ばされていたのである。

だが、暗黒球から覗き見る世界では、逆に赤外線が紫外線に縮められていた。空間が圧縮されているからだ。すなわち、地球とは反対の方向からＳＸＤＦ―ＮＢ１００６―２が見えているとしか考えられない。
「そんな。ありえません」
ジョシュの声はさらに困惑を極める。
「観測データからゲマトロン演算が算出したすべての解析結果が、太陽系の観測を示しています。太陽だけじゃありません。地球も捕捉できています。ぼくたちが、ぼくたちを外から見ている。なんだ、これは。なんなんだあれは！」
「時空が局所的に歪んでる。自然発生の特異点だと？」
マーティンもキーを叩いて解析していくが、各種センサーから吐き出される数値にはことごとく整合性がない。さながら、目の前に自分の後ろ姿が立っているようなものだ。３次元に住むものには全容が知覚できない。
「そうか。どうりでどこにも見つからないわけだ」メトフィエスがガルビトリウム結晶を握る手に力を込める。「そもそも、われらの世界にはいなかったのだな。１１次元の世界がおまえの住みかだったか」
人類は３次元空間と時間の４次元世界しか知覚することができないが、宇宙は１１次元で成立している。エクシフは純粋数学と統計を極限まで突き詰めることで、限定的ながら未来を観測し、いわば５次元世界を垣間見るゲマトロン演算を掌中に収めていたものの、７次元より高次の世界には手が届かなかった。優れた科学技術を誇ったビルサルドでさえ、３次元生物の枠を物理的に超えることはついぞ不可能だった。
「星と同等の年月を宇宙で生きるうち、宇宙の真の姿たる１１次元に適応した、というのか……」
マーティンは分析の手も止めて畏怖した。ジョシュやアダムらも、まばたきさえ忘れて凝視している。
人類の目には、宇宙の暗黒を凝縮した球体のようにしか見えない特異点、その向こうに、もうひとつの球体が覗く。

富士へ急行しながら最大望遠で特異点を確認したハルオは、最初、そこに浮かぶものを巨大な脳だと思った。さらによく目をこらして、ようやく理解する。

２０年以上におよぶアラトラム号の旅の中途で、ハルオをはじめとした子供たちは、人類の未来をになうものとして徹底的な学習教育を受けた。その一環として、いつか画像で見た人間の発生過程……受精卵から胚となって胎児へ成長する過程のひとコマが、記憶の奥底から掬い上げられる。

ギドラの真上に浮遊するのは、直径６６６メートルのヒトの胎児のような物体だった。まだ目や四肢が明確に分化する以前のような、胴体に対して異様に頭部が大きく、みじかい尻尾のある原始的な肉塊が、まるで膝をかかえるように丸くなっている。その奇怪な胎児は白い燐光を放つ半透明の繭のような球状の膜につつまれていた。特異点の黒と、その内側に淡く光る膜の白とで、天に現れた巨大なひとつの眼球のようでもある。

「あれがギドラのコアか！」

マーティンがハルオに胎児への攻撃を指示する。すでにハルオは砲身を肉色の巨胚へ向けていた。インターフェイスが目標を捕捉。電力を投入。「くたばれ！」爆音とともに飛び出したナノメタル砲弾が、１秒間に３４００メートル進む極々超音速で駆け抜ける。

弾丸はコアをつつむゼリーのような膜に突き刺さった。着弾点の膜が奥へと伸びる。停止。逆再生のように変形がもどる。レールガンの投射体は運動エネルギーのすべてを抹殺され、その弾力によってあっけなく押し返された。

モスラが自らとおなじ大きさの分身をコアへと飛ばす。触角のビームと、額の単眼からの赤外線レーザーも斉射。

ガルーダ、スターファルコンも火力を全開にしてコアを攻める。

だが、それらのあらゆる攻撃は、ただ膜を揺らすだけにすぎなかった。一見たよりなさそうな繭が、コアへの最後の一手を阻んでいた。

地球の半分をおおうギドラの全身が砂金のように崩壊する。マナに還元されたのだ。コアが集中砲火を一身に浴びるなか、粒子が集

合。３本の長い首、左右にひろがる巨翼、２本の尾というギドラの麗姿が、地球の地殻にとりついた状態で再構成される。つづいて特異点がコアごと縮小され、小夜（さよ）の空に埋没するように消え去った。みにくい赤子のようなコアはもうどこにもない。

「ギドラにとって、あの黄金の龍のような巨体は、この世界に干渉するためのアバターにすぎないのか。次元を超えて操作しているため、本体でさえ限られたコマンドしかこちらに入力できない。結果、損傷部分だけを修復させるほどの繊細な芸当はできず、再生させるにはいったん全身を形象崩壊させてから再構成するほかない……」

「そのさい、高次元世界にひそんでいたコアは、じかに復元するためにこちらの世界へ具現化する必要がある」

マーティンとメトフィエスが推論を組み立てていく。

ハルオにも理解できてきた。

「もういちどギドラに傷を負わせて、コアを出現させる」

コアをどうすれば破壊できるのかはまだ不明だが、まずは３次元空間に引きずり出さないことにははじまらない。

「マナ枯渇まで、８時間を切りました！」

夜明けはまだ遠い。あるいは、地球の生命はもう二度とあけぼのを見ることができないかもしれない。そんな思いを抱きながら、ハルオはギドラの真ん中の頭にレールガンを連射する。

モスラもまた、触角のビームと単眼の光線を放射、それらが集束して、太陽の表面温度の２０％という高熱の錐（きり）に強化され、宇宙超怪獣の中央の首の一点を穿つ。

ガルーダが空中で変形して上半身となり、おなじく下半身へ変形したスターファルコンと上下にドッキング。モゲラ形態へもどって、胸部を開放、そこから全ナノメタルの電力を集中させた高出力の中性子砲を照射する。

３者の総攻撃に、真ん中の首が頭を振る。衝撃波が吹き荒れる。右と左の頭部が引力光線で中央を援護。地を割る威力の稲妻が交差する。発射の兆候を読んでいたハルオは急降下、モスラとモゲラは左右に入れ代わるようにしてまぬかれた。重力波は光速だが直進しかし

ない。発動と効果範囲さえ見極めれば、回避は不可能ではない。
交差していた引力光線が消えたとき、その向こうにあったのは、顎をひらいてモゲラを狙う、ギドラの中央の頭部だった。
左右の首による援護は、こちらの戦力を分断させるための囮だと、ハルオが気づいたと同時に、モゲラへ引力光線が一閃された。
「ユウコ！」
完全な直撃で、理想金属の躯体でさえ分子間結合が切断される。モゲラを構成するナノマシンの分子構造そのものが崩壊。電子と原子を乖離させられることでプラズマになって、機械怪獣の首が高温の焔に変じて蒸発し、四肢が瓦解してしまい、残った胴体はきりもみに回転して、隕石のように旧福岡の森林地帯へと墜落した。
金属質の巨木がひしめくなかに倒れたモゲラは、動けない。
と、列島全土から、そして大陸から、絶望の黒に塗りつぶされた空におおさおさ劣らない黒雲がわきあがった。フツアの櫓上空も、その黒い雲霞（うんか）が翼を羽ばたかせて、それらは耳障りに騒ぎながら西へ通過していく。鳥ではない。アダムが思わず注目する。
「こいつら、どこから？」
これまで地球降下部隊を幾度となく襲ってきた、金属の翼竜が、群れをなして猛進していた。
「ギドラから逃げているのか」
「いや、様子が違う。追い立てられているというより、なにかを目指しているかのようだ」
と、マーティンには見受けられた。
そのとおりだった。おびただしい数の飛竜たちは、すべてが旧福岡のモゲラに殺到していた。
「そんな。とどめを刺す気か！」
ジョシュの報告にアダムが歯噛みした。
モゲラを中心に黒い渦を巻いていた鋼鉄の飛竜が、怪鳥音をあげて急降下した。
ナノメタルが自動的に反応し、手も足もないモゲラから棘皮動物のように無数の槍が伸長、近づく翼竜をかたっぱしから串刺しにする。

息絶えた怪鳥は菌糸のような銀に染められ、ナノメタルと同化していく。
翼竜たちはなおもモゲラに集(すだ)く。そのすべてがナノ金属に百舌鳥(もず)の早贄よろしく残酷な磔刑(たっけい)にかけられ、体細胞をナノメタルに作り替えられて、吸収される。
モニターしていたマーティンの目に理解の閃き。
「まさか、あの翼竜たちは、わざとナノメタルに食われているのか」
ゴジラとほぼ同一の細胞からなる飛竜は、生きた細胞でありながら金属成分も多量に有している。ナノメタルの原料としてはうってつけだ。モゲラの金属は鋼鉄の翼竜をつぎつぎと取り込み、増殖して、ユウコのＡＩにすすんで隷属し、質量を急増させた。
「彼らもこの星に住まうもの」マイナが言う。
「星に仇なすものと戦うためにわが身をなげうち、おなじ舟に乗った」ミアナも和した。
アダムがひとしれず拳を握りしめる。
旧福岡に集結した翼竜が１頭残らず呑み込まれた。
星々の光に照らされた金属の山が立ち上がった。
そこにいたのは、体高８００メートル、総質量１億２２８８万トン、五体満足のモゲラだった。すべてのブースターに点火。膝をたわめ、伸ばすと同時に空へと戻る。
水晶のかたまりのようなモゲラが両腕をあわせてギドラへ突きだす。右腕と左腕が融合。身長すら超える全長１２００メートルの大型ドリルとなって回転。
ハルオに引力光線を射とうとしていた左頭の眉間に真っ向から突撃し、プラズマジェットの推進力もあわせて掘削する。
モゲラに額を穿孔されている左の首が、右側へしなる。
ついで、日本列島に匹敵する長大な首が、薙ぎ払われるように振られた。先端にある頭部はたやすく音速の壁を超え、大気が割れて、海といわず地といわず衝撃波を極東の広域に叩きつけた。
ギドラの重力に起因する脱出速度以上の速度で振りほどかれたモゲラは、空中で姿勢を修正できなかった。いくつもあるブースターか

らばらばらに火が噴くばかりで飛行どころではない。なすすべなく地面に吸いこまれた。墜落地点は偶然にもフツアの集落近傍だった。
　モスラとハルオが縦横に飛び交って攻撃を続行するなか、大地のモゲラは立てない。四肢が麻痺したかのように立ち上がろうとしては倒れるのを繰り返している。
「まずいな。巨大化しすぎているんだ」
　マーティンが解析機器の横の床を拳で叩いた。
「３５０メートル級のメカゴジラは、ナノメタルのＡＩにビルサルド１人の脳がニューラルプロセッサとして組み込まれることで自律していた。あれほど巨大だと、ＡＩとユウコくん１人の脳だけでは、常時要求される膨大な演算処理が追いつかない」
　櫓から望むモゲラは、言うことを聞かない体を引きずり、ただ地を這うだけだった。
　拳を握ってはひらき、握ってはひらいていたアダムが、五指を固く握る。
「なら、おれがいきます」
　地球人ばかりか、フツア族までが驚愕の顔で青年少尉を見た。
「１人より２人です。人の脳を計算機にするというのなら、おれの脳もつかえば、処理速度は少しはマシになるはずです」
「わかってるのかアダム少尉、ナノメタルとの同化に可逆性はない。いちど融合してしまえば、海に落とした１滴の水を掬いなおすことができないのとおなじで、もう二度と、もとの人間には戻れない。自己の連続性さえ失われる。自分じゃなくなるんだ」
　マーティンにアダムは、吹っ切れた清洌（せいれつ）な笑みを浮かべた。マーティンは肌が粟立った。人間がこんな笑みを浮かべてはならない。
「サカキ大尉も命がけで戦ってるんです。おまけに、あんな女の子が戦って、苦しんでるのを見て、なにもしないなんて、おれには無理です」
　アダムは表情を引き締めて敬礼した。
「アダム・ビンデバルト少尉、これよりタニ曹長の援護に向かいます！
　お世話になりました！」

マーティンは反射的に答礼してしまった。アダムは軍人らしく回れ右をして、むしろ肩の荷が下りたようにモゲラへ向けて駆け出していった。
「あいつの単細胞な脳みそだけじゃ心配だ。おれも行きます」
「自分も、アダム少尉に続きます！」
アラトラム号最後の生き残り、つまりは地球人類最後の生き残りである降下部隊の面々がつぎつぎと名乗りを上げ、アダムの後を追う。ゴジラに地球を追い出され、２０年もの時間を無駄な放浪に費やし、いままたギドラから逃げ回っているなかで、皆のなかに無力な自分へ対する鬱積したものがあったのだろう。それがついに臨界を迎えたのだ。マーティンとジョシュはここで戦況を分析して指示を下さなければならない。ベンジャミンが立ち尽くしていた。
「おれは……おれは……」
「無理に行かなくていい。きっと、どちらでも正しいんだ」
マーティンはベンジャミンの肩を叩いて慰めた。
天上で繰り広げられる爆音と轟音の多重奏のなか、行く手をはばむ倒木と岩石の山を踏破し、モゲラのもとへ急ぐアダムに、ハルオから通信が入る。
「アダム、本気か。ナノメタルに呑まれれば、人でなくなるんだぞ」
ギドラとの戦闘の余波でできたらしい断層帯を乗り越えたアダムは、ヘルメットの内側に投影されたハルオに滝のような汗を流しながら白い歯を見せた。
「おれたちは、あなたがゴジラと戦っているとき、メカゴジラのなかから見ているだけで、なにもできなかった」
ひらけた視界の先には、自己の形状すら保っていられず自壊しかけているモゲラの巨体があった。
「でも、今は違う。あなたとともに戦う手段がある！」
アダムのあとに、７人の地球人がつづく。
「ゴジラに滅ぼされるのも、ギドラに喰われるのもお断りです。どうせ死ぬなら、どんな手を使ってでも、できることをやりきってから死にたい！」

息があがるのもかまわず走るアダムは、分身やビームなど多彩な技で奮闘するモスラを仰ぎ見た。
モゲラ復活のために自己犠牲をなした翼竜たちを思い出す。
「怪獣でさえ、この星を守るために自らの命をなげうっている。いまここで傍観者になったら、おれたちは永遠に、この地球で生きていく資格を失うんです！」
立ちふさがるあらゆる障害を越えていく。
「世界を守るために戦う。男にとって、これ以上の名誉がありますか！」
制御力を消失して苦悶に身をよじるモゲラのそばまでたどり着いたアダムは、口のなかがからからに渇いているのもかまわず無線機を全チャンネルに合わせた。
「タニ曹長、聞こえるか。アダム少尉だ。おれたちを取り込んでくれ。おれたちの脳を使ってくれ！」
音声無線を受信したらしいモゲラが、巨大な顔をアダムらに向けて停止する。モゲラはためらっているかのようだった。その間にも機械の怪獣からは、金属部品が弾け、腐った肉のようにこぼれおちる。
「いいんだ、タニ曹長、やってくれ！」
アダムが仰視しながら敬礼した。ほかの兵士らも倣った。
ついにモゲラが動いた。
機械怪獣の体の一部が溶解して液状となり、白銀の激流となってアダムたちに押し寄せる。
「サカキ大尉。地球のために戦うあなたの隣に立てることを、光栄に思います」
アダムたちは敬礼したまま銀の波濤にひと呑みにされた。逆再生のように大波が戻っていく。そこにアダムたちの姿はなかった。
新たに8人の脳を取り込んだことで、並列回路の演算能力が飛躍的に上昇、制御系が完全に掌握下に入る。さらに、多量に混入した人間の遺伝子がモゲラのナノメタルに突然変異を引き起こす。
ドリルだった腕は、5本にわかれた指をもつ手に変わる。
脚が伸び、尾が吸収されて縮んでいく。

節足動物に似ていた頭部は、比率として小さくなり、その顔は太古にアジアで信仰されていたという仏像に似た微笑を湛(たた)える。背負う精緻な造形物が発光して、光背(こうはい)となる。

各部から排熱しながら2本の足で仁王立ちする。

均整のとれた全体のバランスは、怪獣というより人間に近い。身長８００メートルの巨人だ。

それは、開発を主導していたビルサルドでさえ、可能性としてしか予想していなかった、ナノメタルの新たな進化。

その名は、鋼鉄の巨人、ジェットジャガー。

ジェットジャガーは両手を上へ伸ばして地から離れた。

重力などないように空を貫くジェットジャガーが、ギドラの正面を横切りながら、背中の光輪をいっそう輝かせる。立てた右腕の肘に、倒した左手の指先を重ねる。

右前腕から、強烈な光の柱が発生。水平にほとばしった光の柱は、ギドラへ一直線に駆け抜け、いましもモスラに引力光線を射とうとしていた左頭部の上顎先端で爆裂。光。爆風。電磁波。都市区画をまるごと廃墟にできるほどのとてつもない破壊光だった。

右手を粒子加速器としてプラスの電荷をもつ粒子を加速させ、左手の粒子加速器ではマイナスの荷電粒子を加速、両者を合体させて、電気的に中性な粒子である中性粒子ビームとして発射したのだ。荷電粒子砲という点ではゴジラの熱線とおなじ原理である。

鼻っ面を焼かれた左頭の注意がジェットジャガーに移る。

巨人は、横にひろげた両腕をそのまま畳んだ。つぎに、左腕を前へ突きだし、右手を振りかぶる。アークプラズマの周囲を不活性ガスで被包すると、外側が冷却されて電流が中央部に集中する熱的ピンチ効果で加速され、高温高速のプラズマジェットが得られる。水を撒くときにホースの口をすぼめると水圧が上がるのとおなじだ。ガスに１８％の水素を混入することで、アーク電圧が急激に上昇。

プラズマに放電する電流量を増大。導体中に電気が流れると導体の周囲に磁場が発生する。核融合炉が磁場でプラズマを閉じ込めるように、この磁場がプラズマの流れを誘導し、さらに狭窄されると同

時に、任意の軌道に安定させる収束効果が起きる。
プラズマの光は、ジェットジャガーの右手を中心に、回転のこぎりのような形状に成形された。
投擲された縦の光輪は、左の首の眉間に命中。宇宙空間という極限環境にも耐える堅固な表皮を両断していく。
光輪はなおも荒れ狂い、下半分を黄金の肌に埋めながら、後頭部から抜けていった。龍頭が震える。だが赤色巨星のような瞳の強靭さは衰えない。１平方センチメートルあたり１００キロワットの熱量密度でプラズマジェットを噴射すれば、厚さ２０センチメートルの鉄板すら、０．８秒で貫通する。それ以上の高速、高熱、高密度をほこる光の刃でも、ギドラにコアを出現させるほどの致命傷には届かない。
反撃の引力光線は、発射寸前で横合いからハルオがレールガンで殴りつけ、しかも反対側からモスラのレーザーが撃ち抜いて、注意を分散させることで阻止。その隙に巨人はいったん距離をとる。
左頭部の苦戦をみてとったギドラのセンターヘッドが、外見からは想像もできない電光の速度で振られ、爬虫類に似た構造の大顎を開放する。顎の稼働限界までひらかれた口腔は、直径６００キロの円周に、高さ2キロから6キロの牙が生えそろった、地獄の入り口だった。
中国四国地方へ逃れるジェットジャガーに、影。巨人どころか、中国地方と四国全域に、月光をさえぎる暗い影が落ちていた。
空中で振り返った巨人が、空を見上げる。上から降ってくるのは、夜空をおおうブラックホールのごとき冥暗（めいあん）の咽喉。
黄金龍の大顎が音速より速く閉じられた。
ジェットジャガーが口腔内に消える。
龍は悠然としていた。
その顔に異変。
長さ３００キロ近い下顎が、わずかに下へ動く。ギドラの眼には戸惑いの色。
ハルオも、マーティンたちも、きょう何度目かの驚愕に貫かれた。
ギドラの口内にて、白銀の巨人が、鋼の足で口腔底を踏みしめ、機

械の両腕で口蓋を支え、圧殺を防いでいたのだ。
ただでさえ強大な重力下で、大陸がのしかかってきたにもひとしい質量と咬力の万力に、満身の膂力をもって抵抗する。一瞬でも力を抜けば即座に圧壊して鉄屑となる。
耐えきれなくなった腕や背中、腰部に太ももから、部品が弾け飛ぶ。
ギドラの口腔内に飛び散った破片が、生きているかのように蠢動(しゅんどう)、水銀のような液体金属を経て、10メートル前後の大蛇に変身して這いまわる。飛竜と同様にゴジラ細胞と共通の因子をもっていたワーム型の怪物だ。ただし、ナノメタルで再構成されているために、ただでかいだけの芋虫ではない。頭部の先端が、螺旋を巻いた円錐形になっている。
ナノメタルの大蛇たちは、いっせいにギドラの口内をそのドリルで掘削して、内部へ浸入しはじめた。外皮がどれだけ頑強でも、粘膜まで装甲できるはずはない。理想強度を実現した大蛇が回転する衝角で放埒にギドラの肉を食い荒らす。
高等生物ほど痛覚には敏感である。センターヘッドは、西へ東へ、頭を振った。上顎と下顎に余裕ができる。喉の奥から金色の光。天と地が閉じるかのような死の顎(あぎと)から、ジェットジャガーがブースター全開で牙と牙のあいだを間一髪ですり抜けて、横へと脱出。直後に引力光線の奔流がほとばしっていく。
重力波の雷光が墨色の空をわたったとき、富士山だったがれきの山が、内部から爆発したように岩石を四方八方へ飛ばした。マーティンたちはまた視線をそちらに動かした。猛々しい咆哮がフツアの領域にまで轟きわたった。細胞に刻み込まれた恐怖を呼び起こされるにもかかわらず、その大音声(だいおんじょう)には心を奪われるなにかがあった。
もはや富士の山は原形すら残していない。そこに新たな山岳がぬうっと立ち上がる。
ゴジラだった。熱線のエネルギーを体内で爆発させ、全身から放射することで、総質量数百億トンはある富士山の岩石と土砂をまとめて吹き飛ばしたのだ。
賦活(ふかつ)して巨大な肢(あし)で力強く直立するゴジラは、なんら傷を負ってい

ないようにみえた。
だが、その左上腕に亀裂が走り、それは稲妻のように急成長して、太い腕を一周する。
ゴジラが足を踏み出した振動が引き金となり、左腕は枯れ木が折れるように肩から離れ、地球の重力にひかれて落下した。高層ビルほどもある左腕が落着した衝撃で、砂塵が舞い上がる。
分子のつながりそのものを切断する引力光線は、怪獣王の巨躯に確実に深手を与えていたのだ。
隻腕となりながらもゴジラは前進をやめない。旧御殿場まで歩を進める。
ヴァルチャー機内からモニター画面のゴジラを睨みつけるハルオには、忸怩たる思いがあった。ゴジラは両親の仇だ。そればかりか人類を絶滅の危機に追いやり、ハルオたちに屈辱的で過酷な宇宙船の旅を強いた、にっくき敵だ。
しかし、ゴジラはいま、たとえどんなに傷ついても、この地球(ほし)を守らんと、勝てる見込みのない戦いにかかわらずその身を投じている。
地球に住むものの義務として、悪しき侵略者に隷従せず、魂の自由のために昂然と立ち向かう。まさに、人間のあるべき姿ではないか！
天の高みにある、ギドラの３つの頭が、地上のゴジラに指向される。また引力光線の一斉射を受ければ、今度こそゴジラとて命がつきるかもしれない。
ハルオはギドラの重力圏内に囚われる危険を冒し、急速接近しながら左の頭部の左目にレールガンを撃ち込んだ。何発も何発も叩き込む。無線機に声を張り上げる。
「ゴジラを援護する。ギドラにやつを攻撃させるな！」
モスラが鱗粉の摩擦で生じた電位差を利用して、胸部からすさまじい電撃の嵐をギドラの右の頭に見舞う。自然雷は１億から１０億ボルトの高電圧、数十万アンペアの大電流だが、わずか０．００１秒しか発生しない。モスラの水平の雷は、電圧と電流量はそのままに放射時間が長いため、圧倒的な破壊力となる。
ジェットジャガーが高密度プラズマの円刃を両手に生成。ギドラ

の中央の頭部に投擲して切り刻む。龍がいらだつように島のような顔をゆがめた。
右と中央の首がゴジラから照準を外した。左の首はいったんハルオに向きかけたが、やはり優先的に処理すべき敵と認識していたのか、すぐに戻ってゴジラへむけて引力光線を放つ。
地球最大の生物が、天からのまぶしい光のなかに閉じ込められ、付近にあった権現山もろとも蒸発した。
ギドラの左の顔が勝利を確信。
そこへ地上からの赤い熱線が伸びて、大口をあけたままだった左首の口内を射抜いた。熱線を飲まされた、横顔が台湾島ほどもある頭が膨脹。眼球が流星のように飛び出したかと思うと、急激な昇圧に耐えきれなくなった頭蓋が破砕、割れ目からは光を放射するほどの非常に高温のガスが噴出し、圧力が大気中に一気に解放される。まるで大質量の恒星がその一生を終えるときに放つ爆発のような、凄絶な光景。
残りのふたつの首にも小さくない混乱があった。
七色の鱗粉が権現山方面からの爆風で流されていく。
旧御殿場に変わらぬ威厳をまとって立つゴジラの雄姿が、蜃気楼のように現れる。
モスラの鱗粉が、本物のゴジラ周辺の光と電磁波を歪曲させて周囲の風景を欺瞞し、隠匿させると同時に、やはり鱗粉で権現山付近にゴジラの虚像をつくり、もってギドラをあざむいたのだ。さきほどまで旧御殿場にいたゴジラが４０キロも離れた権現山山麓に一瞬で移動できるはずもないのだが、宇宙の支配者にはスケールが小さすぎて誤差でしかないため、疑うことができなかったのである。
赤色熱線の放出が終わったゴジラが、苦鳴をもらす。
体表を這う紫電が乱れる。背部で青い火花を散らし、スパーク。
ゴジラの背に林立する背びれのうち、もっとも大きいものが、弾けるようにして根元からちぎれ飛んだ。
樹葉のような形状の背びれが緩慢な弧を描く。何度か空中でうなりをあげながら回転して、乾湖となっている山中湖底の極相林に突き立つ。

ゴジラが限界を迎えつつあることはあきらかだった。櫓のマイナとミアナが、互いの手をにぎる。二重唱のように言う。
「これが、ゴジラの最後の戦いになるかもしれない」
ヴァルチャーの電磁加速投射砲、モスラのレーザーと雷撃、ジェットジャガーの荷電粒子砲と光輪が乱れ飛ぶ。牽制しながらコアの出現を待つが、頭をひとつ粉砕したのに特異点がひらかない。
「こちらが弱点に気づいたことを見抜いたんだ。おいそれとはコアを出さないぞ」
マーティンが舌打ちした。
「なら、残りの首2つも落とす！　クラークの第2法則だ。〝不可能と証明する唯一の方法は、不可能であるとされるまでやってみること〟！」
ハルオはひたすらギドラ中央頭部の左目に電磁加速された砲弾を集中させつづけた。蛇にはまぶたがないように見えるが、実際には透明なうろこでおおわれている。だから蛇は脱皮のさいに目の皮も脱げる。ギドラの眼球も、日向で摂氏２００度、日影で零下１５０度という極端な温度差と、大量の宇宙線から防護するために、蛇のまぶたのような遮蔽機構はあるはずだが、それは電磁波を選択的に透過する素材でなくてはならない。よって単純な装甲にくらべれば格段に脆弱なのだ。
無我夢中で発射した何発めかの弾丸が眼球の透明鱗（りん）を突破。都市なみの直径をほこるギドラの邪悪な目に飛び込んだ砲弾が、内部構造を運動エネルギーと衝撃波で暴力的にかきまわした。
もだえた中央の首が屈曲。今度こそハルオへと頭を指向する。上下左右どちらに逃げても引力光線の射界だ。しくじった。心拍が跳ねあがる。
ところが、ギドラは口をあけたまま不自然に硬直していた。モスラとジェットジャガーに反撃しようとしていた右の頭部も同様だった。
「長き旅をともにした、われらがともがらよ、この声が届いているか」
老いた声が響いた。それは鼓膜を振動させるのではなく、ハルオの脳内で音声に翻訳されていた。まるでフツアたちのテレパシーのよ

うな思念波による情報伝達手段だった。
「この声は」
　不思議な呼びかけはマーティンたちの脳も受信していた。脳は声音まで再現していた。ガルビトリウムを抱くメトフィエスの瞳孔が、針であけた穴のように収縮する。薄いくちびるが動く。
「エンダルフ枢機卿……」
　エクシフの族長にして、アラトラム号の自治を取りしきっていた中央委員会の一翼、エンダルフ中将にほかならなかった。
「わたしたちはいま、この怪獣のなかにいる。きみたちが戦っていることも把握している」
「まさか、モーリ船長！」
　続く声にジョシュが雷に打たれたように肩を跳ねさせた。
「古来、暴君は大食ゆえに毒酒をあおる。われらはこの邪（よこしま）なる王に食われて血肉の一部とされた。だがガルビトリウムが、われらの自我を一時的にとどめる奇跡をなした」
　音波ではないエンダルフの声が朗々と告げた。
「われわれだけではない。アラトラム３０００人の乗員全員が力を合わせ、このギドラとやらの動きを封じている。いまのわれわれにできることはこれが限度だ」
　と、ビルサルドの長だったドルド中将も説いた。
「長くはもちそうにない。サカキ大尉」苦しげなモーリに名指しされてハルオはほとんど本能的に返事をした。「われわれはもうじきギドラに完全に取り込まれる。その前に、ギドラを殲滅しろ。地球を救う方法はそれしかない」
「それじゃ、モーリ船長やみんなは」
「わたしたちはどうあっても助からん。もう死んでいるんだ。かろうじて意識だけがガルビトリウムの力で残留しているにすぎん」
「だが！」
「最後くらい、わたしの命令を聞け」慈父のようにたしなめるモーリにハルオはなにも返せなかった。「いいな、サカキ大尉。地球人としての義務を果たせ」

「メトフィエス、そなたのもっているガルビトリウムの結晶が、こちらの結晶と共鳴し、力を増幅させていると考えられる。じきにギドラも理解しよう。ゆめ、破壊されぬよう留意せよ」
　エンダルフのその言葉を最後に声は聞こえなくなった。こうしているあいだにも、ガルビトリウムの抵抗をむしばんで、ギドラ内部で乗員たちの自我までが分解されているのだ。
「モーリ船長たちが時間を稼いでくれている。メトフィエス中佐、あんたはフツアの集落へ。ガルビトリウムを死守してくれ」
「これをアラトラム３０００名の命と思いましょう」
　マーティンにメトフィエスがうなずき、フツアの戦士たちに案内される。
「マナ枯渇まで、６時間を突破。危険域に入りました！」
　ジョシュの悲鳴にハルオは奥歯を噛みしめた。これ以上マナを奪われると地球の生態系が回復不可能になってしまうおそれがある。
　モーリ以下、人類とビルサルド、エクシフの異星人３０００人が結集し、最後の力をふりしぼって暴虐の王にあらがい、ギドラの肉体を内側から拘束する。彼らの死にもまさる苦痛と、それすら焼き焦がす闘志は、ガルビトリウムの結晶を通じてメトフィエスにも痛察するにあまりあった。感じ取れる乗員の意識がひとり、またひとりと消えていく。
　好機をのがさず、ジェットジャガーが流星人間となってすばやく飛翔し、ギドラの中央頭部のすぐ横に定位。宇宙超怪獣の重力と釣り合う推力のブースターを噴かせながら、合掌。その合わせた両手が、天を衝かんばかりに急激に伸びる。どこまでも伸びる。
　鋼の巨人はハイパーランスの応用で両手を伸長させ、全長５０キロにおよぶ長大な剣を形成していた。しかもその剣は正面からでは視認できない。刃の厚さが単分子、つまり分子１個ぶんしかないからだ。質量の大半をつぎこんだナノメタルの長剣、ヴァリアブル・スライサーを大上段に構え、裂帛の気合いとともに真下へ振りぬく。銀の大瀑布となった単分子の巨刃は、ギドラの中央の頭のすぐ後ろの頸部を、断頭台のように縦断。熱線さえ受け付けなかったはずの外皮を分

断していく。数千億トンという抵抗の過負荷にジェットジャガーの腕の部品が破裂していくが、止まらない。
ハルオには、ユウコやアダムたちの血を吐くような勇壮な雄叫びが聞こえるようだった。
刃が描く半円の軌道はギドラの喉まで両断。完全に下へと振りきった。
代償として、白刃が切っ先から砂のように崩れる。その瓦解の波は剣の根元、ジェットジャガーの手首を通り越して、両の肩にまで達した。銀の雨。巨人は両腕をなくしたオブジェとなった。大部分の質量を失ったことで発電力が極度に低下。プラズマブースターも息絶えたことで、石のように地表へ墜ちていく。
概算で直径２００キロはあるギドラの首は、刃長５０キロの剣でも一刀のもとに断頭することはできない。世界の裂け目のような喉の切り口から、白く反射する芥子粒（けし）がいくつもこぼれ落ちて、ギドラの重力に吸い寄せられて潰れていく。ハルオが注視すると、それはナノメタルの体を得た大蛇の群れだった。口腔からドリルで体内へ浸入していた何千匹という大蛇が、ギドラの首と頭の接合部を内部から集中的に穿ち、外皮の強度をいちじるしく低下させていたのだ。
内側からの掘削。単分子の大剣。その併せ技が、神にもひとしい宇宙超怪獣の首をなかばまでとはいえ切り裂くという偉業をなしえたのである。
旋回したモスラが、切り口へ残りすべての分身を突撃させる。マッハ８５のおそるべき超高速の分身がわれさきに殺到して着弾。傷の裂け目が拡大していく。ハルオもレールガンを連発する。
巨蛾とナノメタルの猛禽による追撃が重なる。
ヴァルチャーの質量を削るレールガンの連射で、機体の維持に問題が発生。これ以上の砲撃は発電力の低下を招く。レールガンにとっては火力の低下にほかならない。ハルオは決断した。光学映像上でギドラの傷口をタップ。自動操縦モードに変更。発電能力を意図的にオーバーロードさせる。
射出レバーを渾身の力で引いて、座席ごと自らをヴァルチャー機外

へ脱出させた。
操縦者を失ったヴァルチャーが最後の指令のままギドラへ突撃していく。傷口に飛び込んだところで、暴走していた電力により、生成していた重水素と三重水素を極低温で液化させ、マイナスの電荷をもつ負ミューオンを導入。負ミューオンが電気的反発力を中和することでふたつの原子核が容易に近づくことができるようになり、衝突してヘリウム核と中性子と熱量が生まれる。たった1個の原子が17.6メガ電子ボルトの熱量に変換され、自由になったミューオン粒子は次の反応へと向かう。ミューオン粒子は2.2マイクロ秒の寿命が尽きるまでのあいだに250回もの核融合反応を連鎖的に引き起こす。理論上はわずか1グラムの重水素と三重水素から3億3600万ジュールもの熱量が発生することになる。
禁断の核融合が放出する数百万度の炎は直径70キロのまばゆい火球となり、吠え猛る輻射熱が傷口を抉った。熱波と轟音がパラシュートで降下するハルオにも押し寄せた。
動けないギドラの中央頭部が、ついにあらぬ方向を向いて折れた。首はしばらく皮一枚でつながっていたが、頭が裏返ってねじれ、質量を支えきれずに伸びきって破断。最後は地球の重力が黄金龍の首をひきちぎった。超々質量が重力加速度にしたがって列島の東海地方に落着し、山を潰し、地を割り、谷を山脈に隆起させ、破滅的に地形を変貌させた。巻き上げられた土砂と粉塵の柱は成層圏のさらに上、中間圏まで届く。口をだらしなくあけて横たわっていたセンターヘッドは量子崩壊。マナの光へ全質量が変換されて消滅した。
残るは右の頭部のみ。
死力を尽くして右の首がのたうち、引力光線を乱射する。壮絶な稲妻は、旧ロシア領の極東に大断層帯を生み、旧中国領と旧モンゴル領をまたぐ幅100キロメートル、深さ1キロメートルの溝を掘り、ハワイ諸島を粉砕し、太平洋を越えた旧アラスカ、旧カナダまでも蹂躙した。まるで神話に伝わる天地創造の瞬間を目撃しているような情景。とうとうモーリ船長らでも抑えきれなくなった。
モスラが雄飛しながら触覚からのビーム、3つの単眼の赤外線レー

ザー、胸部からの雷撃で、龍の顔を舐める。もう分身はない。鱗粉の乱費で、美しかった翅もぼろぼろになっている。

もういちど触覚のビームを射とうとしたところで、ギドラがアラトラム乗員らの縛鎖を力任せに引きちぎるようにして、砲台である顔をモスラに指向。引力光線を放射した。

地球の２０００億倍もの重力加速度が、鱗粉が剥げて飛行能力の低下していたモスラに光速の重力波によってもたらされる。わずかに逸れていたものの、巨大蛾の右の翅が付け根から引き抜かれ、６本の歩脚のうち４本が水素結合を解かれて崩壊、被毛につつまれた腹部が破れ、内臓と濃い黄色の体液をぶち撒けた。

マイナとミアナの悲鳴が長く響きわたった。

揚力を生めなくなったモスラは、飛行の慣性と重力との合成ベクトルを漏れ出る体液の尾で瑠璃色の空に描きながら、北海道へと墜落した。

四国で倒れ伏していたジェットジャガーの両目が点灯する。弱々しく明滅している目の光が、巨人の現状を物語る。腕の左右ともないジェットジャガーは、それでもなんとか立ち上がり、ありったけの電力をかき集めて、プラズマブースターを始動。銀の弾道弾となって、北海道をめざす。

なすすべなく死滅するしかないはずの小さきものどもは、実は剣呑な敵であったと認識しはじめていたギドラが、それを見のがすはずもなかった。長い首に放物線を象らせ、成層圏から北海道をねらう。

ギドラの首の動きは、見えない手綱に北海道とは反対方向へ引っ張られているかのように鈍い。モーリ船長らが全身全霊をそそいで束縛しているためだ。だがそれももう限界であるだろうということは、ギドラを見上げるだれの目にも明白だった。

北海道の中央に位置する上川盆地の樹林に、ジェットジャガーはほとんど墜落するように着地した。惰性で何度も転がる。体高８００メートルの巨人の天と地が逆さまになるたびに、数十メートル級の大樹が火花をあげ、金属の悲鳴をあげてへし折られ、宙高く舞い上がった。

回転の終点で右足にたたらを踏ませ、大地を削りながら強制停止。
巨人がふらつきながらも山に囲まれたモスラに歩み寄る。
伏せている巨蛾は、中性子星なみの重力にむしりとられた右翅の付け根から、体液に濡れた飛翔筋が引きずり出され、無惨な断裂面を晒していた。乱雑に割かれた腹部からは、太い中腸や後腸、マルピーギ管に卵巣がこぼれ、細長い心臓までが外にはみ出ている。脈動にあわせて粘度の高い血液が流出して、大河を形成していた。
フツアの守護神といえど、致命傷だった。
ジェットジャガーがモスラの眼前で片膝をつく。
瀕死のモスラが触覚を痙攣させつつも、仏像のような巨人の顔を見上げる。
フツアの巫女ふたりが思い詰めた顔で北の空を見守る。
ギドラが錆びついた機械のようにぎこちないながらも、引力光線の効果範囲内に北海道を収めようとする。
唐突に、ギドラがぎくりと西へ顔を向けた。
異変に、降下中のハルオも、遠望していたマーティンたちも、龍とおなじ方向へ首を巡らせる。
フツアの集落から遠く離れた小高い丘に、孤影があった。長身に金の髪、中性的な白皙（はくせき）の美貌。神に選ばれて神託を授けられる預言者のような人影は、緑の蛍光を放つ鉱石を捧げ持っていた。
「メトフィエス！　なにを……」
ハルオには理解できない。ガルビトリウムを持ったまま外に出ればギドラの標的だ。
「献身こそが救済への道」
メトフィエスの声には断固たる決意があった。
「わが星を喰らった金色の王よ、おまえのねらうべきものは、これだろう！」
高く掲げられたガルビトリウム結晶が翡翠に輝く。
ギドラの２５００キロメートルの首は、北海道方面から関東地方上空へ移動をはじめた。死にかけの蛾とロボットにとどめを刺すより、自分を戒める奇怪な力の源泉を断つほうが先決と判断したのだ。メ

トフィエスを射程にとらえた黄金龍の口腔に、超新星のごとき光が宿る。
「ハルオ」
ヘルメット内にメトフィエスの声が響いた。春風駘蕩（しゅんぷうたいとう）とした、穏やかな声だった。
「怪獣のいない世界を、わたしの代わりに見てくれ。きみの勝利をわたしは信じている」
メトフィエスは腕を横に広げて受け入れた。母星を滅ぼした仇敵を真正面から見据える。
「宇宙知性よ。おまえが食物連鎖の頂点として、ギドラを創造したというのならば」エクシフ最後の生き残りは、自身の絶対の死を前にして、晴れ晴れとした表情を浮かべた。「伏して拝むがいい、黄金（ギドラ）の終焉を」
龍とメトフィエスが引力光線で結ばれた。メトフィエスは立っていた丘陵ごと分子構造から分解され、ガルビトリウムもろとも、痕跡ひとつ残さずこの世から消失した。
力がほぼ失われかけていたとはいえ、モーリ船長たち執念の拘束から、ギドラが完全に解き放たれる。
だが、そのためにギドラが払った時間という対価は大きかった。北海道の密林では、ジェットジャガーの輪郭が崩れ、膨大な液体金属の奔流になったかと思うと、モスラにふりかかり、守護神獣の損傷部位を補填、そこへ地球からの餞別といわんばかりに落雷が直撃する。
後光を背負って羽ばたかれたのは、鋼と虹の翼。
体毛でおおわれていた頭部は、白銀に装甲され、胸部と腹もナノメタルの金属光沢を放つ。
右の翅は機械で復元。左の翅の前縁部が金属でふちどられて強化される。
力強く打ち下ろされる翅は、その強靭な生命力の発露。
機械と生物が融合し、さながら、モスラがナノメタルの鎧をまとっているかのようだった。
「まさに……鎧モスラ」

マーティンが奇跡を目の当たりにしたように驚嘆した。
「神と、毒の鋼が」「わかりあえた」
マイナが右手を胸にあて、ミアナが左の手を胸にあてる。
「毒の鋼は、この星を呑み込む邪悪なものだった。でもいまはちがう」
「いまは、この星を守るために戦っている。自分がどんな存在であるかは、自分で決めることができる」
ギドラが反応するより早く、鎧モスラが銀と極彩色の全身に過剰なまでの電荷を帯びて、一条の光線になって飛翔。ギドラの右頭部の喉元を通り過ぎざまに重質金属の翅を刃として斬っていく。
直径２００キロメートルの龍の首から、頭部が真下へずれる。なめらかな断面を露(あらわ)にして、ギドラ最後の頭が落下。ついに3本の首すべてが無頭となる。
「すごい……」
ベンジャミンが固唾を呑んだ。
鎧モスラが緩やかに旋回する。
首なしとなったギドラが両翼と尾を地殻に刺しこんだまま沈黙している。特異点発現の兆候はない。
「マナ枯渇まで、あと3時間です！」
われに返ったジョシュが青くなって報(しら)せた。
「しまった。やつはぼくらと戦う必要はないんだ。マナさえ吸収できれば、それでやつは自動的に勝利するんだ」
マーティンはほぞを噛んだ。
甲冑に身を固めた武神のごとき鎧モスラがギドラの正面に回る。ナノメタル粒子と鱗粉の吹雪が、鋼色の巨蛾を中心に水平の円環をなす。とてつもないエネルギーが雷電となって迸る。そのエネルギーフィールドの直径は、日本列島をふくめたアジア太平洋地域がまるごと入るほどだった。
「なにをする気だ」
兜をかぶったようなモスラの横顔が、ハルオには幽趣佳境(ゆうしゅかきょう)なほどに凛々しく映った。
「モスラの、最後の武器です」

双子の巫女が和音を奏でる。ふたりの目尻からは透明な涙が静かに流れていた。

鎧モスラが、円環の力場を土星の輪のようにまとったまま南下し、ギドラに接近。２５００キロの長距離を玉響（たまゆら）のうちに翔破して、宇宙超怪獣の３つの首が分岐する根本に突撃した。

眩しい光が弾けた。力場は環状から３次元の球状に展開。つぎに等体積の立方体となる。鎧モスラと、ギドラの胴体の大部分が、ちりばめた星のように光る微粒子で構成された、１辺が７２５．３９６１キロメートルの立方体に閉じ込められていた。

その立方体が、３×３×３の２７の区画に分けられ、まず各面の中央１個と、中心部の１個、計７個を取り除いて、自己相似形の穴を開ける。残った２０個の立方体に対してもおなじことを繰り返す。自己相似形の穴が開けられるたび、表面積は１／３増加して最終的に無限大に発散し、体積は７／２７ずつ減少していって最終的には０に収束する。自己相似図形は相似次元であり、ｌｏｇ２０／ｌｏｇ３＝２．７２６８……次元となるが、あくまで３次元の近似値にすぎず、３次元に到達することは永遠にない。

つまり鎧モスラのエネルギーフィールドにまきこまれた物質は、その空間ごと、２次元と３次元の中間に浮遊する存在となってしまい、永久に３次元世界には干渉できなくなる。次元の壁で隔絶されるのだ。

モスラのもつ力、ナノメタルの発電力と演算力が噛み合ってはじめて成立する、人智を超越した所行だった。

立方体が自己相似形の果てに体積を失い、ギドラの胴体と、中心にいるモスラが、視認できなくなっていく。

この超級の術式を完璧に発動するには、フィールドに均等にエネルギーを供給できる中心にモスラがいなければならない。

鎧モスラは、ギドラの質量の何割かを道連れにして、死ぬことすら許されない永遠の無の世界、異次元の牢獄にみずから幽閉されることを選んだのだ。

やがて立方体の体積が０になり、そこに存在していたあらゆるもの

が１ｏｇ２０／１ｏｇ３次元の虚無へと旅立つ。
そこに残ったのは、それぞれ後半部のみの両翼と、南極圏に刺さる双尾、それらをなんとか結ぶ胴体の残骸だけだった。少なくとも、胴の上から半分以上は消え去ってしまっている。
その直上の、青みを帯びはじめた空に、黒い染みがにじむ。球対称に拡大し、未知の銀河が覗く特異点がひらく。闇の球体の中心部分から肉色が現れる。それは体長６６６メートルの胎児のようなコアとして顕現した。やはり周囲を繭のようなほの白い膜でつつんでいる。
動物の二大本能は、闘争と逃走である。勝てそうな敵には戦いをいどむ。強敵とみれば逃げる。逃走も重要な生存戦略である。
だが、ギドラは強すぎた。惑星級の巨体で圧倒し、重力波を行使し、近寄る生物を無条件で量子変換できて、さらには本体ともいえるコアははるかかなたの宇宙にある。攻防ともに、まさに宇宙最強の怪獣にして、神の呼び名にふさわしい究極生物だ。
ゆえにギドラはおそらく苦境におちいったことがない。負けることがないので逃走の本能が退化していった。それが宇宙超怪獣の進化だった。
だから、ギドラは肉体の大部分を奪われてなお、撤退という選択肢をとれなかった。弱点であるコアを露出させてまで肉体を再構成させるルーティンを、この期におよんでまで実行したのである。
「コアが実体化した。いまなら倒せるぞ、ゴジラ！」
マーティンが櫓からあらんかぎりの声を飛ばした。
地上で、いまのいままでエネルギーを溜めていたゴジラが背びれを激しく発光させる。空気の絶縁限界を超えた青電が、怪獣王の怒気に同調するように赤い迅雷に変わる。
地球の支配者が鎌首をもたげる。成層圏上層に浮かぶ超巨大な胎児を正確に照準。
背びれ付近で跳ねていた赤い電光が最活性化し、ゴジラの周囲を半球状につつむようにして、幾星霜を重ねた顔の前に集中。
老哲人のような雰囲気さえあるゴジラの瞳孔が収縮し、直後、赤く渦を巻く熱線が、ギドラのコアへとわき目もふらずに上昇した。

大気を貫き、膜に直撃。亜光速まで加速された荷電粒子の超々運動エネルギーが膜を強引に押し込んでいく。内側へ伸ばされた膜の先端が、もう少しで内部にたゆたう胎児に届きそうになる。

そこで熱線が着弾点から幾条にも分散させられ、膜の表面に沿ってあさっての方向へ、ばらばらに飛んでいった。

熱線の放射が終わった。

胎児は傷ひとつついていない。繭が不定形に揺れているだけだ。

きらめく黄金の粒が、生き物のように配列していく。ギドラの巨体が再構成されようとしている。

人々の心に、黒い滴(しずく)が落とされる。ベンジャミンは魂が抜けたように崩れ落ちた。マーティンも足腰から力が抜けて、倒れないように櫓の手すりにしがみついているのがやっとだった。

「全部、むだだったんですね」

ベンジャミンがこぼした。その顔には表情というものがなかった。ジョシュの手元の立体光学映像にはマナ枯渇までの時間が2時間に迫ったことが表示されていた。

「タニ曹長や、アダム少尉たちや、モスラや、あの翼竜たちや、モーリ船長たちや、メトフィエス中佐……。みんなの犠牲も、努力も、全部、むだだったんだ……」

だれも、なにも言えなかった。

沈黙を破るように、隻腕のゴジラが、空にむかって、長い、長い咆哮をあげた。咆哮は四方に轟き、世界をあまねく行き至った。

地表面をくまなくおおう世界中の森林で、動きがあった。

遠くアフリカ大陸の旧エジプト領が沈む悠久の森から、地響きの伴奏とともに、1座の小山が悠揚迫らずその身を持ち上げた。2本の頑強な後肢で立つと、体高はおよそ50メートルもあった。筋肉だけが組み合わさったような体、広い胸に筋肉質の前肢。山のような背中には、鋸歯状の3列の背びれが連なっている。棘の並ぶ尾はどこまでも続くかと思われるほど長い。

その姿を目撃した人類がいたなら、彼がゴジラであることをつゆほども疑わなかったはずだ。正確には、大元となるゴジラ・アースから

分裂して増殖したゴジラ・フィリウス（ゴジラの子孫）――ハルオたち地球降下部隊が元丹沢で撃破した個体と、同種の系譜である。
旧エジプトだけでなく、旧ナイジェリア、旧ザンビアの金属林からも、別のゴジラ・フィリウスが目覚めて直立する。
海を挟んだオーストラリア大陸、北米、中南米、北欧、南欧、中東、東欧、シベリア……世界各地で休眠していたゴジラの子孫たちが、覚醒のときを迎える。体高５０メートルのものもいれば、８０メートルや１００メートルのもの、首回りに襟巻き様の器官を有する個体もいた。
ゴジラは2万年ものあいだ地球の霊長として君臨してきた。そのゴジラからフィリウスが生まれたのなら、たった1頭しか同族がいないなどということがあるはずがないのだ。
それらゴジラ・フィリウスが背びれを光らせると、一様に空へ向けて、先史時代の恐竜にも似た顎をひらき、そこから青い光を放射した。熱線ではない。喉の奥から噴射されている。
地球上に拡散していたゴジラ・フィリウスの全個体から放出されたエネルギーは、ある一点に集中した。日本列島、富士山麓、ゴジラ・アースの上空だ。オリジナルであるゴジラの背びれに、全世界のフィリウスたちからエネルギーがそそぎこまれる。
蓄積しつづけてきたエネルギーをゴジラ・アースへすべて託したあと、フィリウスたちは立ち枯れした巨木のように指一本動かなくなり、その双肩に担っていた役目を終えて、永遠の眠りについた。
あふれんばかりのエネルギーを一身に注入されたゴジラ・アースは、体内が暴走状態に入りそうになるのを抑え込みながら、ふたたび忌々しい胎児を睨んだ。太い肢で地を踏みしめる。いままでにないパワーがゴジラの背びれから顔前に集束されていく。
「ギドラ、おまえの知らないものが地球にふたつある」ハルオが言葉を投げかける。「ひとつはおれたちのあきらめの悪さ。もうひとつは――ゴジラだ！」
光輝の高まりが最高潮に達した次の瞬間、世界が白く染まった。
だれもが顔を背けて腕で庇った。ハルオにせよ、マーティンたちに

せよ、光を目にしたのはコンマ数秒にすぎなかったにもかかわらず、眼球の奥が白熱していて、まぶたの裏で偽の太陽が踊っていた。もう数ミリ秒長く直視していれば網膜が焼き切れていただろう。

ゴジラから発射された熱線は、青でも赤でもなく、あらゆる波長の光が重なった、眩い白光だった。白熱光というべき怒濤の奔流が、直線でコアの膜に突き刺さる。

半透明な燐光の繭が内側に伸びる。防護膜が全力で抵抗。

かまわず怪獣王の白き奔流が挑みつづける。

ついに膜の弾性限界を突破。破孔から突入した白く輝く射線が、内部で未発達な手足を縮こまらせている大質量の胎児までも貫通する。

破られた球状の膜は大気に溶けるように消失。

裸となったコアはいびつに膨れたと思うと、空気を入れすぎた風船のように薄皮がはじけ、暁闇の空を焦がすほどの大爆発を起こした。環天頂アークを思わせる水平の虹の円環が、爆心から同心円状に何重にも拡がっていく。

高々度核爆発など比較にならない強烈な電磁パルスが放射され、電磁波遮蔽の施されている電子機器でさえ残らず火花を吹いた。気密服の機能で破壊されなかったのは電子化していない酸素モジュールくらいなものだ。

コアを喪失したことで、ほぼ完成されかかっていたギドラの全身が、無目的なマナに分解され、塵に帰っていく。

支える仮想力の源がなくなった特異点は、物理法則にのっとり急激に小さくなって、払暁の東雲に穿たれた黒点となり、それも完全に蒸発した。

ギドラの重力が消失したことで、吸い上げられていた海水が反転、豪雨となって地上と海に叩きつけられる。潮位が急上昇して世界中の沿岸が大津波の洗礼を受けた。東アジアでは山や地盤が落下し、荒々しく地球へ戻ってくる。

塩水の驟雨が過ぎ去り、東の空が紫とピンクと群青の複雑なグラデーションで彩られ、荘厳な天明で山々から夜を拭っていく。

ハルオは無限の荒野に低い山を見つけて、岩をつかみながら登っ

た。

視界がひらける。

組織に金属成分を多量にふくむとはいえ、樹木が鬱蒼と生い繁って平穏な混沌にあった極相の深山幽谷は、たったひと晩の天変地異に徹底的に掘り返され、踏みにじられ、見渡すかぎりの荒涼たる禿げ山と化していた。列島全土どころか全大陸が似たようなものだろう。あるいは、ここよりもっと苛烈な破壊の嵐が吹き荒れたところもあるかもしれない。

ふいに、ほぼ正面からの強い光が、ヘルメットのバイザーごしにハルオの目を射抜いた。手を翳(かざ)す。熱線でも引力光線でもない。茜の被衣(かずき)をかぶった旭日(きょくじつ)が天門をこじあけ、金時山と長尾峠をむすぶ稜線を踏みしめながら歩いてくる。地球の生命を原初より育んできた太陽の光。大気を透過した、燦々たる暖かな恵みの光だった。

曙光のつくる長い影に、ひときわ大きく、しかも動くものがあったことにハルオが気づいた。

後肢でそびえるように立つ全身像は太古の恐竜を思わせたが、背景の山襞と比較すると、体高は３００メートルはある。

柊の葉のように縁がぎざぎざの背びれが背部に連続している。後方へ流れる尾の長さは体高をすら超えるだろうか。

まさしくゴジラであった。怪獣王ゴジラこそ、地球の命運をかけた戦いで、最後まで立っていた怪獣だった。

静謐な朝焼けのなか、彫像のように立ち尽くすその大怪獣の頭部から、灰のような細片がこぼれ落ちていることを、ハルオの双の眸が捉えた。バイザーの表面を手で乱暴に拭いて、視覚に全神経を集める。真理を探究するために隠遁した老哲人のような顔だけでなく、がっしりした肩や筋骨隆々たる胸板、右腕や、地形にひとしい背中が、風霜に耐えた老樹がその歴史の終わりに末枯(うらが)れするように、こけらとなって崩れはじめていた。

たびかさなる引力光線の被弾と、全地上のフィリウスから結集した最強の熱線、白熱光の発射の反動で、ゴジラの巨躯が限界を迎えたのだ。

ゴジラはあらがうこともなく、ただ悠然と、自らの崩壊を曇りのない透徹した瞳で見つめていた。
ハルオの胸に、種々雑多な思いがいちどきに去来した。気がつけば、ハルオは踵をそろえ、背筋をのばし、崩れゆくゴジラにむけて敬礼を捧げていた。
ゴジラが両親の仇として憎悪すべき敵であることには変わりがない。だが、ともに死闘をくぐりぬけ、神のごとき破壊者を打ち破ったいま、ただの敵だとは断言できない感慨のようなものがあった。
いや、そもそも、４歳のときに目の前でゴジラに両親を葬られてから２０年間、ハルオの全知全能はゴジラを倒すことだけに傾けられてきた。ゴジラのことを考えなかった日はない。ゴジラしか眼中になかった。至上の純愛にも似た憎悪にわが身を焦がした。ある意味で、ゴジラはハルオの人生のすべてだったのだ。
その、恋焦(く)がれるように再会を希求していた存在が、自らの役目を完璧に遂行し、従容と朽ち果てていく光景を見ることは、ハルオにはまるで半身を裂かれるような思いであった。
ハルオは溢れる涙をこらえようもなかった。歔欷(きよき)しながらも敬礼は崩さず、仇の最期をそのぼやけた眼底に焼きつけた。
この地球人と、美しい朝日に見守られ、怪獣王ゴジラは全身が無数の破片に崩れ落ち、地球(ほし)の大地へと還っていった。最後の咆哮が、あくまで誇り高く、厳(おごそ)かに響きわたった。
フツアの集落に戻ると、マーティンやミアナたちが大喜びでハルオを出迎えた。生きて再会できたことを喜ぶ一方、ハルオの顔は、どこか冴えなかった。
「メトフィエスに、ユウコ、アダム、モーリ船長やアラトラム号のみんな。……あまりにも多くのものを失いすぎた」
悔やむハルオにマーティンは頷いて、
「だからこそ、いまは素直に勝利を喜ぼう。それが彼らへの手向けになる」
「おれたちは、勝ったんでしょうか」
ゴジラが崩れ去った方角をハルオは望見した。

「結局、最後はゴジラに救われた……」
　ふむ、とマーティンは顎に手を当てた。
「たしかに最後のひと押しはゴジラがいればこそだった。しかし、こう考えることもできる。いくら2万年ぶんたくわえたエネルギーの熱線があったとしても、異次元に隠れているギドラのコアを出現させてから攻撃するなんて芸当は、ゴジラ単体ではさすがに荷が重い。サカキ大尉やユウコくん、アダム少尉、モスラ、メトフィエス中佐、乗員のみんな、それぞれが全力をつくした援護があったからこそ、ゴジラはギドラに勝てた、とね」
　意表をつく意見にハルオが顔をあげる。マーティンは肩をすくめて受け止めた。
「もちろん、傲慢になってはいけない。けれども、ぼくたちが一丸となって戦ったことで、ギドラを倒して地球を救う一助になれたことはたしかなはずだ。すこしくらいは胸を張ってもいいんじゃないかな」
　マーティンに諭されて、ハルオの表情はいくぶんやわらいだ。
「地球に住む資格は得られた。そう思っていいんでしょうか」
「これはさっき浮かんだ仮説なんだが、ゴジラがとどめに射った白い熱線があっただろう？　もし本当にゴジラがギドラから地球を守るために創られた存在だったとしたら、あの白熱光を最初から使っていたはずなんだ」
　言われてハルオは思い出していた。たしかにゴジラはコアを射つとき、個体としては最大出力なのであろう赤色熱線を発射し、通用しないとみると白い熱線に切り替えた。そこにはゴジラの苦渋の決断が見てとれた。白熱光はおそらく一度しか使えない切り札だったのだろう。
「それをゴジラは温存しようとしていた」
　マーティンがなにを言おうとしているのか、ハルオにもうすうすわかった。
「いつかはわからないが、将来的にギドラと同様の、あるいはそれ以上の脅威が地球を襲う可能性がある……？」
　ハルオの推論にマーティンが首肯した。

「その仮定が正しいとすると、ゴジラはそちらよりも目の前のギドラに、たった1枚きりの鬼札を切った。なぜか。なんの論拠もないがね、おそらくは、あとに残されるものたちに、この星の未来を託したということなんじゃないか。そのなかには、ぼくたち人類もふくまれてるんじゃないか」
「だといいですが」
　ハルオは苦笑した。マーティンが自分で言うように根拠は弱い。だがハルオの答えは決まっている。
「そう考えていいのなら、おれたちは地球からもう一度チャンスをもらったということになります。人類は地球に一度拒絶された。地球を裏切れば自分たちにしっぺ返しがくると学んだ。おれたちは忘れないでしょうが、世代が変わっていけば記憶は風化します」
　歴史を見ても、人類は何度もおなじあやまちを繰り返している。世代が入れ替わるごとに先人の教訓を忘れては轍（てつ）を踏んできた。その連続だった。
「だから、おれたちは、きょうのことを語り継がなければならない。人類が多大な犠牲と引き換えに、この手で地球の住人としての資格を勝ち取ったことを。地球はいつでも人類を追い出せるのだと。かつてそうしたように」
　太陽が一日の生まれ変わりを告げる空の反対側、西の空には、瑞雲が昇っている。
「地球はアラトラム号とおなじです。おれたちは、地球という宇宙船の乗員なんです。宇宙船なら物資は大切に使うし、部品を勝手に抜いたり、壊したりするようなまねはしません。自分たちの命に直結するとわかっているからです。だが、星となると、資源は無尽蔵にあって、どんなに環境を破壊しても元どおりになると、なぜか勘違いをしてしまう。そうして、自分たちの宇宙船を自分たちの手で住めないようにしてしまう」
　アラトラムでの生活を思い出す。食事が水のパックひとつだけという日もあった。船内空間は有限で、出航時に積載できた物資も有限、循環する元素もまた当然ながら有限で、満足な食事すら事欠くほ

ど資源に窮乏していたからだ。規模が違うだけで、地球もアラトラムと本質的には変わらない。資源は有限なのだ。
「おれたちは地球に監視されている。ですがそれは、見守られているということでもあるんです。人類が取り返しのつかないあやまちを犯さないかどうか。自分であやまちに気づけない人類のために、ゴジラが警鐘を鳴らしてくれていたのかもしれない」
　ゴジラが出現しないような世界をつくることが、ひいては人類が地球で繁栄する環境を守っていくことにつながる。
「地球をふたたび裏切らないためにも、おれたちはゴジラが現れない世界を未来に遺していかなきゃならない。高いビルを建てることだけが繁栄じゃない。石油を燃やし、核を、科学をもてあそぶことだけが繁栄じゃない。――人類は特別な生き物じゃない。おれたちは地球を征服するんじゃなく、共生の道を探らなくてはならないんです。おれたちの体の細胞が、協力しあって人体を構成しているように」
　先刻まで宇宙超怪獣に支配されていた空を仰ぐ。
「ギドラから学んだこともあります。欲望のままにすべてを食いつくし、それでもなお、まだ足りないと求めて肥大化していけば、行き着く先は自らの破滅です。人類はギドラになってはいけない」
　マーティンもジョシュも、ベンジャミンも、熱心に聞き入っていた。
「それを忘れずにいれば、たとえまたギドラが襲ってきても、人類はきっと克服できる。ゴジラがおれたちを信じてくれたように、おれたちも、未来を信じなくてはいけない。信じられる未来にしなければならない。たとえそれが、2万年後だとしても」
「ぼくらは地球に監視されている、か。地球で生きるに値する存在かどうか……」
　マーティンが感銘を受けたように言ったとき、腹の音が鳴った。ジョシュだった。赤くなって頭をかく。人々から笑いがこぼれた。空腹を覚える程度の余裕は出てきた。
「2万年後の未来もだいじだが、まずはきょうをどう生きるかも、おなじくらいだいじなようだ」
　マーティンが茶化すとハルオでさえ口元を緩めた。また眉間に亀

裂のようなしわを刻んで、旧御殿場方面を見やる。まだそこにゴジラがいるかのように。
「だが」ハルオは虚脱したような顔だった。ゴジラの打倒にすべてのエネルギーを燃やしてきた。その目標が失われた。「おれ個人としての役目は終わった……」
「終わって、ない」
ミアナが即答した。振り向くと、銀の前髪の下、青い瞳には、必死さがあった。
「生き物の役目、生き抜くこと。わたし、ハルオが戦う姿から、それ学んだ。だから、生きること、ハルオの役目」
ハルオの右手をミアナが両手で包み込んだ。海色の瞳孔で見上げる。
「わたしは、ハルオといっしょに、生きたい」
ハルオの胸は高鳴った。新たな目標はすぐそばにあった。自然とほほえむ。
「ありがとう、ミアナ」
マーティンがジョシュとベンジャミンをけしかけて、3人で気密服の分厚いグローブのまま器用に指笛を吹いて混ぜっ返した。
ハルオたちはフツアの村への帰化を決めた。行き場所はないし、フツア族も歓迎してくれた。気密服を脱ぎ、フツアの衣装をまとい、独自の化粧も覚えた。ほぼ半裸に近い装いに最初は戸惑ったが、周りの全員がおなじ格好なのですぐに慣れた。アラトラムの生き残りでもっともフツアの女性にもてたのはマーティンだった。マーティンが複数の女性に言い寄られているところへ、ハルオはいつぞやの仕返しとばかりに盛大に囃し立ててやった。
しかし、ジョシュやベンジャミンらもつがいを見つけていくなか、ハルオはまだミアナの想いに答えられずにいた。こうしているあいだも、モスラとともにユウコは異次元の牢獄で永遠の虚無を味わいつづけている。なのに自分だけ幸せになってよいのか、決心がつかなかった。
そんなある日、ミアナは、どうしても見せたいものがあるからと、ハ

ルオの手を引っ張って連れ出した。地下集落の外だった。
白雲のただよう青空が頭上にひろがり、薫風がハルオのほほを撫でていく。
「これ」
ミアナに指し示されて、ハルオは言葉を失った。
待っていたのは、鮮やかな緑の下生えに、千紫万紅（せんしばんこう）の花々が風に揺れて爽やかにささやく、天然の庭園だった。芳しい香りがやわらかい風に混じって、鼻腔を優しくくすぐった。
「雨季の前、短いあいだだけど、花が咲くの。わたしのお気に入り。だからハルオにも見せたかった」
色とりどりの花が咲き乱れて命を謳歌する情趣は、地球に降り立ってから金属の植生しか見てこなかったハルオにとって、感動以外のなにものでもなかった。同時に、ハルオの脳裏にうごめくものがあった。こんな風景を以前に一度だけ見た覚えがある。アラトラムでは記録映像ばかり見せられたが、それとは違う。画面越しではない。たしかにこの目で見たはずなのだ。ならアラトラムに乗船する以前だろうか。そこでようやく思い出した。幼少のみぎり、両親に連れられた高原で、いまのように季節の花が咲き誇り、ほのかな甘い香りが漂っていた。そのときの両親の言葉もよみがえった。
「こんな時代でも、厳しい冬はいつか終わって、春がくる。命のよみがえる季節が」
父が霞に煙る翠黛（すいたい）を眺めながら言った。
「あなたの名前は、そう願いをこめてつけたのよ」
母が幼い息子の頭を撫でて微笑した。
父はわが子に視線をもどして、誕生日プレゼントを渡した。ペンダントだった。コケと共生しているという花が閉じ込められていた。何億年ものむかしから共生関係をつづけてきたという、地球の生命を象徴するような結晶物。父はそれを握らせた。
「ハルオ。きっと、人類の春をその目で見ておくれ」
そしていま、ハルオの前には、2万年前から変わることなく連綿とつづく地球の命の営みが、咲き競う名もなき草花というかたちで厳然

と存在している。絶対真空の宇宙にはない、季節という時間の循環。
「そうか、これが〝春〟……おれの名前……」
ハルオは、ミアナの前であることも忘れ、身も世もなく泣いた。洟(はな)をすすり、涙をぬぐい、蒼穹(そうきゅう)へ向けて、声のかぎりに叫ぶ。
「父さん！　母さん！」
ハルオは、２０年のあいだ、ずっと言いたかった言葉を口にした。
「……ただいま！……」

◇

季節は巡る。月日は流れる。
ハルオはミアナとのあいだに子供を授かった。つがいになるのがもっとも遅かったのに最初に父親になったハルオは、またもマーティンたちからさんざんに冷やかされることとなった。彼らもまた順々に人の親となった。
帰化して何度目かの春に、ハルオは外での宴会を提案した。ハルオの両親の祖国では、春になると仲間内で花を鑑賞しながら食事をし、親睦を深める風習があったという。「風流だねえ」とマーティンが乗っかり、フツアも賛成した。それがきっかけで雨季前の花見がフツアの新たな年中行事として定着した。
季節は巡る。月日は流れる。
ベンジャミンが孫に狩りを教えている最中に心不全で逝去した。老齢に加え風邪をこじらせて長く病床にあったジョシュが亡くなった。マーティンはあるときから水も食事も受け付けなくなり、衰弱して寝たきりになっていたが、笑顔だけは忘れなかった。雨季の終わりが近づいた夜、寝る前に様子を見に訪れたハルオに「ユウコくんは、いまのハルオを見て、誇りに思っているはずだ」と、すきま風のようなかすれた声ながら、歯の全部抜けた口で笑ってみせた。翌朝、マーティンは眠ったまま息を引き取っていた。
アラトラム号乗員は、ハルオだけになっていた。
ある朝、目を覚ましたときから、ハルオの心境は凪いだ海のように穏やかだった。ハルオはミアナを誘って出かけた。「花を見に行こう」

部族総出でひらかれる花見はあしたということになっていた。だが何十年も付き添ってきた伴侶は異を唱えることなく、しわこそ増えたが子供のころとおなじ、屈託のない笑顔で応じた。

ハルオは介助がなければ歩けない体になっていた。ミアナに手を取ってもらってゆっくり歩を進める。彼女は嫌な顔ひとつしない。ハルオの胸は申し訳なさでいっぱいだった。すまない、許してくれ。これで最後だから。

フツアの人口も徐々にではあるが増加を見た。環境が年々改善されていることもあいまって集落の規模も拡大している。

だがハルオは、人類という種があらゆる面で大きくなりすぎることは、断固として防いできた。資源を食いつぶし、無軌道に増殖し、その増えすぎた人口を支えるためにさらに資源を消費する。すると職業を職業として維持するために、必要ない時期でも生産するようになる。やがて、余剰生産の捌け口を求め、無限に領土を獲得していかなければならなくなる。いつまでも成長を強要される無限地獄がはじまる。産業革命はその前例だ。

ゴジラによる鉄槌は、人間の飽くなき消費と肥大の延長線上にある。だとすれば、人類がどのような繁栄の道をとれば地球環境を傷つけないか、言い換えれば、どう生きればゴジラは現れないか？　それを歩一歩たしかめながらの漸進的な発展。

これが、ハルオの新たな目標だった。

かつて人類が犯した、間違った方向へ文明を進んでしまうことをつねに糺（ただ）し、地球との共生を念頭においた文化が浸透するよう見守る。属目（しょくもく）の諸事万端がすべて、地球という名の宇宙船の部品なのだと説き、それらを大切にすることが、巡りめぐって自分たちに返ってくるのだと啓蒙しつづけた。

ゴジラをこの手で倒すことはできなかった。だからハルオは、違う方法でゴジラに戦いを挑んだ。

地球をもう二度とゴジラが生まれない世界にする。自分の世代だけではなく、次の世代、そのまた次の世代へと、その意志を受け継がせる。そうして未来をつないでいくことが、ゴジラに勝つ唯一の方法

である。そう信じて走ってきた。
ようようたどりついた庭園はひしめくような百花繚乱で、ことしの花見も盛況は間違いないだろうと確信できた。
ふたりは腰を下ろしてしばらく言葉も交わさず満開の花々を堪能した。ハルオはかたわらのミアナに言わなければならないことがあった。
「ずっと、おれのわがままに付き合わせてばかりだった」
ハルオとおなじだけ齢を重ねたミアナが、なんのことかわからないという顔を向けた。
「おれたちの子や孫に、ゴジラの災厄を味わってほしくはなかった。だからおれは、いかにしてゴジラを生まないような世界にするか、ずっとそれだけを考えていままで来た。でも、ミアナや子供たちにはなにもしてやれなかった」
子供たちの黄色い声が風に運ばれる。男たちが狩りから戻ったらしかった。
「きっと寂しい思いをさせたと思う。おまえひとりさえ幸せにできずに、世界がどうとか、何様だと思ったことも何度もある。だが、あのゴジラが、最後の1頭だとは思えない。人類が地球を傷つけ、汚すことがあったなら、また世界のどこかで、ゴジラの同類が現れるかもしれない。そう思うと、立ち止まれなかった」
花が揺れる。緑の風が抱擁していく。
「だから、おまえには悪いことをした。どう償っても……」
ハルオの唇に人差し指が触れた。ミアナが純真な笑みをたたえて顔を覗きこんでいた。
「わたしは幸せだった。ゴジラのいない世界をつくるための支えになれた。それがあの子たちに受け継がれていくんだもの。あなたはこの星をくれたのよ。これ以上の喜びなんてない」
ハルオは、どんな言葉ならミアナの気持ちに報いることができるのかわからず、しゃくりあげながら、「ありがとう」とだけ言った。
「少し、横になるよ、なんだか疲れた」
落ち着いてからハルオが草地に寝ようとすると、ミアナが「ここ」と

自分の膝を軽く叩いた。
「悪いよ」
「じゃあ、わたしのわがままだと思って」
ハルオは苦笑してその言葉に甘えた。ミアナの膝に頭を乗せる。
時間の流れがいつにも増して緩やかだった。
「来年もハナミ、できるといいね。その来年も、そのまた来年も。そのころには、ハルオもひいおじいちゃんになってたりして」
笑みをこぼしたミアナは、ハルオが返事をしないことに気づいた。
「ハルオ?……」
膝の上に乗るハルオの顔は、目を閉じたまま、その名にふさわしい春の空を思わせる晴れやかな笑顔を浮かべていた。
ミアナが震える手をハルオの口元にあてがう。しばらくして、ハルオのほほに、透明な熱いしずくが滴り落ちる。
ミアナは涙をこぼしながらも気丈に笑顔をつくって、物言わぬハルオを抱きしめた。
「やっと……やっと、〝勝てた〟ね……」
高く澄んだ青空のもと、春の甘い風が吹きわたっていく。遠くでは子供たちの歓声が響いていた。